公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第69集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(41)

長畑山北第１～６号古墳

２０１５

公益財団法人　広島県教育事業団

a　空中写真（西から）

b　長畑山北第４号古墳　墳丘全景（北から）

a　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況（南から）

b　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況（東から）

例　　言

1　本書は，平成21（2009）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う長畑山北第１～６号古墳（広島県三次市吉舎町海田原字長畑山）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により，財団法人広島県教育事業団（平成25年４月１日より公益財団法人に移行）が実施した。

3　発掘調査及び出土遺物等の整理作業の担当者は，次のとおりである。

発掘調査（平成21年度）	主任調査研究員	山田繁樹
	調査研究員	新井真吾
整理作業（平成24年度）	主任調査研究員	山田繁樹
	賃金職員	下戸成葉子
（平成25年度）	調査研究員	新井真吾
	賃金職員	有原ひろみ
	賃金職員	西山梨香
（平成26年度）	主任専門員	桑原隆博
	主任調査研究員	唐口勉三
	調査研究員	新井真吾
	賃金職員	有原ひろみ

4　本書は，新井が執筆・編集した。

5　石製品の石材については，柴田喜太郎氏（考古地質学研究所）から教示を得た。

6　遺物実測図の土器の断面は，須恵器は黒塗り，土師器は白抜きである。

7　挿図の遺物番号と図版の遺物番号は，同一である。

8　本書に使用した北方位は，旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ系北である。

9　第２図は，国土交通省国土地理院発行の１：25,000の地形図「吉舎」を使用した。

10　出土品及び記録類は，広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目８番49号）で保管している。

目　　次

Ⅰ　はじめに ……(1)
Ⅱ　位置と環境 ……(9)
Ⅲ　調査の概要 ……(15)
Ⅳ　遺構と遺物 ……(19)
　1　長畑山北第1号古墳 ……(19)
　2　長畑山北第2号古墳 ……(26)
　3　長畑山北第3号古墳 ……(32)
　4　長畑山北第4号古墳 ……(41)
　5　長畑山北第5号古墳 ……(61)
　6　長畑山北第6号古墳 ……(66)
Ⅴ　まとめ ……(79)

挿　図　目　次

第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線図と調査した遺跡の位置図 ……(3)
第2図　周辺主要遺跡分布図（1：25,000） ……(11)
第3図　周辺地形図（1：1,000） ……(14)
第4図　長畑山北第1～6号古墳　調査前地形測量図（1：300） ……(17)
第5図　長畑山北第1～6号古墳　墳丘測量図（1：300） ……(18)

長畑山北第1号古墳

第6図　長畑山北第1号古墳　調査前地形測量図（1：100） ……(19)
第7図　長畑山北第1号古墳　墳丘測量図（1：100） ……(20)
第8図　長畑山北第1号古墳　墳丘土層断面実測図（1：60） ……(21)
第9図　長畑山北第1号古墳　埋葬施設実測図（1：20） ……(22)
第10図　長畑山北第1号古墳　出土遺物実測図（1）（1：3） ……(24)
第11図　長畑山北第1号古墳　出土遺物実測図（2）（1：2） ……(25)

長畑山北第2号古墳

第12図　長畑山北第2号古墳　調査前地形測量図（1：100） ……(26)
第13図　長畑山北第2号古墳　墳丘測量図（1：100） ……(27)
第14図　長畑山北第2号古墳　墳丘土層断面実測図（1：60） ……(28)
第15図　長畑山北第2号古墳　埋葬施設実測図（1：20） ……(29)

第16図　長畑山北第２号古墳　出土遺物実測図（１：１，１：２，１：３）……(31)
長畑山北第３号古墳
第17図　長畑山北第３号古墳　調査前地形測量図（１：100）……(32)
第18図　長畑山北第３号古墳　墳丘測量図（１：100）……(33)
第19図　長畑山北第３号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）……(34)
第20図　長畑山北第３号古墳　竪穴式石室実測図（１：30）……(36)
第21図　長畑山北第３号古墳　遺物出土状況実測図（１：15）……(37)
第22図　長畑山北第３号古墳　出土遺物実測図（１）（１：３）……(39)
第23図　長畑山北第３号古墳　出土遺物実測図（２）（１：２）……(40)
長畑山北第４号古墳
第24図　長畑山北第４号古墳　調査前地形測量図（１：100）……(41)
第25図　長畑山北第４号古墳　墳丘測量図（１：100）……(43)
第26図　長畑山北第４号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）……(44)
第27図　長畑山北第４号古墳　横穴式石室実測図（１）（１：30）……(46)
第28図　長畑山北第４号古墳　横穴式石室実測図（２）（１：30）……(47)
第29図　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況実測図（１）（１：20）……(49)
第30図　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況実測図（２）（１：10）……(51)
第31図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（１）（１：３）……(56)
第32図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（２）（１：３）……(57)
第33図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（３）（１：２）……(58)
第34図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（４）（１：２，１：３）……(59)
第35図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（５）（１：１，２：３）……(60)
長畑山北第５号古墳
第36図　長畑山北第５号古墳　調査前地形測量図（１：100）……(61)
第37図　長畑山北第５号古墳　墳丘測量図（１：100）……(62)
第38図　長畑山北第５号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）……(63)
第39図　長畑山北第５号古墳　埋葬施設実測図（１：20）……(65)
長畑山北第６号古墳
第40図　長畑山北第６号古墳　調査前地形測量図（１：100）……(66)
第41図　長畑山北第６号古墳　墳丘測量図（１：100）……(67)
第42図　長畑山北第６号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）……(68)
第43図　長畑山北第６号古墳　埋葬施設実測図（１：20）……(69)
第44図　長畑山北第６号古墳　出土遺物実測図（１：３，２：３）……(71)

表　目　次

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業等に伴う報告書一覧 ……（４）
第２表　出土遺物観察表 ……(72)

巻頭図版目次

巻頭図版１　a　空中写真（西から）
b　長畑山北第４号古墳　墳丘全景（北から）
巻頭図版２　a　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況（南から）
b　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況（東から）

図　版　目　次

図版１　a　空中写真（南から）
b　空中写真（北西から）
c　調査前（南西から）

長畑山北第１号古墳

図版２　a　調査前（南西から）
b　土層断面（西から）
c　土層断面（北から）
図版３　a　墳丘全景（北西から）
b　墳丘盛土断面（北から）
c　墳丘盛土断面（南から）
図版４　a　埋葬施設土層断面（南西から）
b　遺物出土状況（北西から）
c　遺物出土状況（西から）

長畑山北第２号古墳

図版５　a　調査前（北東から）
b　土層断面（北東から）
c　土層断面（南東から）
図版６　a　墳丘全景（南東から）
b　墳丘全景（北西から）
c　墳丘盛土断面（西から）
図版７　a　埋葬施設土層断面（南から）
b　埋葬施設土層断面（東から）
c　遺物出土状況（東から）

長畑山北第３号古墳

図版８　a　調査前（北から）
　　b　土層断面（北西から）
　　c　土層断面（南から）
図版９　a　墳丘全景（北から）
　　b　墳丘盛土断面（北東から）
　　c　墳丘盛土断面（南西から）
図版10　a　遺物出土状況（東から）
　　b　礫床検出状況（北から）
　　c　礫床半裁状況（東から）
図版11　a　東側壁（西から）
　　b　北小口（南から）
　　c　基底石（北から）
　　d　掘方（北から）

長畑山北第４号古墳

図版12　a　調査前（北から）
　　b　土層断面（北西から）
　　c　墳丘全景（北から）
図版13　a　墳丘盛土断面（南から）
　　b　周溝西側土層断面（南から）
　　c　周溝北側土層断面（西から）
図版14　a　遺物出土状況（北から）
　　b　遺物出土状況（東から）
　　c　遺物出土状況（北から）
図版15　a　遺物出土状況（東から）
　　b　遺物出土状況（北から）
　　c　閉塞石（東から）
図版16　a　東側壁（西から）
　　b　西側壁（東から）
　　c　基底石（北から）

長畑山北第５号古墳

図版17　a　調査前（南西から）
　　b　土層断面（南から）
　　c　土層断面（北西から）
図版18　a　墳丘全景（南西から）
　　b　墳丘全景（南から）
　　c　墳丘盛土断面（北から）
図版19　a　埋葬施設土層断面（北西から）
　　b　埋葬施設完掘状況（西から）
　　c　埋葬施設完掘状況（南から）

長畑山北第６号古墳

図版20　a　調査前（西から）
　　b　土層断面（西から）
　　c　周溝西側土層断面（南から）
図版21　a　墳丘全景（西から）
　　b　墳丘全景（南東から）
　　c　墳丘盛土断面（南から）
図版22　a　遺物出土状況（東から）
　　b　遺物出土状況（東から）
　　c　遺物出土状況（北西から）

図版23　長畑山北第１号古墳　出土遺物（須恵器・鉄器）

図版24　長畑山北第２号古墳　出土遺物（須恵器・鉄器・滑石製小玉・土玉）

　　長畑山北第３号古墳　出土遺物　１（須恵器）

図版25　長畑山北第３号古墳　出土遺物　２（須恵器・鉄器）

　　長畑山北第４号古墳　出土遺物　１（土師器）

図版26　長畑山北第４号古墳　出土遺物　２（須恵器）

図版27　長畑山北第４号古墳　出土遺物　３（須恵器）

図版28　長畑山北第４号古墳　出土遺物　４（鉄器）

図版29　長畑山北第４号古墳　出土遺物　５（鉄器）

図版30　長畑山北第４号古墳　出土遺物　６（耳環・丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉・砥石）

　　長畑山北第６号古墳　出土遺物（須恵器・土師器・石鏃・叩き石）

Ⅰ はじめに

長畑山北第１～６号古墳の発掘調査は，中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。中国横断自動車道尾道松江線は，広島県の瀬戸内海沿岸の尾道市を起点に，広島県北部の三次市を経由して島根県松江市に至る延長約137kmの高速自動車国道である。山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と連結し，中国・四国地方における高速道路ネットワークを強化する本路線は，沿線地域の社会経済・生活文化の発展に大きく寄与することが期待されている。

事業に先立ち，日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」という。）は，平成13（2001）年２月７日に，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。これを受けて県教委は現地踏査を行い，平成14（2002）年９月24日付けで「要試掘地点吉舎３」として，試掘調査が必要である旨を回答した。

その後，事業は道路公団の解散に伴い平成17（2005）年10月１日に西日本高速道路株式会社に引き継がれ，さらに平成18（2006）年４月１日には国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下「国交省」という。）に承継された。

県教委は，平成19（2007）年９月18～21日に「要試掘地点吉舎３」の試掘調査を実施し，同年10月16日付けで，５基の古墳を確認するとともに，その範囲特定のため追加の試掘調査が必要である旨，国交省に回答した。その後，平成20（2008）年10月６～７日に追加の試掘調査を行い，同年12月12日付けで長畑山北第１～５号古墳の範囲を確定した旨，国交省に回答した。この古墳の取扱いについて県教委と国交省は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達したため，国交省は平成21（2009）年２月13日付けで文化財保護法（以下「法」という。）第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を三次市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出し，市教委は国交省に対し同年２月20日付けで法第94条第４項に基づく「要発掘調査」の勧告を行った。これを受けて国交省は同年２月26日付けで財団法人広島県教育事業団（以下「事業団」という。）に長畑山北第１～５号古墳の発掘調査を依頼し，国交省と事業団は同年４月１日付けで委託契約を締結した。事業団は市教委に同年４月27日付けで法第92条１項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を提出し，市教委から同年５月11日付けで慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。

事業団は，平成21（2009）年６月29日から現地での発掘調査を開始したが，長畑山北第４号古墳と第５号古墳の間に古墳と思われる高まりが確認されたため，県教委は同年７月14日に同地点の試掘調査を実施し，同年７月17日に長畑山北第６号古墳を確認した旨，国交省に回答した。その後，国交省・県教委・市教委がこの古墳の取扱いについて協議を行った結果，設計変更による現状保存は不可能との結論に達したため，国交省は同年７月23日付けで法第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を市教委に提出し，市教委は国交省に対し同日付けで法第94条第４項に基づく「要発掘調査」の勧告を行った。これを受けて国交省は同年７月27日付けで事業団に長

畑山北第６号古墳の発掘調査を依頼した。その後，事業団は市教委に同年７月28日付けで法第92条１項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を提出し，市教委から同年７月29日付けで慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。

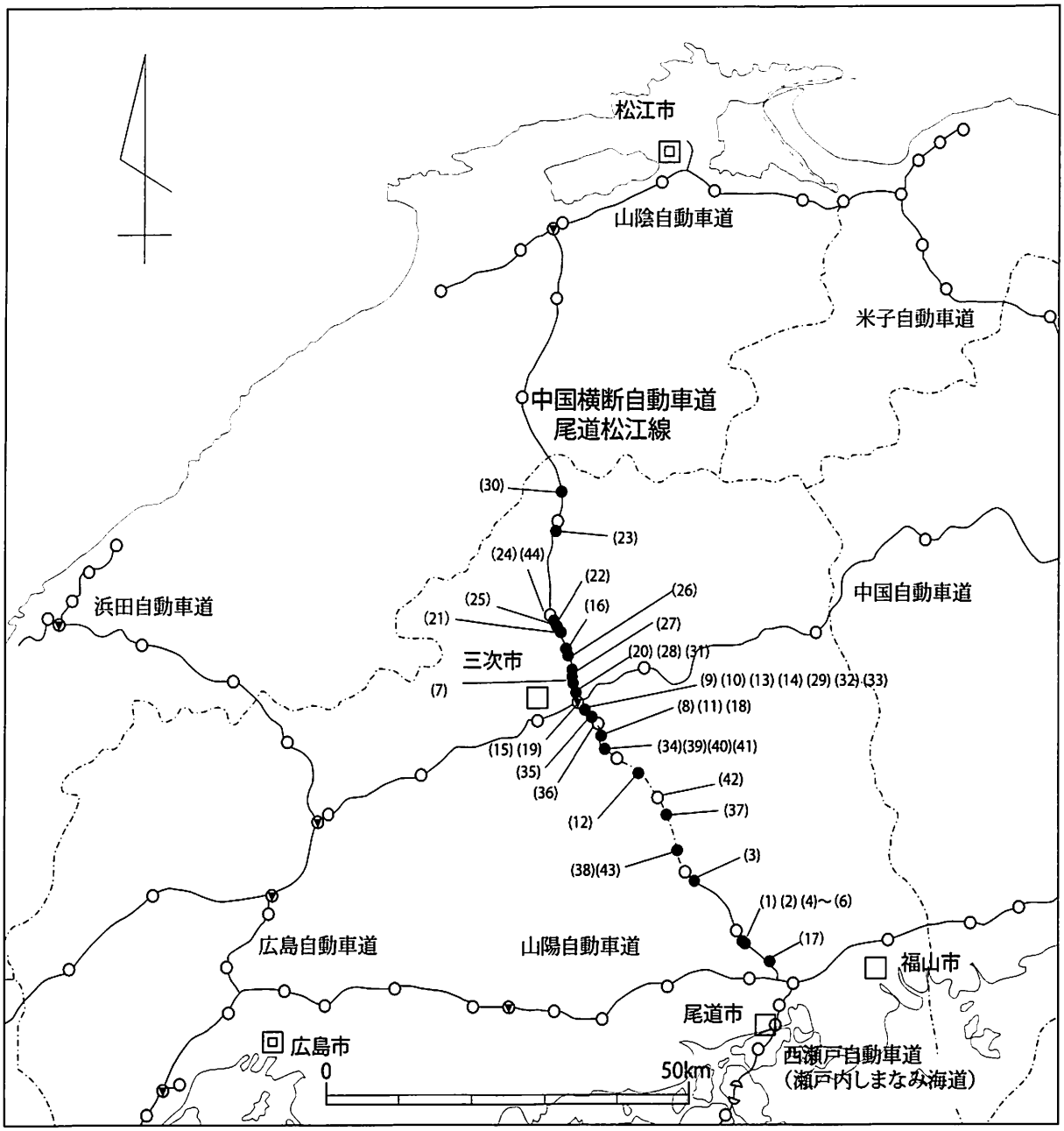
また，工事計画の変更により長畑山北第５号古墳の調査範囲の拡大が必要となったため，国交省は平成21（2009）年８月25日付けで法第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を市教委に提出し，市教委は同年８月27日付けで法第94条第４項に基づく「要発掘調査」の勧告を行った。これを受けて国交省は，同年８月27日付けで事業団に長畑山北第５号古墳の追加調査について依頼した。事業団は，市教委に同年８月28日付けで法第92条１項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を提出し，調査内容の変更を報告した。

発掘調査は，平成21（2009）年６月29日から同年12月22日まで約６か月間実施した。この期間中の同年10月21日に，事業団調査指導委員（松下正司・古瀬清秀・小都隆の各委員）による指導を受けた。なお，同年11月７日には三次市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，70名の参加があった。

本書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所，西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所，三次市教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。また，発掘期間中には，次の各氏から発掘調査方法や遺跡の評価などに関する貴重な指導・助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

加藤光臣，　新祖隆太郎（故人），　脇坂光彦　　（氏名は五十音順，敬称略）



第１図　中国横断自動車道尾道松江線路線図と調査した遺跡の位置図（１）～（44）は報告書番号

（１）牛の皮城跡（第１～３次）・曽川２号遺跡
（２）曽川１号遺跡（A～D地区）
（３）池ノ奥古墳
（４）城根遺跡・牛の皮城跡（第４次）・曽川１号遺跡（E地区）
（５）曽川１号遺跡（G～J地区）
（６）曽川１号遺跡（K地区）
（７）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳
（８）北野山遺跡
（９）向江田中山遺跡
（10）権現第１～３号古墳
（11）大番奥池第１～３・７号古墳
（12）茶臼古墳
（13）瀬戸越南古墳
（14）上陣遺跡
（15）和知白鳥遺跡（第２次）
（16）曲第２～５号古墳
（17）家ノ城跡（第１～５次）
（18）片野中山第９～12号古墳・右谷遺跡
（19）和知白鳥遺跡（第１次）
（20）段遺跡（第１・２次）
（21）川平第１号古墳・常定川平１号遺跡・常定川平２号遺跡
（22）稲干場第２～４・９号古墳
（23）只野原１号遺跡・只野原２号遺跡・只野原３号遺跡
（24）番久遺跡・原畑遺跡
（25）向泉川平１号遺跡・向泉川平２号遺跡
（26）石谷２号遺跡・石谷３号遺跡
（27）馬ヶ段遺跡・馬ヶ段第１・２号横穴墓・皇塩遺跡
（28）三瓜１号遺跡
（29）宮の本第20～26・31・32古墳
（30）岡東第１～７号古墳・岡１号遺跡・岡２号遺跡・半戸１号遺跡・岡東第１号横穴墓
（31）風呂谷遺跡・風呂谷古墳
（32）宮の本遺跡・宮の本第11・33～35号古墳
（33）箱山第３～６号古墳
（34）下矢井南第３～５号古墳
（35）若見迫遺跡・畑尻遺跡
（36）三隅山遺跡
（37）頼藤城跡
（38）杉谷遺跡
（39）海田原第24～27号古墳
（40）殿平古墳・長畑山古墳
（41）長畑山北第１～６号古墳
（42）善正平１号遺跡・善正平２号遺跡
（43）大柳遺跡
（44）原畑遺跡（第２次）

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業等に伴う報告書一覧（１）

報告冊	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
（１）	牛の皮城跡（北郭群）	第１次	畝状竪堀群	平成15年１月20日～３月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		第２次	１～４郭	平成15年７月７日～10月31日			
		第３次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川２号遺跡			平成15年１月20日～３月７日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
（２）	曽川１号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年１月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区	旧・Ｐ２第一調査区	平成15年４月７日～５月23日			
		C地区	旧・Ｐ２第二調査区				
		D地区	旧・Ｐ１	平成16年１月６日～２月５日			
（３）	池ノ奥古墳			平成16年８月23日～10月28日	世羅郡世羅町宇津戸字天神	古墳時代後期	古墳
（４）	城根遺跡			平成15年１月27日～３月７日	尾道市御調町大町字城根	弥生時代終末～古墳時代前半	箱式石棺
	牛の皮城跡（北郭群）	第４次	５郭	平成18年１月30日～２月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
	曽川１号遺跡	E地区	旧・Ｐ４	平成15年12月１日～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世	包含地
（５）	曽川１号遺跡	G地区	旧・Ｐ３	平成16年６月７日～８月６日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区	旧・Ｐ３側道				
		Ｉ地区	旧・Ｐ４側道				
		Ｊ地区	旧・Ｐ２	平成17年１月11日～３月４日			
（６）	曽川１号遺跡	K地区		平成17年４月11日～７月１日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
（７）	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年１月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳
（８）	北野山遺跡			平成18年７月３日～８月４日	三次市吉舎町敷地字北野山	平安時代	掘立柱建物跡
（９）	向江田中山遺跡			平成18年４月17日～６月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～飛鳥時代	官衙的集落跡
(10)	権現第１～３号古墳			平成17年７月11日～11月11日	三次市向江田町字権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第１～３・７号古墳			平成18年４月17日～８月４日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳			平成20年７月７日～９月５日	三次市甲奴町字賀字茶臼	古墳時代中期	古墳
(13)	瀬戸越南古墳			平成19年６月25日～８月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡			平成19年７月９日～８月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡（第２次）			平成19年９月25日～12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第２～５号古墳			平成19年７月２日～９月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
				平成19年12月３日～12月７日		縄文時代前期晩期	包含地

中国横断自動車道尾道松江線建設事業等に伴う報告書一覧（２）

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(17)	家ノ城跡	第１次	南東郭群	平成15年９月16日～10月31日	尾道市木ノ庄町木梨字家城東平	中世	城跡
		第２次	南東郭群	平成16年５月17日～６月11日			
		第３次	１郭周辺	平成17年10月17日～11月11日			
		第４次	１郭・北尾根	平成18年４月17日～７月21日			
		第５次	１郭・北西尾根	平成19年４月16日～６月15日			
(18)	片野中山第９～12号古墳			平成19年４月16日～８月８日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代中期	古墳
	右谷遺跡			平成19年４月16日～８月８日	三次市吉舎町敷地字中山	奈良～平安時代	集落跡 墓地
(19)	和知白鳥遺跡（第１次）			平成18年４月17日～12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾貫町字三重	古墳時代中期～飛鳥時代	集落跡 古墳
(20)	段遺跡	第１次		平成18年９月19日～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期～後期	集落跡
		第２次		平成19年９月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第１号古墳			平成20年４月21日～６月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平１号遺跡					古墳時代後期	集落跡
	常定川平２号遺跡					縄文時代	落し穴
(22)	稲干場第２～４・９号古墳			平成19年10月９日～12月21日	庄原市口和町大月字稲干場	古墳時代後期	古墳
(23)	只野原１号遺跡			平成20年９月８日～９月26日	庄原市高野町下門田字只野原	古墳時代	箱式石棺
	只野原２号遺跡			平成22年４月19日～11月19日	庄原市高野町下門田字登立	弥生時代～古墳時代	自然流路
	只野原３号遺跡	第１次		平成21年５月18日～８月28日		旧石器時代～古墳時代	包含地 集落跡
		第２次		平成22年４月19日～11月19日			
(24)	番久遺跡			平成20年７月28日～12月25日	庄原市口和町大月字番久	縄文時代～古墳時代	集落跡 落し穴
	原畑遺跡				庄原市口和町大月字原畑	弥生時代～古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平１号遺跡			平成20年４月21日～７月11日	庄原市口和町向泉字川平	旧石器時代～縄文時代	包含地
	向泉川平２号遺跡					弥生時代～古墳時代	集落跡
(26)	石谷２号遺跡	第１次		平成21年４月13日～６月12日	庄原市口和町金田字塩谷	縄文時代	落し穴
		第２次		平成22年４月12日～６月23日			
	石谷３号遺跡			平成21年４月13日～６月12日	庄原市口和町金田字塩谷	古墳時代後期	集落跡
(27)	馬ヶ段遺跡 馬ヶ段第１号横穴墓 馬ヶ段第２号横穴墓			平成20年４月21日～７月11日	庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代後期～奈良時代前期	集落跡 横穴墓
	皇塩遺跡				庄原市水越町字皇塩	古墳時代後期	炭窯跡
(28)	三重１号遺跡	第１次		平成20年11月４日～12月19日	三次市四拾貫町字三重	古墳時代～飛鳥時代	集落跡
		第２次		平成21年４月13日～９月25日		古墳時代中期	集落跡

中国横断自動車道尾道松江線建設事業等に伴う報告書一覧（３）

報告冊	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳		平成19年４月16日～12月21日	三次市向江田町字宮本・天神	古墳時代前期～後期	古墳
(30)	岡東第１～７号古墳		平成20年５月７日～９月26日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代中期	古墳
	岡１号遺跡		平成20年５月７日～９月26日	庄原市高野町岡大内字岡	縄文時代	落し穴
	岡２号遺跡		平成21年４月13日～５月15日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	集落跡
	半戸１号遺跡		平成22年４月12日～５月14日	庄原市高野町岡大内字半戸	縄文時代	落し穴
	岡東第１号横穴墓		平成24年９月３日～９月21日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	横穴墓
(31)	風呂谷遺跡		平成21年４月13日～11月20日	三次市四拾貫町	後期旧石器時代縄文時代早期古墳時代後期	包含地集落跡
	風呂谷古墳		平成21年４月13日～11月20日	三次市四拾貫町	古墳時代後期	古墳
(32)	宮の本遺跡		平成20年４月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡
	宮の本第11・33～35号古墳		平成20年４月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古墳時代後期～飛鳥時代	古墳
(33)	箱山第３～６号古墳		平成18年８月21日～12月８日	三次市向江田町箱山	古墳時代前期～後期	古墳
(34)	下矢井南第３～５号古墳		平成19年10月９日～12月21日	三次市吉舎町矢井字西見山・敷地字北野山	古墳時代前期～中期	古墳
(35)	若見迫遺跡		平成19年４月16日～５月25日 平成19年10月18日～10月19日	三次市三良坂町岡田字若見迫	古代	集落跡
	畑尻遺跡		平成21年４月13日～６月５日	三次市三良坂町岡田字畑尻	旧石器時代縄文時代近世	集落跡
(36)	三隅山遺跡		平成24年４月９日～８月10日	三次市三良坂町長田字三隅山・堂面	中世～近世	墳墓
(37)	頼藤城跡		平成20年４月21日～７月31日	三次市甲奴町小童字塚ケ迫・小豆山	中世	城跡
(38)	杉谷遺跡		平成21年９月７日～10月16日	世羅郡世羅町東上原字杉谷	古墳時代中世～近世	集落跡
(39)	海田原第24～27号古墳		平成22年９月27日～12月17日	三次市吉舎町海田原字殿平	古墳時代中期～後期	古墳
(40)	殿平古墳		平成20年９月24日～12月26日	三次市吉舎町海田原字殿平	古墳時代中期	古墳
	長畑山古墳		平成20年９月24日～12月26日	三次市吉舎町海田原字長畑山	古墳時代後期	古墳
(41)	**長畑山北第１～６号古墳（本遺跡）**		**平成21年６月29日～12月22日**	**三次市吉舎町海田原字長畑山**	**古墳時代後期**	**古墳**
(42)	善正平１号遺跡・善正平２号遺跡		平成21年４月13日～９月25日	三次市甲奴町宇賀字善正平	古墳時代後期～飛鳥時代	集落跡
(43)	大柳遺跡		平成23年５月９日～８月26日	世羅郡世羅町大字川尻字大柳山	中世	寺院関連遺構
(44)	原畑遺跡（第２次）		平成26年４月７日～５月23日	庄原市口和町大月字原畑	古墳時代後期	集落跡

第１表の報告書

（１）財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』　2005年
（２）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』　2006年
（３）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）池ノ奥古墳』　2007年
（４）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）城根遺跡　曽川１号遺跡（Ｅ地区）　牛の皮城跡（第４次）』　2008年
（５）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（５）曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区）』　2008年
（６）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（６）曽川１号遺跡（Ｋ地区）』　2008年
（７）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（７）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』　2009年
（８）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（８）北野山遺跡』　2009年
（９）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（９）向江田中山遺跡』　2010年
（10）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）権現第１～３号古墳』　2010年
（11）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）大番奥池第１～３・７号古墳』　2010年
（12）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（12）茶臼古墳』　2011年
（13）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13）瀬戸越南古墳』　2011年
（14）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（14）上陣遺跡』　2011年
（15）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡　１（旧石器時代の調査）』　2011年
（16）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第２～５号古墳』　2011年
（17）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）家ノ城跡（第１～５次）』　2012年
（18）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（18）片野中山第９～12号古墳・右谷遺跡』　2012年
（19）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡　２（古墳時代の調査）』　2012年
（20）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡（第１・２次）』　2012年
（21）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第１号古墳・常定川平１号遺跡・常定川平２号遺跡』　2012年
（22）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第２～４・９号古墳』　2012年
（23）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原１号遺跡・只野原２号遺跡・只野原３号遺跡』　2013年
（24）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡・原畑遺跡』　2013年

(25) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平１号遺跡・向泉川平２号遺跡』　2013年
(26) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（26）石谷２号遺跡・石谷３号遺跡』　2013年
(27) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（27）馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』　2013年
(28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重１号遺跡』　2013年
(29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32古墳』　2013年
(30) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（30）岡東第１号横穴墓・岡東第１～７号古墳・岡１号遺跡・岡２号遺跡・只野原１号遺跡・半戸１号遺跡』2014年
(31) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（31）風呂谷遺跡・風呂谷古墳』　2014年
(32) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32）宮の本遺跡・宮の本第11・33～35号古墳』　2014年
(33) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33）箱山第３～６号古墳』　2014年
(34) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34）下矢井南第３～５号古墳』　2014年
(35) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（35）若見迫遺跡・畑尻遺跡』　2014年
(36) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（36）三隅山遺跡』　2014年
(37) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（37）頼藤城跡』　2014年
(38) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38）杉谷遺跡』　2014年
(39) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（39）海田原第24～27号古墳』　2014年
(40) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（40）殿平古墳・長畑山古墳』　2014年
(41) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（41）長畑山北第１～６号古墳』　2014年
(42) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（42）善正平１号遺跡・善正平２号遺跡』　2014年
(43) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（43）大柳遺跡』　2014年
(44) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（44）原畑遺跡（第２次調査）』　2014年

Ⅱ 位置と環境

長畑山北第１～６号古墳は，広島県三次市吉舎町海田原字長畑山120，121，134に所在する。三次市は広島県北部の中核都市であり，吉舎町はその市中心地から南東へ約16kmに位置している。吉舎町はかつて広島県双三郡に属していたが，平成16（2004）年４月１日から，旧三次市，甲奴郡甲奴町，双三郡全町村（吉舎町，三良坂町，三和町，君田村，布野村，作木村）が合併して誕生した三次市となった。東は甲奴町，西は上田町，南は世羅郡世羅町，北は三良坂町と庄原市総領町に接する。

中国山地の山間部に位置する吉舎町内には，東に水呑山（標高557.2m），西に撫臼山（標高522.8m），北に富士山（標高471.4m）の山々が並ぶ。また，日本海に注ぐ江の川水系馬洗川が町の中央を南から北に流れ，その支流上下川が町の北東を横切る。町面積84.07㎢の10.4％を占める耕地の大部分は，この２つの川の流域とその支流沿いに分布している。

吉舎町内には古墳を中心に，およそ400以上の遺跡が存在しており，本古墳群が所在する海田原や，近くの矢野地・敷地・矢井地区はその中心である。以下では，吉舎町内の主な遺跡について述べていく。

旧石器時代

南部の徳市に所在する徳市遺跡から，２点のナイフ形石器が採集されている。石器は，安山岩と流紋岩で作られ，二側縁加工の小型なものである。

縄文時代

海田原の海田原第26号古墳[1]の盛土内から，２点の土器片が出土している。また，石斧が北部の敷地・矢野地から出土し，石匙が徳市から出土したと伝えられている。この時代の遺物は他にないが，本古墳群で新たに石鏃が出土した。

弥生時代

徳市遺跡からは弥生土器・土師器・石鏃・石包丁・石斧なども出土し，弥生中期後半から古墳時代にかけての集落跡とみられている。北東部の知和に所在する寺津古墳群[2]の調査時には竪穴住居跡や土坑が見つかり，弥生時代後期の集落跡が確認された。知和の加村遺跡も試掘調査で集落跡と確認されているほか，土器包含地として敷地の敷地本郷遺跡，徳市の八斗田遺跡などがある。

古墳時代

この時代まで続く徳市遺跡のほか，敷地の右谷遺跡[3]では古墳時代後期の竪穴住居跡が見つかっている。北東部の安田に所在する三田戸遺跡も試掘調査で集落跡と確認され，土器包含地として前時代から続く敷地本郷遺跡，八斗田遺跡などがある。

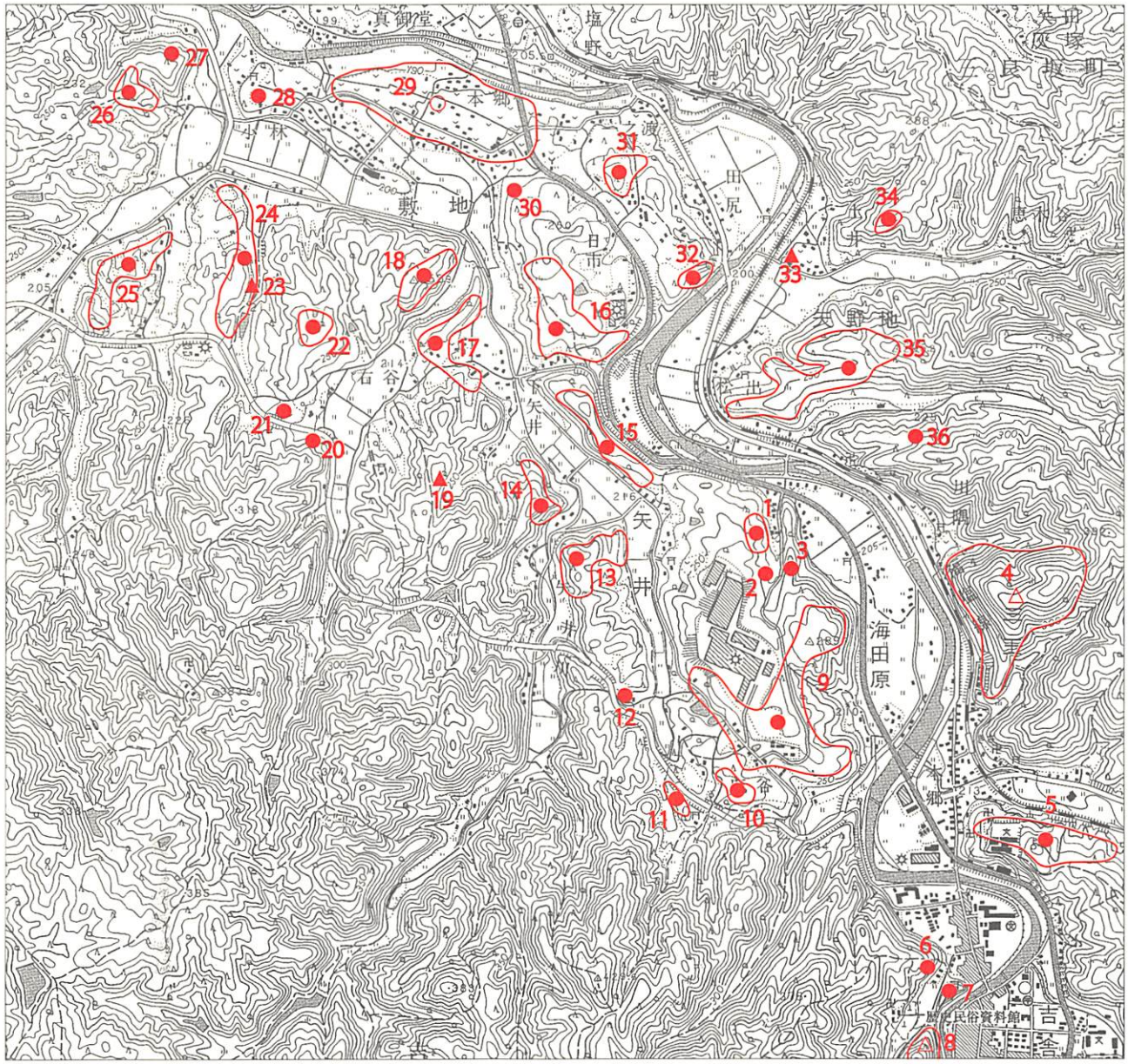
しかし，確認されている遺跡の大半は古墳である。多くは直径が10m前後の円墳で，本古墳群を含めて359基ほど存在する。これらの古墳は群を形成するものが多く，数基から30基以上まで多様な規模である。主な分布地は，前述のように馬洗川流域の海田原・矢野地・敷地・矢井地区であるが，上下川流域の安田・上安田・知和地区にも60基の古墳が存在する。多くはこの馬洗川や

上下川とその支流を望む丘陵上に立地するが，横穴式石室の導入とともに数が大きく減少し谷の奥に移っていく傾向がある。

町内の古墳の起源は明らかでないが，矢井の下矢井南第４号古墳[4]は４世紀末から５世紀初頭の築造とみられている。直径18.8mの円墳で，墳頂部に粘土槨３基と土坑１基の埋葬施設がほぼ並列し，何れも割竹形木棺と考えられる。埋葬施設からは竪櫛とともに鉄剣・鉄刀・鉄斧・鉄鎌などが出土したほか，墳頂部で筒形石製品が出土している。

これに続く古墳としては，北部の三玉に所在する県史跡三玉大塚古墳[5]（三玉第１号古墳）があり，５世紀後半の築造と考えられている。全長41mの帆立貝形古墳で，確認調査により墳丘斜面に葺石を３段に廻らせる構造が明らかになった。各段には平坦面があり，２段目の平坦面やこれと同じ高さの方形基壇上に埴輪を廻らせている。埋葬施設は竪穴式石室で，変形文鏡・珠文鏡・筒形銅器・短甲などの副葬品はよく知られており，ほかにも鉄鏃・刺突具・鉄刀・刀子・矛・石突・鉇・馬具・鋤先・玉類・有孔円板・砥石など多種多様な副葬品が出土している。ほかの大型古墳も帆立貝形古墳を中心とし，敷地の八幡山第24号古墳（全長45m）から始まり，三玉大塚古墳，海田原の海田原第20号古墳（全長40m），海田原第29号古墳（全長33m）への首長墓の推移が想定されている。

ほかの調査された古墳をみれば，敷地の片野中山第９～12号古墳[6]は５世紀末から６世紀初頭の築造と考えられ，何れも直径10m前後の円墳である。埋葬施設は何れも土坑であり，第９号古墳の埋葬施設から有孔石製品が，第10号古墳の埋葬施設から刀子が出土した。海田原の海田原第24～27号古墳[7]は，５世紀後半から６世紀代の築造と考えられる直径９～17mの円墳である。埋葬施設は第25号古墳で土坑１基が見つかったが，ほかは不明である。ただし，第27号古墳の周溝内で見つかった土坑は埋葬施設の可能性があり，ここから滑石製の勾玉１点と臼玉５点，土師器の高杯などが出土した。これと同一の丘陵上にある敷地の殿平古墳[8]は直径7.5mの円墳で，埋葬施設は箱式石棺である。出土遺物がないため明らかでないが，石材を横長に配する構築上の特徴などから５世紀代の築造と考えられている。知和の寺津古墳群のうち，寺津第１号古墳は直径12.5mの円墳，寺津第２号古墳は9.8mの円墳であり，ともに埋葬施設は木棺である。第１号古墳の埋葬施設からは須恵器の杯身と杯蓋が２組，第２号古墳の埋葬施設からも須恵器の杯身と杯蓋が２組のほか高杯や瑯・勾玉・管玉・刀子などが出土し，６世紀前葉から中葉の築造と考えられている。寺津第３号古墳は全長35～40mと推定される県内では数少ない前方後方墳である。寺津第１・２・４～６号古墳とともに現状保存することになったため，前方部の墳丘検出と一部のトレンチ調査が行われ，前方部墳頂で粘土槨１基・箱式石棺１基・石蓋土坑１基の埋葬施設が確認されている。立地や墳形などから第１・２号古墳よりやや古い５世紀後半から６世紀初頭頃の築造と考えられている。６世紀前半の築造とみられる敷地の大番奥池第１～３・７号古墳[9]のうち，第７号古墳は4.6×2.9mの不正楕円形の小墳で，ほかは直径7.7～11mの円墳である。埋葬施設は，第１号古墳は不明，第２号古墳は南北に並列する木棺２基，第３号古墳はやや雑然と並ぶ木棺３基と土坑１基，第７号古墳は土坑１基である。埋葬施設からは須恵器の杯蓋や杯身・鉄刀・鉄鏃・刀子・鉇・



第２図　周辺主要遺跡分布図（１：25,000）

●古墳・墳墓　▲集落跡・居館・寺院跡　△中世山城跡　○包含地

1　長畑山北第１～６号古墳
2　長畑山古墳
3　殿平古墳
4　平松山城跡
5　三玉古墳群（９基）
6　善逝寺山古墳
7　尾崎山墳墓
8　南天山城跡
9　海田原古墳群（33基）
10　後口山古墳群（４基）
11　宮前古墳群（２基）
12　岡ノ采古墳
13　矢井中山古墳群（12基）
14　下矢井南古墳群（５基）
15　中山古墳群（19基）
16　八幡山古墳群（30基）
17　下矢井北古墳群（７基）
18　明神山古墳群（17基）
19　北野山遺跡
20　燎東古墳
21　燎古墳
22　大番奥池古墳群（30基）
23　右谷遺跡
24　片野中山古墳群（15基）
25　一本堂古墳群（12基）
26　鷲尾古墳群（３基）
27　コウズミ西古墳
28　小林古墳
29　敷地本郷遺跡
30　八幡山北古墳
31　一之瀬古墳群（３基）
32　田尻古墳群（４基）
33　矢野地土井遺跡
34　土井古墳群（２基）
35　矢野地古墳群（45基）
36　目暮目古墳

鉄鎌などが出土しているが，須恵器のみを副葬する埋葬施設と，鉄鏃を主体とした鉄器を副葬する埋葬施設があり，差異が認められる。矢井の燎東古墳[10]も６世紀前半の築造とみられる直径８ｍの円墳で，埋葬施設は並列する木棺２基と墳裾部の石蓋土坑１基である。出土遺物は須恵器の杯身・杯蓋・提瓶・鉄刀・刀子などであるが，木棺から少し離れて須恵器の杯身・杯蓋がまとまって出土しており，これらの遺物は供献された可能性がある。

横穴式石室を埋葬施設とする町内の古墳は，敷地に所在する直径９ｍのコウズミ西古墳，海田原に所在する直径12ｍの海田原第31号古墳，安田に所在する直径12.5ｍの平石南第１号古墳などがあり，これまでに20基ほど確認されている。横穴式石室が少ない地域として知られているが，本古墳群の長畑山北第４号古墳のほか，同一丘陵上の長畑山古墳[11]が横穴式石室であると新たに判明したように，その数は今後増える可能性がある。長畑山古墳は南に開口する直径12ｍの円墳で，石室の長さ６ｍ，幅0.8～1.2ｍである。石室内から須恵器の甕・杯身・杯蓋・瑞・高杯・椀・提瓶・平瓶・長頸壺・土師器の椀・鉄鏃・耳環・石製の玉・土製の小玉など多くの副葬品が出土した。埋葬された年代は６世紀末から７世紀中頃であるが，８世紀代に石室の再利用が行われており，火葬骨や須恵器の杯蓋・高杯が出土している。また，墳丘が築かれる前の旧地表面で，須恵器の提瓶・杯蓋が出土した場所，土師器の甕が出土した場所，鉄鏃と須恵器の杯身・杯蓋・高杯が環状に出土した場所があり，古墳築造に際して祭祀的な行為が行われた可能性がある。

古　代

『和名類聚抄』によると，平安時代初めの三谷郡には三谷・松部（私部（ささいべ）の誤記か）・江田・額田・刑部の五つの郷があった。吉舎町は，上安田・知和が甲奴郡に，徳市が世羅郡に属していた以外は三谷郡に属し，松部郷（私部郷）に含まれていたと考えられている。私部の私は后の意味で，皇后のために設けられた部民つまり私有民であったことが郷名から窺え，吉舎の地名はこの私部に由来している。また『延喜式』には，三谷郡を含めた備後国の山間八郡が鉄や鍬を庸・調として納めていたことが記されているほか，これを示す木簡が平城京から出土しており，重要な鉄供給地であったことがわかる。

前述のように古墳時代後期の竪穴住居跡が見つかった右谷遺跡では，８世紀末から９世紀初頭の火葬墓も見つかっている。火葬骨を須恵器の壺に収めて杯身を蓋に転用し，これを直径0.4ｍの土坑に埋めた後に，扁平な石材で覆って墓標としている。火葬墓の近くには弓状の緩い溝を持つ掘立柱建物跡１棟があり，祭祀を行う場としての可能性もある。敷地の北野山遺跡[12]は，９世紀後半から10世紀初頭に山林に設けられた仏教関連の施設跡と考えられている。掘立柱建物跡２棟，土坑１基，柱穴列１列などが見つかり，須恵器の転用硯・鉄鉢形土器・灯明に使用したと推測される煤の付着した杯などが出土した。また，上安田には古代末から鎌倉時代初頭の寺院跡とされる上安田廃寺跡がある。

中　世

世羅郡の大田荘から三次盆地への入口にあたる吉舎町は，人や物資が集まる中継地として繁栄し，備後南部の瀬戸内海沿岸と備後北部を結ぶ交通上重要な地位を占めることになった。

この時期の町域を支配したのは，武蔵国から入った波多野氏の一族広沢氏である。建久３（1192）年三谷郡12郷の地頭職を得た広沢氏は和知（三次市）に移住し，13世紀の後半には二人の子に所領を分割して相続させ，和智・江田の両氏に分かれた。このうち，和智氏は三谷郡北部を領有し，後に本拠を吉舎に移している。戦国期には山陰尼子氏の配下となるが，やがて大内氏と結んだ毛利氏が北上すると毛利方に転じた。

町内には，和智氏の本城である吉舎の南天山城跡や北の迎撃拠点である三玉の平松山城跡など，山城を中心とした城館跡が多く残る。また，吉舎のやや南に位置する丸田には宝篋印塔１基が建つ和智誠春之墓，清綱には積石方形基壇を設けた和智実勝之墓などがあり古墓も多い。寺院では前述の上安田廃寺跡のほか，西部の桧に礎石などの建物跡が残る県史跡吉寺廃寺跡がある。

註

（１）公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（39）海田原第24～27号古墳』　2015年

（２）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）』　1994年

（３）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（18）片野中山第９～12号古墳　右谷遺跡』　2012年

（４）公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34）下矢井第３～５号古墳』　2014年

（５）吉舎町教育委員会『三玉大塚―調査と整備―』　1983年

（６）註（３）と同じ

（７）註（１）と同じ

（８）公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（40）殿平古墳　長畑山古墳』　2015年

（９）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）大番奥池第１～３・７号古墳』　2010年

（10）吉舎町教育委員会『燎東古墳』　1995年

（11）註（８）と同じ

（12）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（８）北野山遺跡』　2009年

参考文献

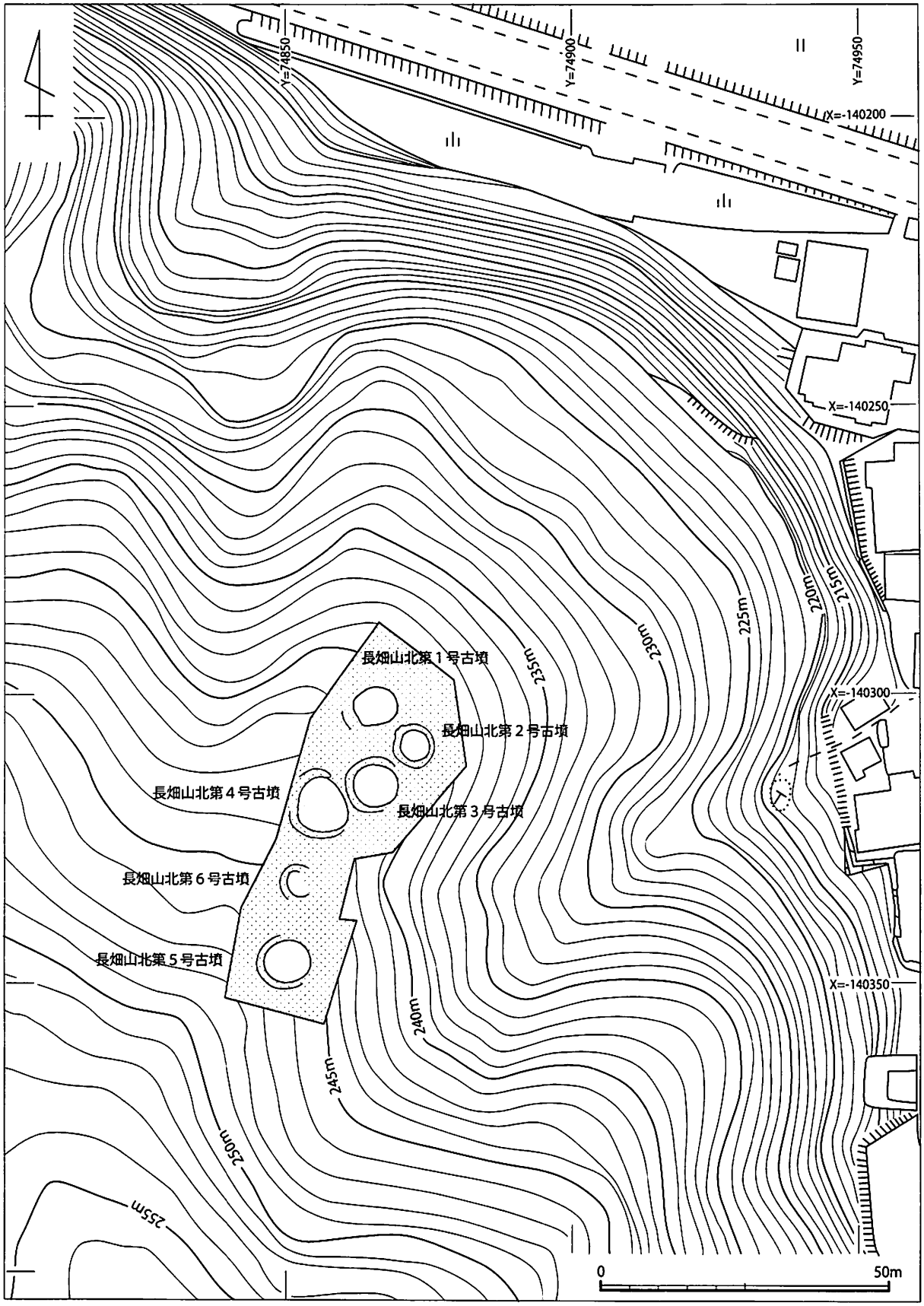
平凡社『日本歴史地名大系第35巻　広島県の地名』　1982年

角川書店『角川日本地名大辞典34　広島県』　1987年

吉舎町教育員会『吉舎町史（上巻）』　1988年

広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅷ（甲奴郡・双三郡）』　2002年

広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第４集　1996年



第３図　周辺地形図（１：1,000）

Ⅲ 調 査 の 概 要

当初は，長畑山北第１～５号古墳として調査を開始した。調査開始前の写真撮影の際，各古墳の墳丘やその周辺を精査した結果，第４号古墳と第５号古墳の間に一部削平された高まりが見つかった。広島県教育委員会が試掘調査を行って周溝を確認したことから，この高まりを古墳と確認して長畑山北第６号古墳とし，長畑山北第１～６号古墳を調査することとなった。

調査は先ず，地形測量によって墳丘と周溝の位置や規模を推定し，各古墳の墳丘中央を繋ぐ土層観察用の畦の設定と，これに直交する畦の設定を行った。調査の進展に伴って，第３号古墳の埋葬施設は竪穴式石室，第４号古墳の埋葬施設は横穴式石室と判明したが，調査開始時は試掘調査の結果から両古墳の埋葬施設は竪穴式石室または箱式石棺と想定し，僅かに露出する石材を目印に石棺等の中軸を推定した。

その後，人力によって表土及び周溝内の埋土を除去したが，何れの古墳にも重複関係は認められなかった。出土遺物から，木棺を埋葬施設とする第１・２・５・６号古墳が６世紀中頃に，横穴式石室の第４号古墳が６世紀中頃から後半にかけて，続いて竪穴式石室の第３号古墳が６世紀後半に造られたと考えられる。

６基の古墳は斜面に沿うように縦長に並んでおり，最も低い場所にある第２号古墳（標高240.6m）から最も高い場所にある第５号古墳（標高246.2m）まで5.6mの高低差がある。何れの古墳も平面形は円形であり，規模は第６号古墳が直径5.0m，第４号古墳が直径9.8m，ほかは直径5.5m～8.1mである。各古墳の周溝は，斜面の上側を中心に１／２～２／３程度廻っているが，第２号古墳のみ全周している。木棺墓からは須恵器，土師器が，竪穴式石室からは須恵器，土師器，鉄器が出土した。横穴式石室からの出土遺物は多く，須恵器，土師器，鉄器，耳環，玉類，砥石である。古墳群から出土した須恵器は６世紀中頃から後半のものが大半であるが，第４号古墳の壺は８世紀代である。

各古墳の規模，埋葬施設，出土遺物などは次の通りである。

長畑山北第１号古墳

直径7.2m，高さ1.7mの円墳で，墳丘の一部や周溝の大部分が重機による削平を受けているため明確ではないが，幅2.7m，深さ0.5mの周溝が１／２程度は廻っていたと考えられる。埋葬施設は木棺と思われる。遺物は，埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身・瑯），盛土から鉄器（鉄鏃・刀子・鎌），墳丘裾や周溝から須恵器（高杯・提瓶・大甕），土師器が出土した。

長畑山北第２号古墳

直径5.5m，高さ1.2mの円墳で，幅1.2～1.8m，深さ0.3～0.6mの周溝が全周している。埋葬施設は木棺と思われる。遺物は，埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身），土師器が出土した。須恵器は墳丘検出面や周溝からも，土師器は周溝からも出土している。また，盛土から鉄器（摘鎌）のほか，滑石製小玉や土玉がまとまって出土しており，祭祀に伴う遺物とも考えられる。

長畑山北第３号古墳

直径7.8m，高さ1.3mの円墳で，幅2.1m，深さ0.5mの周溝が２／３程度廻っている。埋葬施設は南を頭位とする竪穴式石室１基であり，小型の石材が２～３段に積まれている。遺物は，石室内から須恵器（２組の杯蓋と杯身・大甕），鉄器（刀子・摘鎌）が，側壁の上面から須恵器（杯蓋）が，周溝や墳丘検出面から須恵器（杯蓋・杯身・瑞・短頸壺・横瓶・大甕）や土師器が出土した。

長畑山北第４号古墳

直径9.8m，高さ1.5mの円墳で，幅1.5～2.3m，深さ0.5mの周溝が２／３程度廻っている。埋葬施設は北に開口する横穴式石室であり，やや小型の丸みを持った石材が多く用いられている。石室の床面上からは須恵器（杯蓋・杯身・提瓶・瑞・高杯），鉄器（鉄鏃・刀子・剣・鎌・鉄斧・鉄鐸），耳環，玉類（丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉），砥石が出土した。また，玄室の床面下で掘方底に掘られた小穴から須恵器（杯身･杯蓋），土師器（高杯）が，玄室と羨道の境付近の床面下から須恵器（短頸壺），土師器（椀）がまとまって出土し，築造の際に何らかの祭祀が行われた可能性がある。これらの遺物とは時期が大きく異なる須恵器の平底壺が石室上層から出土し，炭化物も検出されたことから，石室が再利用されたと考えられる。

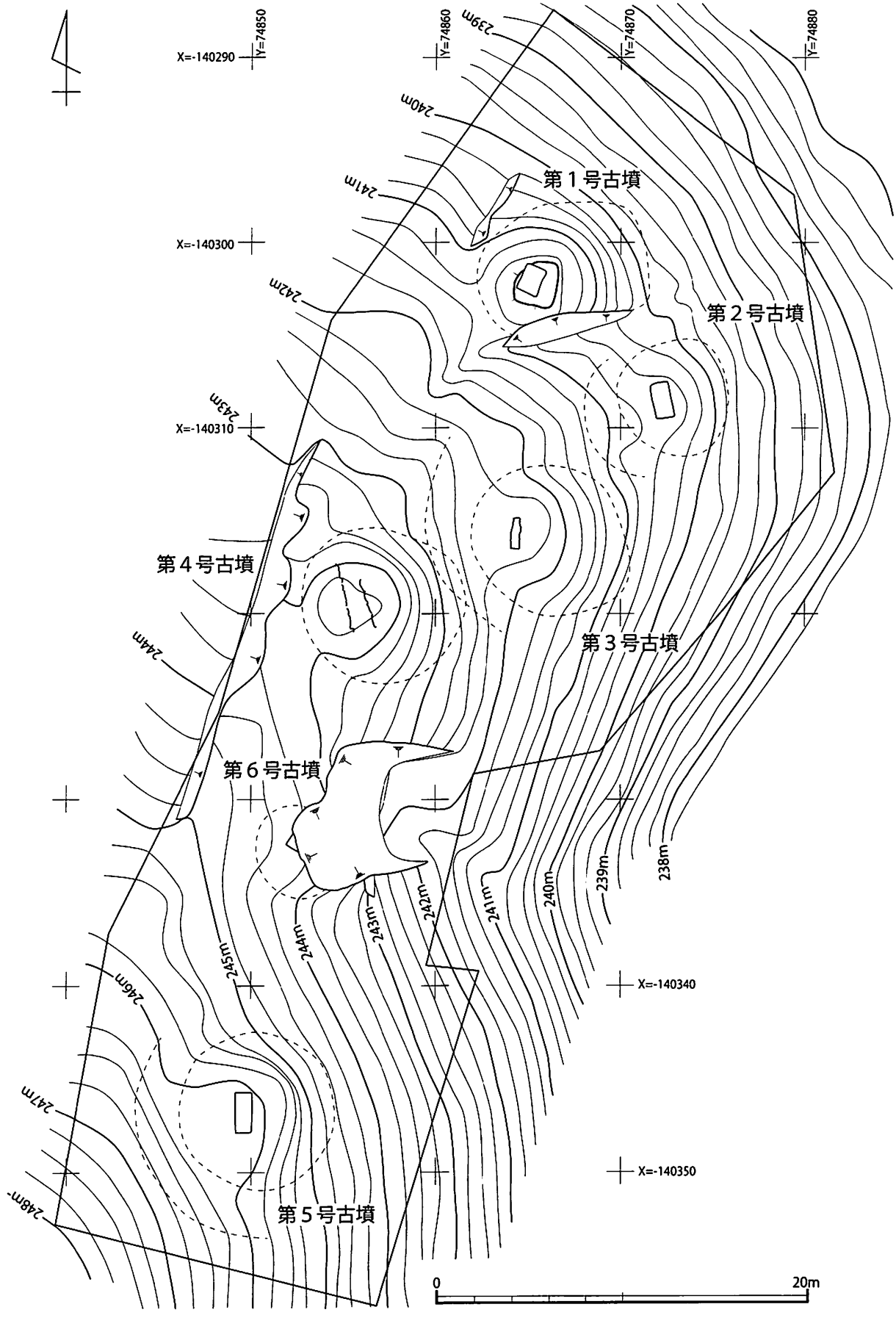
長畑山北第５号古墳

直径8.1m，高さ1.5mの円墳で，幅1.8m，深さ0.5mの周溝が１／２程度廻っている。埋葬施設は木棺と思われる。遺物は，墳丘検出面や盛土から須恵器が出土した。

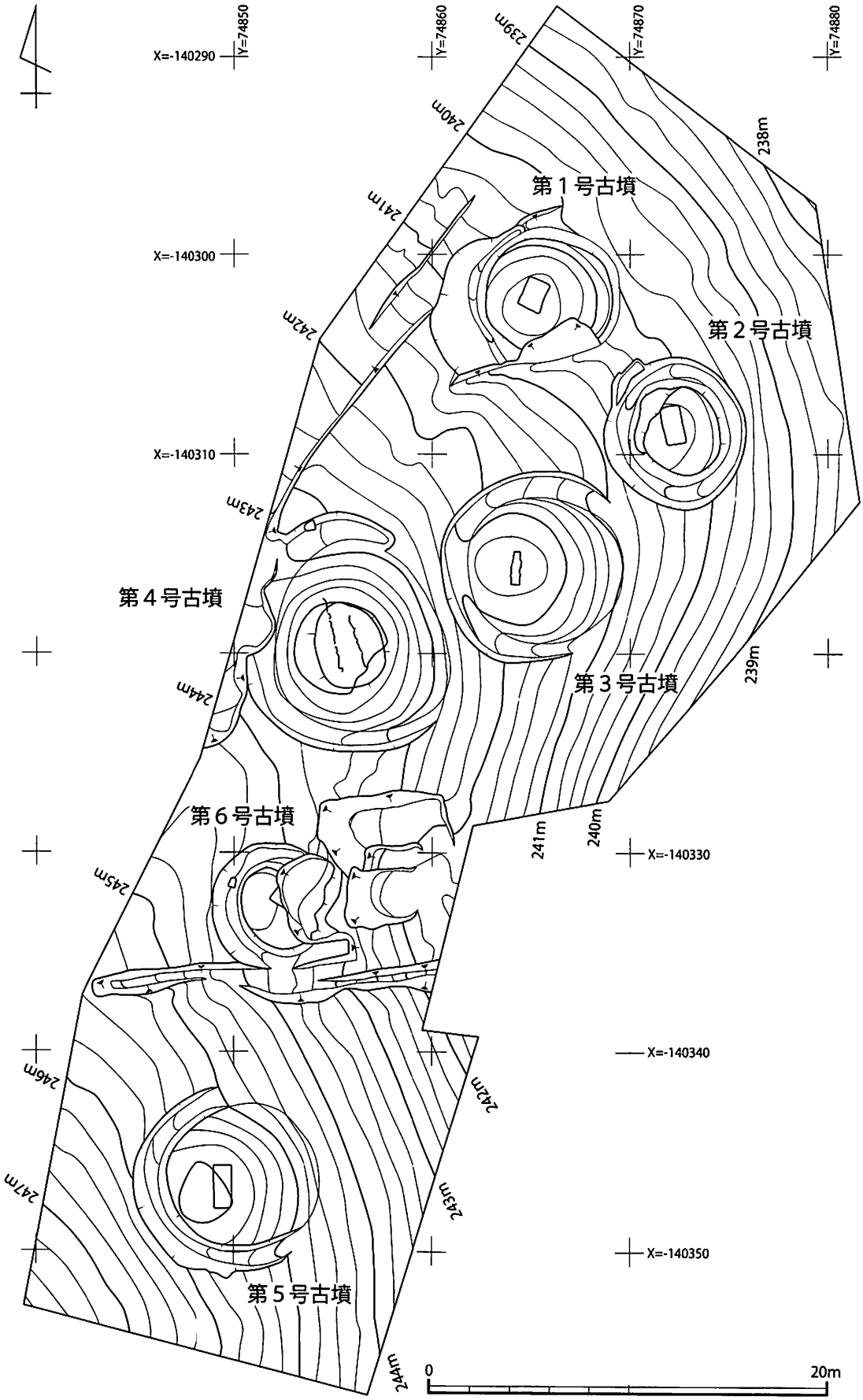
長畑山北第６号古墳

斜面の自然崩落や重機による削平のため，墳丘と周溝は一部しか残っていないが，本来は直径5.0mの円墳であったと考えられる。残存する周溝の幅は1.6m，深さ0.5mである。埋葬施設は木棺と思われるが，北西の隅が一部残るだけである。埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身）や土師器（高杯）が出土している。また，斜面下の崩落土から須恵器（杯蓋）のほか，周溝から須恵器（大甕）の破片，盛土の下層から縄文時代の石鏃，調査区内から叩き石が出土した。

今回の発掘調査で，海田原古墳群と中山古墳群の間に本古墳群の存在が明らかとなり，多くの古墳が存在する吉舎町内でも，特に海田原・矢井・敷地地区が中心地であったことが改めて確認された。また，第４号古墳の横穴式石室は，現在のところ吉舎町域で最も古いものであり，在地色の残る木棺墓から横穴式石室が導入される様子がよくわかる，貴重な調査例となった。同一丘陵上にある長畑山古墳の横穴式石室と同様に，第４号古墳は開口部も含めて完全に土で埋まっていた。そのため，第４号古墳の埋葬施設は竪穴式石室または箱式石棺と考えられていたが，調査の結果，横穴式石室であると判明した。このことは，非常に横穴式石室が少ない地域として知られていた当地域に，未だ発見されていない横穴式石室が数多く存在する可能性を示している。また，長畑山古墳では横穴式石室の再利用が確認されているが，第４号古墳でも石室埋土の上層から炭化物や８世紀代の須恵器が見つかっており，この地域では横穴式石室の再利用が頻繁に行われていた可能性があることが明らかとなった。



第４図　長畑山北第１～６号古墳　調査前地形測量図（１：300）



第５図　長畑山北第１～６号古墳　墳丘測量図（１：300）

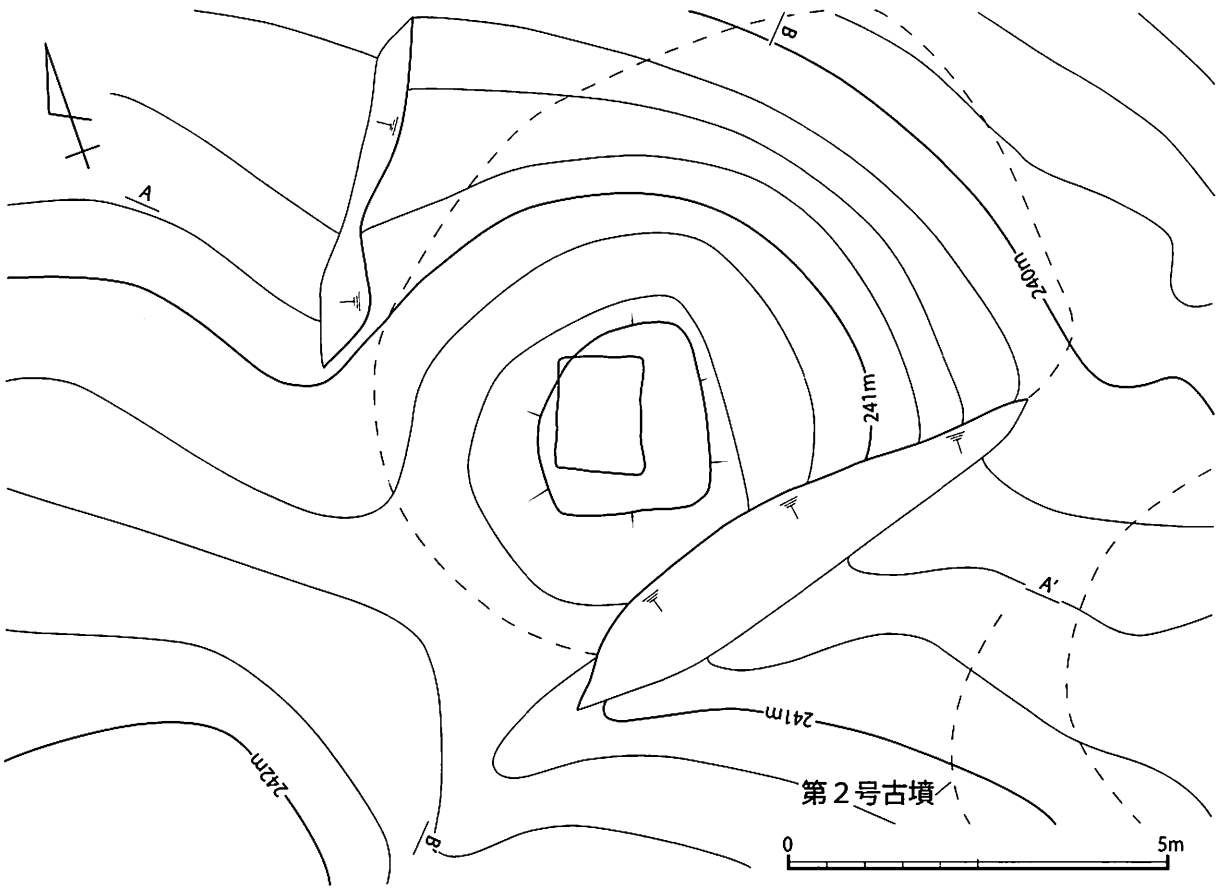
Ⅳ 遺構と遺物

1 長畑山北第１号古墳

（１）立地と調査前の状況（第６図，図版２）

長畑山北第１～６号古墳は，日本海に注ぐ江の川支流の馬洗川を北に望む丘陵上に位置している。この丘陵は南から北に延びており，古墳群が立地しているのは丘陵の先端部付近である。丘陵に沿って並ぶ古墳群のうち，第１号古墳は最も北に位置しており，南西から北東方向に下る緩やかな斜面上にある。標高は墳頂部で241.6mであり，古墳群の中で最も低い場所にある第２号古墳より1.0m高い。馬洗川周辺の水田とは，約40mの標高差がある。

調査前の観察では，斜面上側である南側や西側を重機が通った形跡があり，それによって墳丘の一部が削平されていることが予想された。また，試掘調査によって背面に周溝が存在することを確認していたが，重機による削平のため周溝がどこまで廻るのか把握することは困難であった。墳丘のやや南西寄りに東西2.3×南北2.5mほどの平坦面があり，北東側の墳裾は張り出してかなり膨らんでいる様子であった。墳丘に石材の露出や散乱はなく，また事前の試掘調査の結果と合わせ，木棺を埋葬施設とする小規模な円墳であると考えられた。

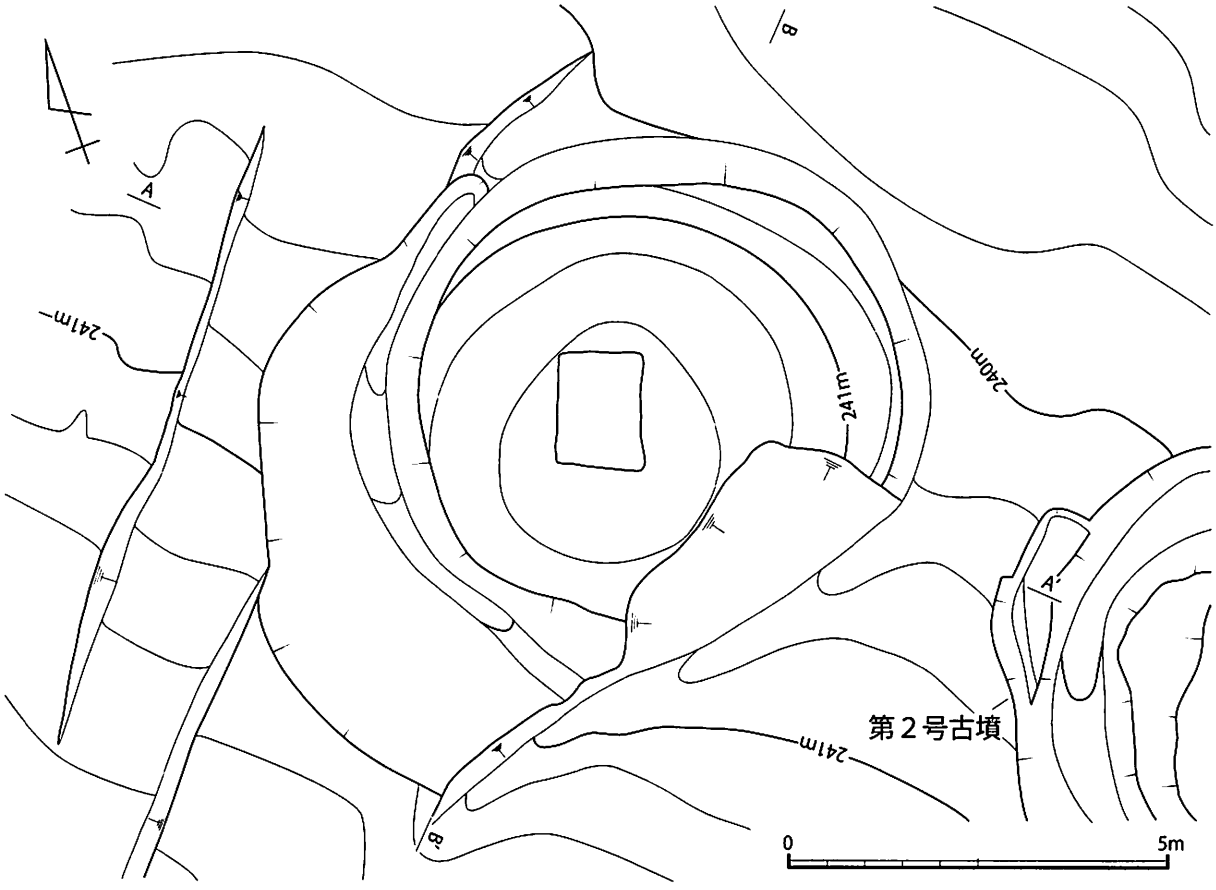


第６図 長畑山北第１号古墳　調査前地形測量図（１：100）

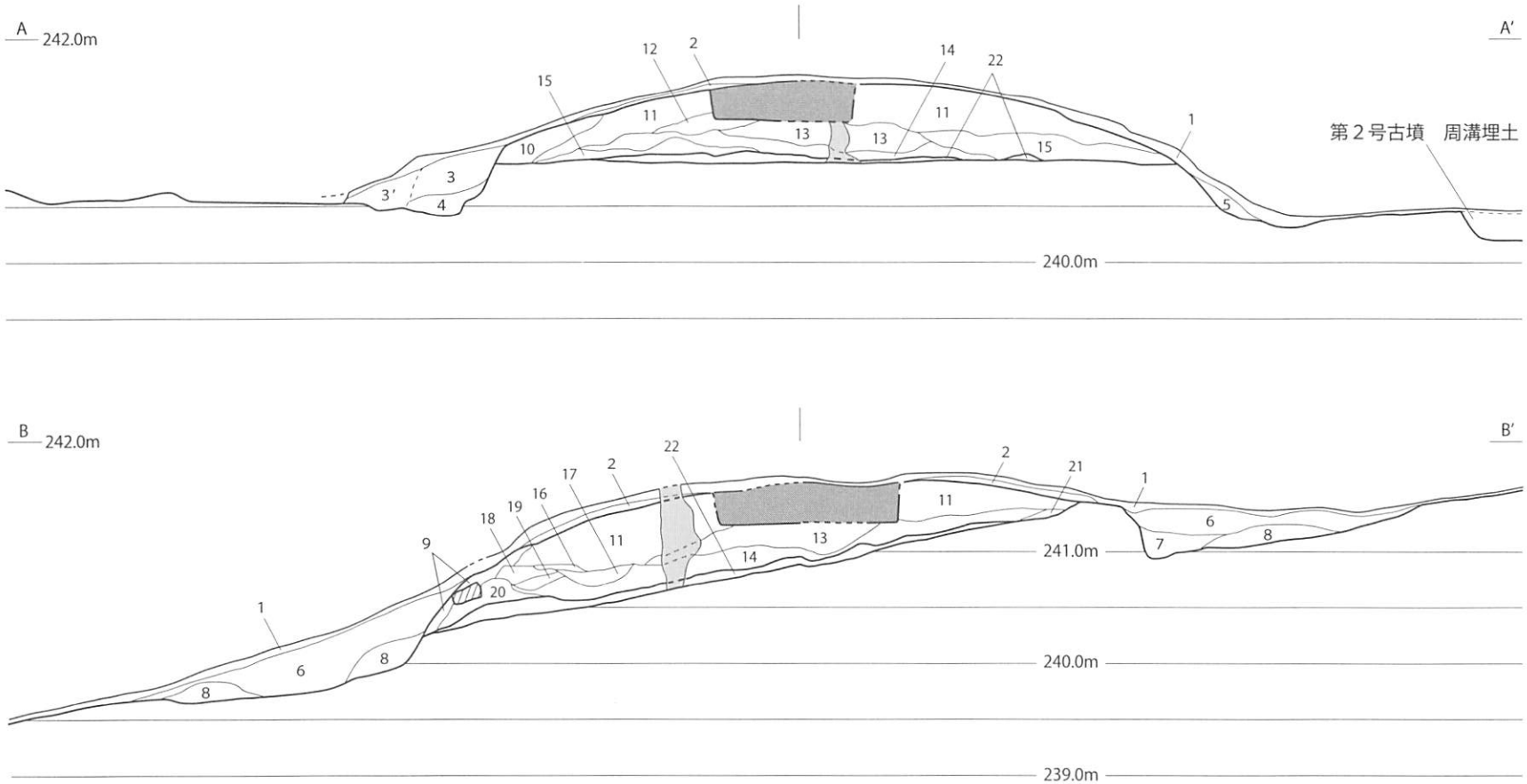
（２）墳丘・周溝（第７・８図，図版２・３）

墳丘は，一部削平を受けているため明確ではないが直径7.0～7.2mで，ほぼ円形の平面形のやや南西寄りに頂部がある。墳丘の高さは，斜面下側（北東側）の墳裾からは1.7m，斜面上側（南西側）の墳裾からは0.7mである。葺石などを施した痕跡はなく，斜面下側は地山を掘り込んで裾部を造り，斜面上側は幅2.7m，深さ0.5mの周溝によって区画されている。周溝は幅が広く浅い形であり，底は墳丘側に偏っているため，底から外側の上端までは緩やかな傾斜である。周溝も削平を受けているため全容は不明であるが，本来は１／２程度廻っていたと推測される。墳丘や周溝の平面プラン及び土層観察では，ほかの古墳との重複関係は確認できなかった。

盛土は，現状での厚さ0.7mである。最初に斜面下側を中心に土を盛って水平面を造り，その後，中央部から順に土を重ねて墳丘を高くした工程が土層観察から確認できる。盛土の上層はやや粘性の強い褐色土で，中層は黄橙色土である。何れも小礫を含んでおり，地山に含まれる礫と同じものが細かくなったものと思われる。下層は前述の水平面より下にあたり，まず褐色土を墳丘の端に土手状に盛り，その内側にやや粘性の強い黒褐色土，黄橙色土と明赤褐色土と灰白色粘質土の混土などを入れている。盛土の下には古墳が築造された当時の地表面である黒褐色土が0.1m堆積しており，その下に礫を含む黄褐色土層の地山がある。



第７図　長畑山北第１号古墳　墳丘測量図（１：100）



1．表土
2．褐色土
3．褐色土(0.5～1.0㎝大の礫を含む。)
3’ 3と同一層であるが重機に踏まれて変色
4．暗褐色土(0.5～1.0㎝大の礫を含む。)
5．褐色土(0.5～1.0㎝大の礫を少し含む。)
6．褐色土
7．褐色土(0.5～2.0㎝大の礫を含む。)
8．暗褐色土

墳丘盛土
9．褐色土(粘性がやや強い。)
10．褐色土(粘性がやや強い。)
11．褐色土(1.0～3.0㎝大の礫を多く含み，粘性がやや強い。)
12．黄褐色土(1.0～3.0㎝大の礫を多く含み，粘性がやや強い。)
13．黄橙色土(明黄褐色土と0.5㎝大の礫を多く含み，3.0㎝大の礫を少し含む。)
14．黄橙色土＋明赤褐色土＋灰白色粘質土の混土(部分的に5.0㎝大の礫を含む。)
15．黄褐色土(1.0㎝大の礫を少し含む。)
16．にぶい黄褐色土＋明赤褐色土＋黒褐色土の混土
17．にぶい黄褐色土＋明赤褐色土＋黒褐色土の混土(16より暗い。)
18．黒褐色土(粘性がやや強い。)
19．黒褐色土(粘性を帯びる。18よりやや暗い。)
20．褐色土
21．褐色土(須恵器片を含む。)

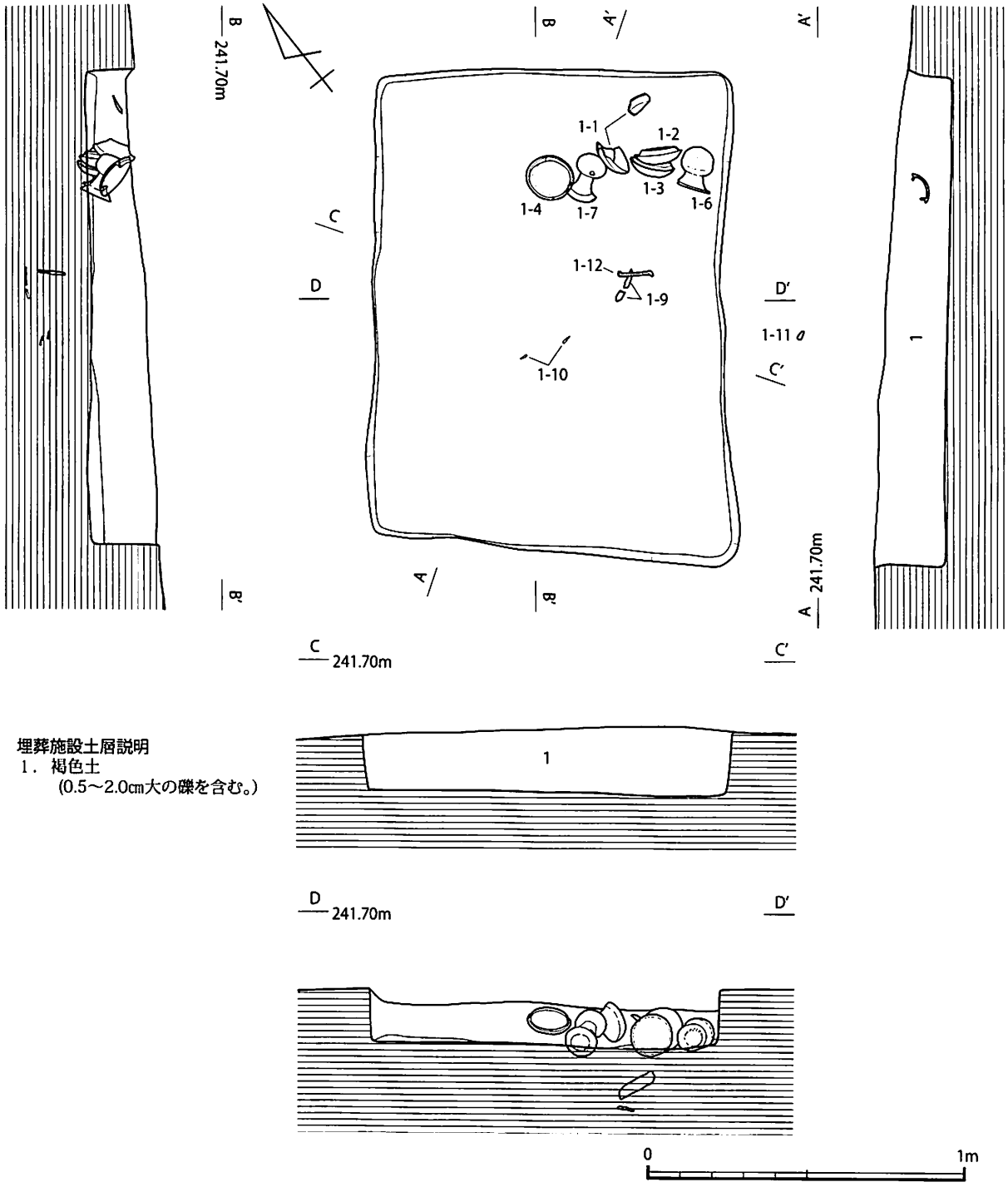
旧表土
22．黒褐色土(褐灰色土をブロック状に含む。)

■は埋葬施設，▨は撹乱を示す。

第８図　長畑山北第１号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）

（3）埋葬施設（第9図，図版4）

墳丘のやや南西寄りで土坑1基が検出され，木棺と考えられる。土坑の平面形は長方形であり，長軸は北東（N-39°-E）を向く。規模は，長さ1.45～1.57m，幅1.11～1.17m，深さ0.15～0.23mであり，やや幅が広い。床面は僅かな高低差があるがほぼ平坦で，やや固く締まっている状況であった。壁面の立ち上がりは，少し傾斜があるものの垂直に近い。埋葬施設の埋土は小礫を含



第9図　長畑山北第1号古墳　埋葬施設実測図（1：20）

む褐色土の単一層である。

頭位と考えられるのは北東側で，ここから須恵器６点が一列に並んだ状態で出土した。なお，南から北に延びる尾根筋は，古墳群周辺から北東に延びており，頭位の方向はこれを意識したものとも思われる。

埋葬施設として検出した土坑の平面形は幅が広く，一般的な形とは差異がある。埋土と盛土が非常に類似した土であったが慎重に進めた調査成果として，現段階ではこれを特徴として捉えている。しかし，このような埋葬施設の類例に乏しいため，今後の調査例の増加を待って検討したい。なお，盛土から出土した鉄器（鉄鏃・刀子・鎌）の範囲をもとに考えると，土坑の長軸は東西方向を向いていたと推定することもできる。

（４）遺物出土状況（第９図，図版４）

埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身・瑞），盛土から鉄器（鉄鏃・刀子・鎌），墳丘裾部や周溝から須恵器（高杯・提瓶・大甕）や土師器が出土している。

須恵器杯蓋1-1，杯身1-2～1-4，瑞1-6・1-7の６点は埋葬施設の北東側から一列に並んだ状況で出土した。南東から北西に向かって瑞1-6，重ねられた２点の杯身1-2・1-3，杯蓋1-1，瑞1-7，杯身1-4の順である。高杯1-5は墳丘北西側の裾部からやや散乱した状態で，埋土の上層や中層から出土した。提瓶1-8は，周溝北西側の中層や下層からまとまって出土したが，一部は北東側の墳丘検出面や墳裾からも出土しており，１号古墳より高所から流れてきた可能性もある。また，何れも細片のため図示していないが，須恵器大甕の２～７cm大の体部片が，墳丘南東側を中心とする裾部から約30点出土している。

土師器は，北西側の周溝や古墳西側の表土から細片が数点出土した。

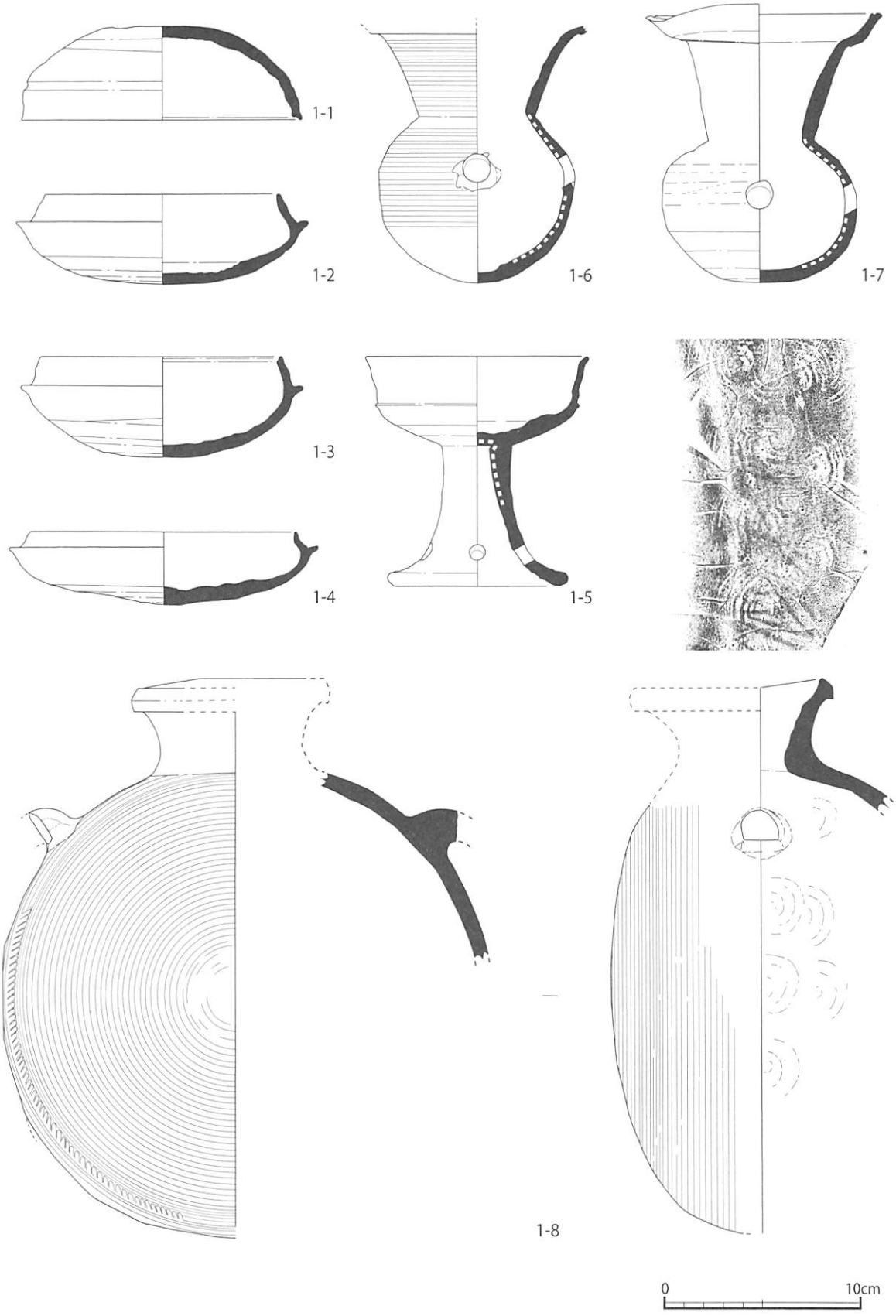
鉄鏃1-9・1-10は埋葬施設下の盛土中から出土した。平面的には鉄鏃1-9が埋葬施設の中央やや東寄りで床面から0.20～0.21ｍ下，鉄鏃1-10が埋葬施設の中央やや南寄りで床面から0.15～0.16ｍ下から出土した。鎌1-12も鉄鏃1-9近くからの出土であるが，床面からは0.08～0.17ｍ下でやや浅い場所からの出土である。刀子1-11も盛土からの出土である。埋葬施設から東に0.23ｍ離れた場所から，鉄鏃1-10とほぼ同じ深さから見つかった。

（５）出土遺物について

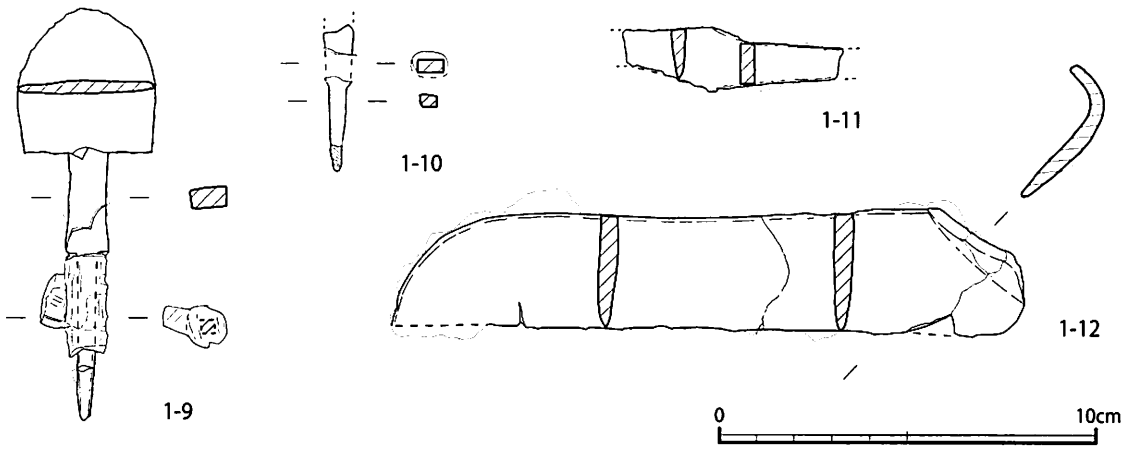
出土遺物には，須恵器（杯蓋１点・杯身３点・高杯１点・瑞２点・提瓶１点），鉄器（鉄鏃２点・刀子１点・鎌１点）がある。ほかに須恵器（大甕）や土師器があるが，細片のため図示していない。なお，個々の寸法や特徴は，第２表の出土遺物観察表にまとめている。

須恵器（第10図，図版23）

杯蓋1-1・杯身1-2～1-4は，瑞1-6・1-7とともに，埋葬施設から直線的に並んで出土した。杯蓋1-1は，口径14.5cm，器高4.8cmである。やや丸みのある天井部と口縁部の間には凹線が巡り，口縁端部は段をもつ。杯身1-2と1-3は，口径はともに12.4cm，受部径は15.0cmと14.5cm，器高は4.6



第10図　長畑山北第１号古墳　出土遺物実測図（１）（１：３）



第11図　長畑山北第１号古墳　出土遺物実測図（２）（１：２）

cmと5.1cmである。立ち上りは2.0cmと2.1cmでどちらも内傾しているが，1-2の端部は丸くおさめ，1-3の端部は段をもつ点が異なる。また，1-2の受部はやや外上方を向き，1-3の受部は外方向を向き，端部はともに丸みを帯びている。これらの特徴から，杯蓋1-1や杯身1-2・1-3は概ねＴＫ10型式の併行期に相当すると考えられる。しかし，杯身1-4の口径は14.0cm，受部径は16.1cmで一回り大きく，器高は3.7cm，立ち上がりは0.8cmと低い。ＴＫ43型式の併行期にも相当する特徴をもっているが，出土状況から考えて追葬の可能性は低い。

高杯1-5は周溝などから出土しており，復元口径12.4，器高11.7cmの無蓋高杯である。杯部と脚部ともに半分ほど残り，杯体部の外面には明瞭な稜線が巡る。脚部の下位には，三方向に小さな円形の透かし孔があった痕跡が残る。

甕1-6・1-7は前述のように埋葬施設から出土した。1-6は口縁部を欠いているが，ほかはよく残る。頸部と体部の外面にはカキ目を施している。底部から体部の高さ8.5cmに対して，頸部の高さは4.2cmと短い。完形品ではないので明らかではないが，杯蓋や杯身よりやや古い様相とも言える。1-7は口縁部一部を欠くが，ほぼ完形品である。口縁部の焼き歪みは大きく，端部は段をもっている。1-6より頸部が細くしまっており，明らかに形態が異なる。

提瓶1-8は周溝などから出土し，口径は10.2cm，残存器高は28.0cmと大型である。口縁部から体部は半分ほど残り，体部側面の両肩には角状の把手が貼り付けられた痕跡がある。体部内面に同心円文が見られ，外面にはカキ目を施しその周辺には部分的に刺突文も見られる。また外面から口縁部の内面にかけての広い範囲で，自然釉が比較的厚くかかっている。

鉄器（第11図，図版23）

鉄鏃1-9・1-10は盛土から出土した。1-9の鏃身は先に丸みをもつ三角形，頸部と茎部の断面形は方形である。茎部に別の鉄鏃片が付く。1-10は頸部と茎部のみで，断面形は方形である。

刀子1-11も盛土から出土し，刃部と茎部の一部のみ残る。

鎌1-12も鉄鏃の近くの盛土から出土した。全長は16.7cmの直刃鎌であり，折り返しの様子から135°程度の鈍角に柄がついていたとも考えられる。

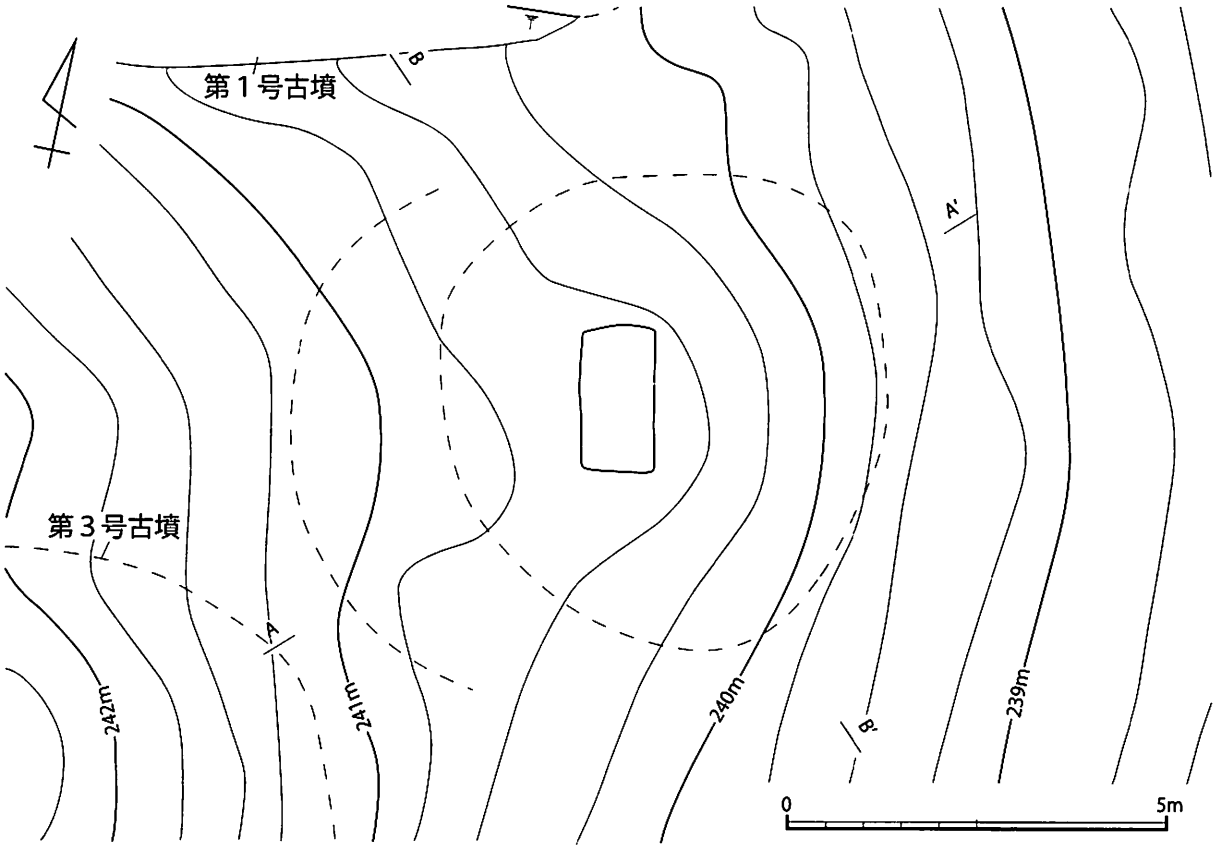
2　長畑山北第２号古墳

（１）立地と調査前の状況（第12図，図版５）

南から北に延びる丘陵の先端部付近に立地し，西から東方向に下る緩やかな斜面上にある。丘陵に沿って並ぶ古墳群の中では，第１号古墳に次いで北に位置している。ただし，第２号古墳と第３号古墳は，ほかの古墳からみればやや東寄りにあり，第２号古墳は最も東に位置している。また，古墳群の周辺から尾根筋は北東方向に延びているため，丘陵下に広がる集落から眺めれば第１号古墳と第２号古墳は並んで見える。標高は墳頂部で240.6mと古墳群の中で最も低い場所にあるが，盛土を復元すれば第１号古墳の241.6mとほぼ同じ数値を示すと考えられる。

調査前の観察では，削平や盗掘などを受けた痕跡はなかったが，見た目では墳丘の高まりがほとんど感じられない程度しかなく，ほとんどの盛土が流失しているか，残っていても僅かであることが予想された。しかし，背面である西側では周溝が１／３程度廻る様子が比較的顕著に確認できた。斜面下側である東側の裾部がほかと比べるとやや直線的であるが，それ以外の裾部は比較的きれいな丸みを持ち，平面形は円形に近い様子であった。

墳丘に石材の露出や散乱はなく，また事前の試掘調査の結果と合わせ，木棺を埋葬施設とする小規模な円墳であると考えられた。しかし，盛土の様子から，埋葬施設の遺存状況は悪いことが予想された。



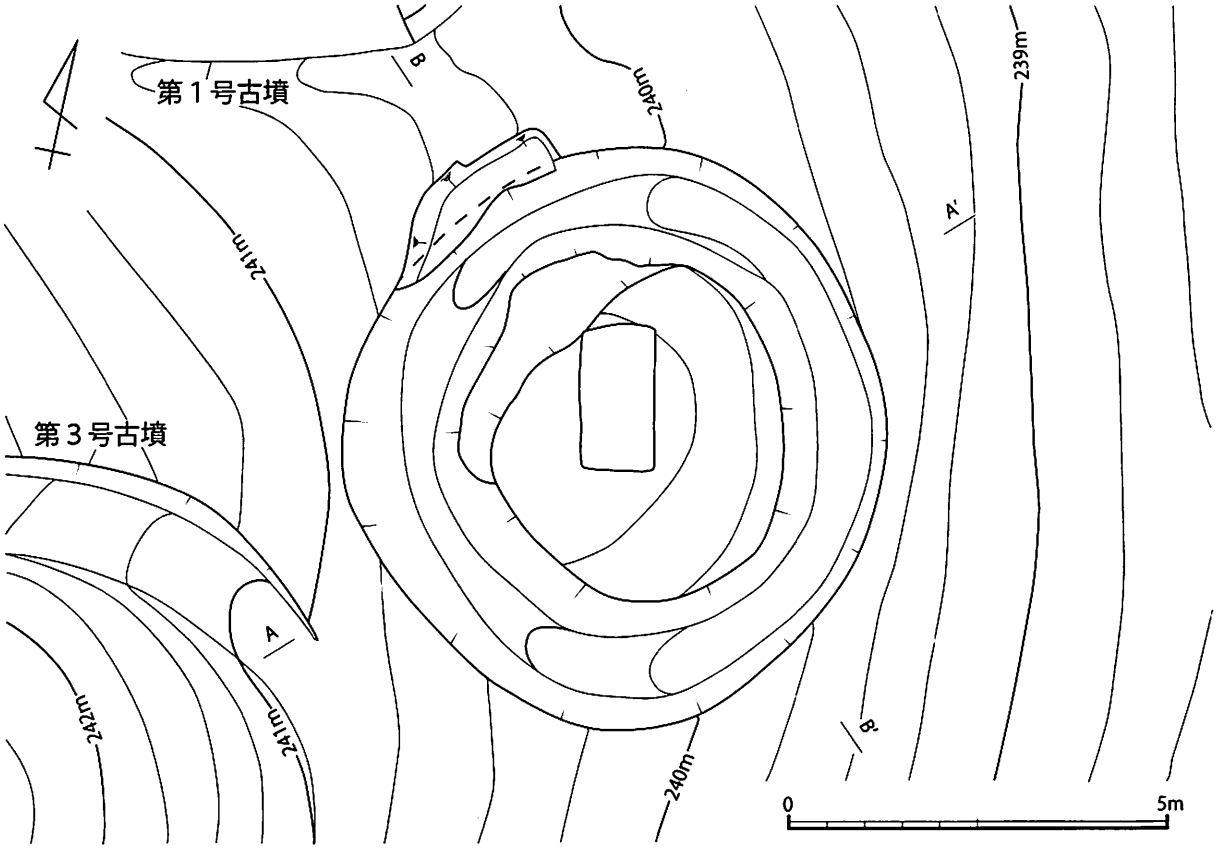
第12図　長畑山北第２号古墳　調査前地形測量図（１：100）

（２）墳丘・周溝（第13・14図，図版５・６）

墳丘は，直径5.1～5.5ｍで，北西側の一部が張り出すが円形に近い平面形である。墳丘の中央付近に頂部があり，やや南東寄りに東西3.9ｍ×南北4.4ｍの平坦面がある。この平坦面の北西側には幅3.8ｍ，長さ1.0ｍの範囲で，ごく緩やかな斜面が続いている。墳丘の高さは，斜面下側（東側）の墳裾からは1.2ｍ，斜面上側（西側）の墳裾からは0.6ｍである。

ほかの古墳は，斜面の上側を中心に周溝が１／２～２／３程度廻っているが，第２号古墳のみ全周している。同じような立地にある第１号古墳でも，斜面の上側を中心に周溝が１／２程度しか廻っていない。周溝が全周している理由としては，墳丘の規模が第６号古墳に次ぐ小規模なものであり，斜面上側の墳裾と斜面下側の墳裾で高低差があまり生じなかったことが挙げられる。ほかの古墳は，背面に周溝を掘って区画し，斜面下側は地山を掘り下げることで墳裾を造り出すことができたが，第２号古墳では全周する周溝を掘って区画する方法が，最も有効であったと考えられる。

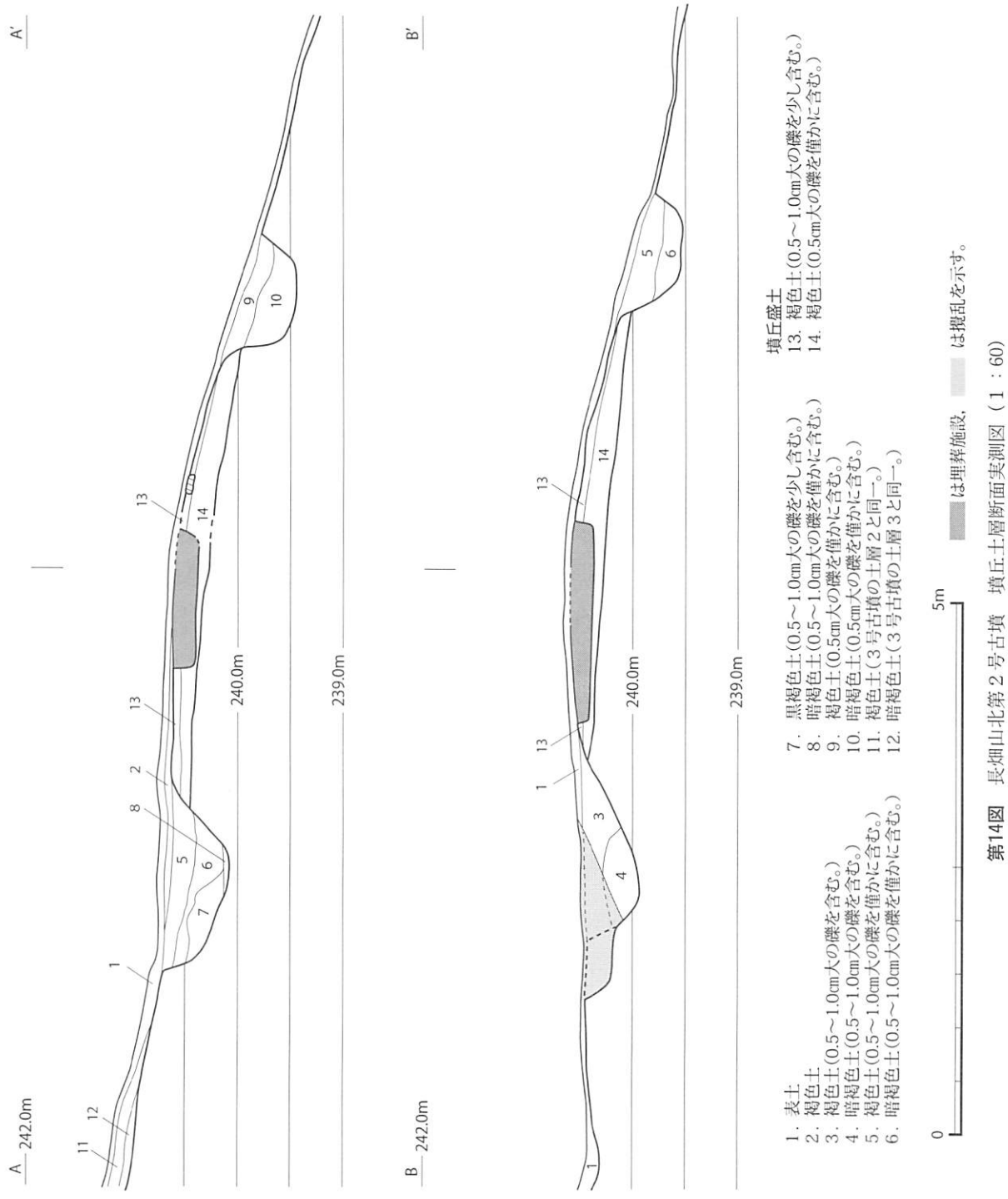
周溝の規模は，幅1.2～1.8ｍ，深さ0.3～0.6ｍであり，斜面上側のほうが，幅が広く深い傾向がある。周溝の断面は，斜面下側がやや幅の広いＵ字状をしており，斜面上側では周溝の内側か外側の何れかの斜面が緩やかに落ち込む形である。周溝の外側の上端は，直径7.1～7.6ｍで，平面形がきれいな円形をしている。北西部で一部崩れた所があるが，これは試掘調査によって掘り下げされた跡であり，墓道などに関係するものではない。



第13図　長畑山北第２号古墳　墳丘測量図（１：100）

盛土は，現状での厚さ0.3mである。小礫を含む褐色土が比較的均一の厚みに盛られており，その上にも小礫を含む褐色土が盛られている状況を確認できた。上下層とも小礫を含んでいるが，下層のほうがより細かい。この小礫は，地山に含まれる礫と同じものが細かくなったものと推則される。

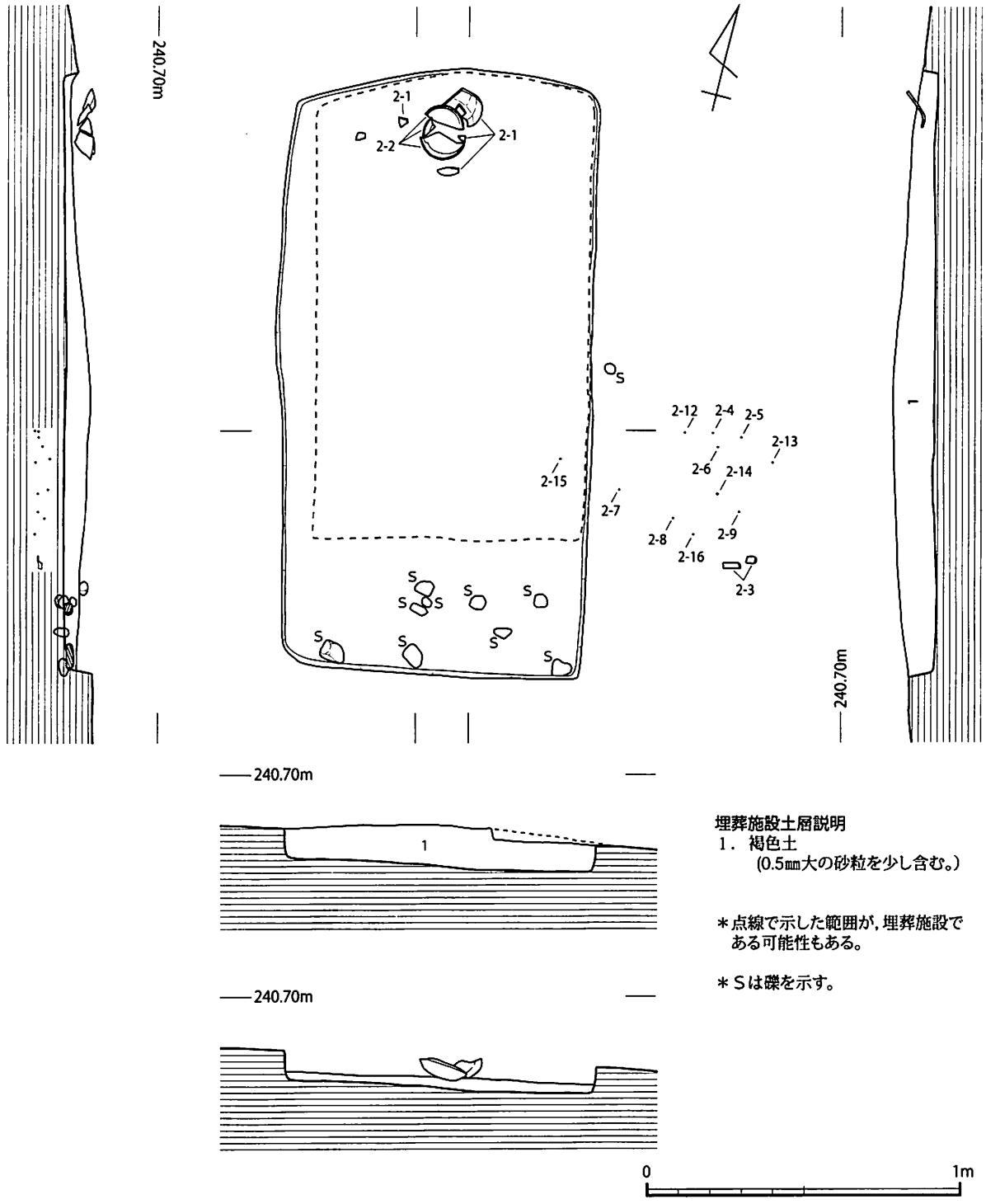
なお，墳丘や周溝の平面プラン及び土層観察では，隣接する第１号古墳や第３号古墳との重複関係は確認できなかった。



第14図　長畑山北第２号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）

（３）埋葬施設（第15図，図版７）

墳丘の中央部付近で土坑１基が検出され，木棺と考えられる。土坑の平面形は長方形であり，長軸は北（N-14°-W）を向く。規模は，長さ1.82～1.95m，幅0.97～1.02m，深さ0.05～0.08mである。頭位と考えられるのは北側であり，壁際から棺外に副葬されたと思われる須恵器（杯蓋・杯身）が出土した。床面は僅かな高低差があるがほぼ平坦で，やや固く締まっている状況で



第15図　長畑山北第２号古墳　埋葬施設実測図（１：20）

あった。また，南側の床面には0.05m大を中心とする丸みを持った９個の礫があり，床面より下に半分ほど埋まっているものもある。壁面の立ち上がりは，少し傾斜があるものの垂直に近い。埋葬施設の埋土は盛土と同じ小礫を含む褐色土の単一層であるが，盛土よりやや明るい。

なお，分層して示すことは難しいものの，土色と固さに微妙な違いがあった範囲を第15図に点線で示した。初期の段階では，不明瞭ながら精査して確認した平面プランから，ここが埋葬施設であると考えた場所である。埋土の状況，形や規模などから，木棺の痕跡とは考えにくい。

（４）遺物出土状況（第15図，図版７）

埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身），土師器が出土した。須恵器は墳丘検出面や周溝からも，土師器は周溝からも出土している。また，盛土から鉄器（摘鎌），玉類（滑石製小玉・土玉）が比較的まとまって出土しており，築造時に何らかの祭祀が行われた可能性がある。

須恵器杯蓋2-1，杯身2-2は埋葬施設の北側から壁面近くで出土した。ともに割れた状態であるがほぼ完形品であり，口縁部を重ね合わせた状態で棺外に副葬されたと推測される。ほかに須恵器の細片が，東側の墳丘検出面や西側の周溝から10点ほど出土している。

土師器は，埋葬施設北西隅の床面から細片が１点，南西側の周溝から細片が数点出土した。

摘鎌2-3は，埋葬施設東側で，盛土の中から２点に割れた状態で出土した。埋葬施設からは0.45～0.65m離れ，床面より0.07～0.09m下である。

滑石製小玉８点2-4～2-11と土玉13点2-12～2-24は，一部は埋葬施設の床面直上から出土したが，多くは埋葬施設東側の東西0.6m×南北0.4mの範囲で，盛土の中から出土した。例えば円弧状に出土するなど，出土場所に規則性は見られない。床面からは0.04～0.10mの深さであり，盛土の下層である。滑石製小玉のうち，2-4～2-9は出土場所を第15図に示しているが，2-10は鉄器2-3の約0.1m北から，2-11は埋葬施設の北東部床面直上から出土した。また土玉も2-12～２-16の出土場所を第15図に示しているが，2-17・2-18は2-13近くから，2-19・2-20は鉄器2-3の約0.1m北から出土した。2-21・2-22・2-23は，ほかの土玉と同じ辺りの盛土から，2-24は埋葬施設の南東部床面直上からの出土である。

（５）出土遺物について

出土遺物には，須恵器（杯蓋１点・杯身１点），鉄器（摘鎌１点），玉類（滑石製小玉８点・土玉13点）がある。ほかに土師器があるが，細片のため図示していない。なお，個々の寸法や特徴は，第２表の出土遺物観察表にまとめている。

須恵器（第16図，図版24）

杯蓋2-1・杯身2-2は，埋葬施設から出土した。杯蓋2-1の口径は15.0cm，器高は4.8cmである。やや丸みのある天井部と口縁部の境には不明瞭ながら稜線が見られ，口縁端部には段がある。杯身2-2の口径は12.6cm，受部径は15.2cm，器高は4.8cmである。立ち上りは2.4cmで内傾しており，端部は丸くおさめている。受部はやや外上方を向き，端部は丸みをもっている。これらの特徴か

ら，杯蓋2-1・杯身2-2は概ねＴＫ10型式の併行期に相当すると考えられる。

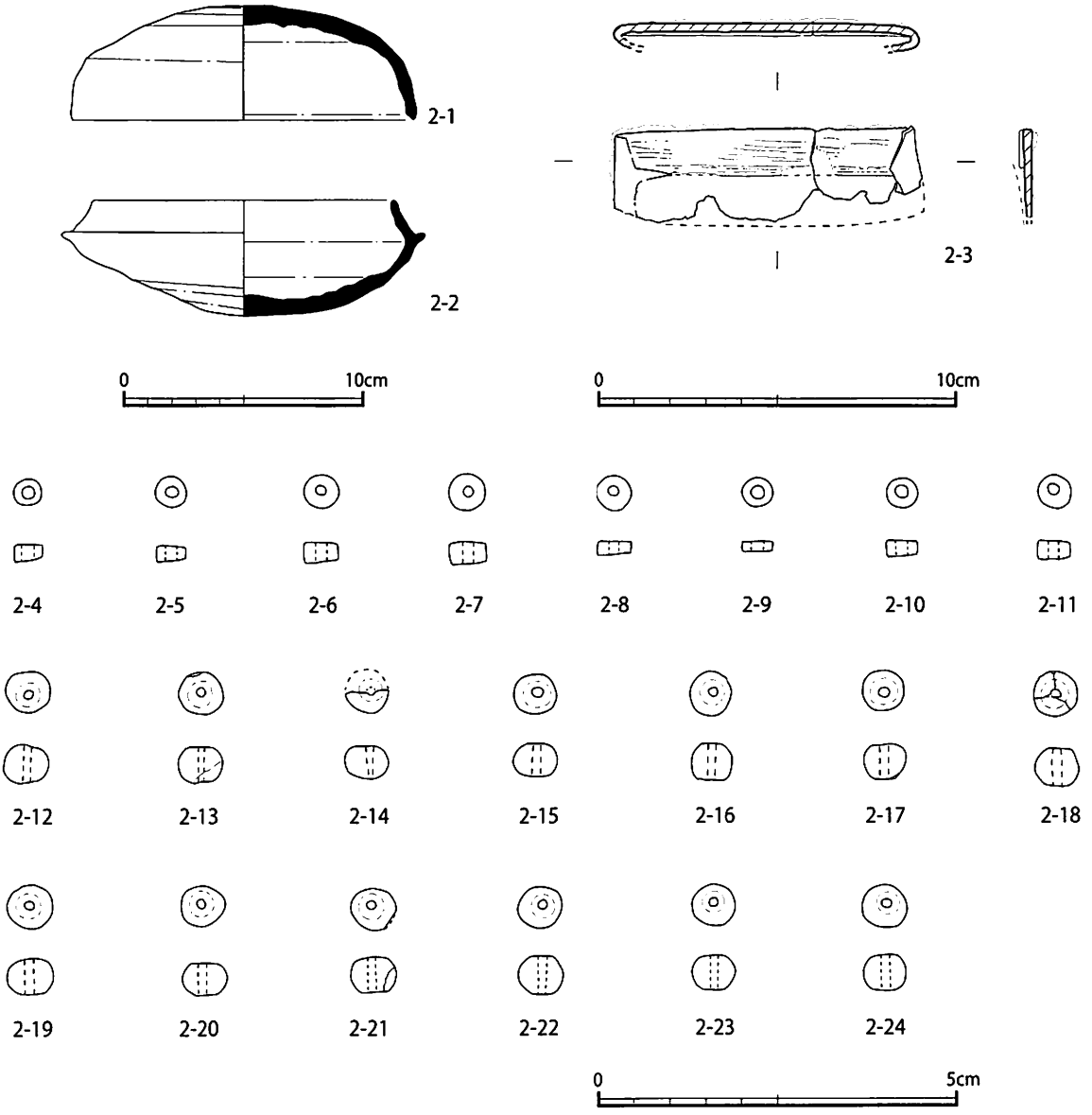
鉄器（第16図，図版24）

摘鎌2-3は盛土から出土した。刃先はほとんど欠損しているが両側の折り返しは残り，全長は7.7cm，高さ2.6cm，厚さ0.3cmである。持ち手の部分には，全体的に木質が見られる。

玉類（第16図，図版24）

滑石製小玉2-4～2-11は主に盛土から出土した。長さ1.6～3.0mm，径4.0～5.4mmである。孔径は1.4～1.9mmで，初孔と終孔の径は同じことから，穿孔具を貫通させたことが分かる。側面はよく研磨されているが，上面と下面は無研磨の可能性もある。

土玉2-12～2-24も主に盛土から出土し，滑石製小玉も含めて被葬者に装着されていなかったことが窺える。長さ4.5～5.6mm，径5.8～6.7cm，孔径1.3～1.6cmである。焼成後に，孔の両側を研磨することで面を整えているものが多い。



第16図　長畑山北第２号古墳　出土遺物実測図（１：１，１：２，１：３）

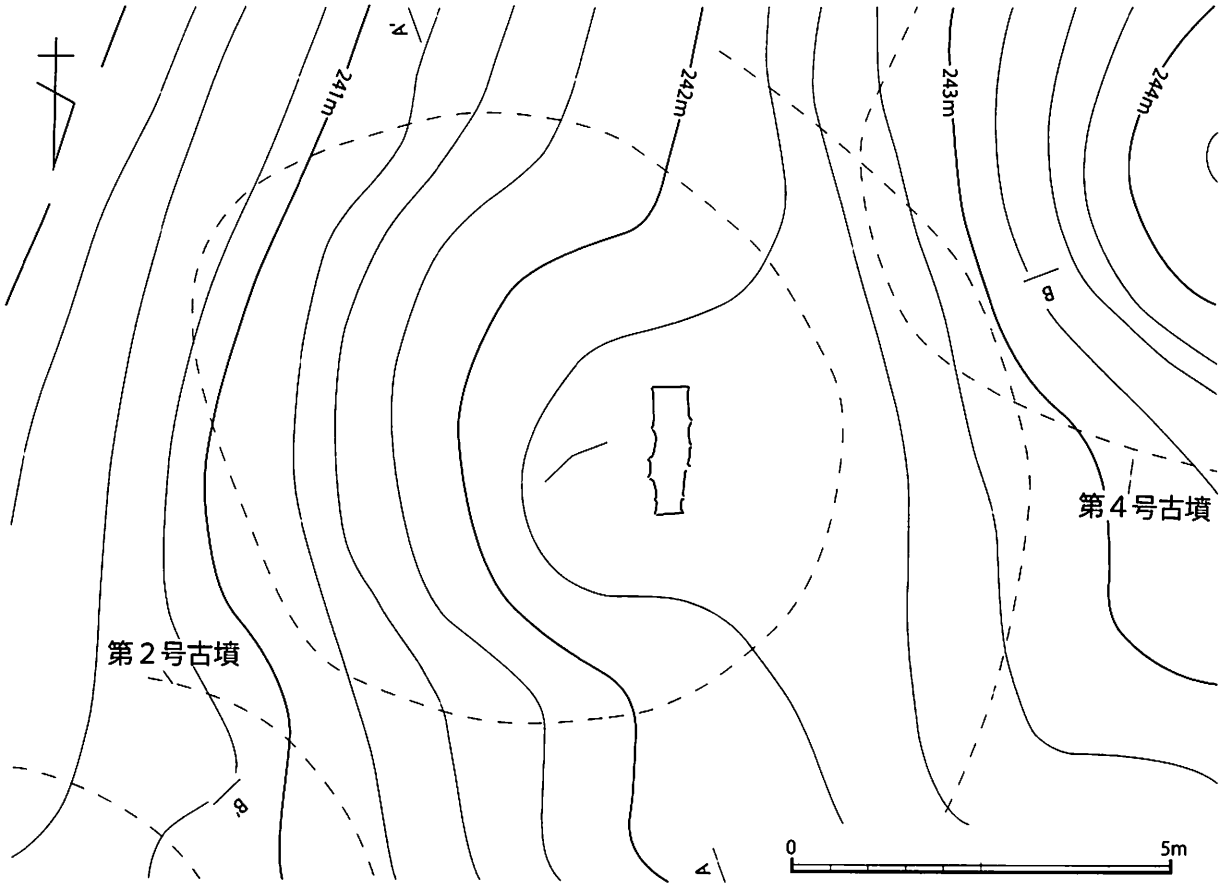
3　長畑山北第３号古墳

（１）立地と調査前の状況（第17図，図版８）

南から北に延びる丘陵の先端部付近に立地し，西から東方向に下る緩やかな斜面上にある。丘陵に沿って縦長に並ぶ古墳群の中では，第１号古墳や第２号古墳に次いで北に位置している。また，ほかの古墳からみれば，第２号古墳とともにやや東寄りにある。標高は墳頂部で242.4mであり，古墳群の中で最も低い場所にある第２号古墳より1.8m高い。

調査前の観察では，大きく削平を受けた痕跡はなかった。ただし，墳丘の高まりは比較的はっきりとしているが低くなだらかな状態であり，盛土の多くが流失していることが予想された。また，事前の試掘調査の結果から埋葬施設は竪穴式石室または箱式石棺と考えられたが，天井石や蓋石に相当する石材は揃っておらず，長方形の四辺の位置に石材が僅かに露出している状況であった。

背面である西側では，周溝が１／３程度廻る様子が窺えた。斜面下側である東側の裾部が部分的に直線的になっているが，それ以外の裾部は比較的きれいな丸みを持ち，東西にやや広がるものの円形に近い平面形と考えられた。また，その後の調査で重複関係はないことが分かったが，周溝西側の一部が第４号古墳の墳裾と重なっているように観察できた。



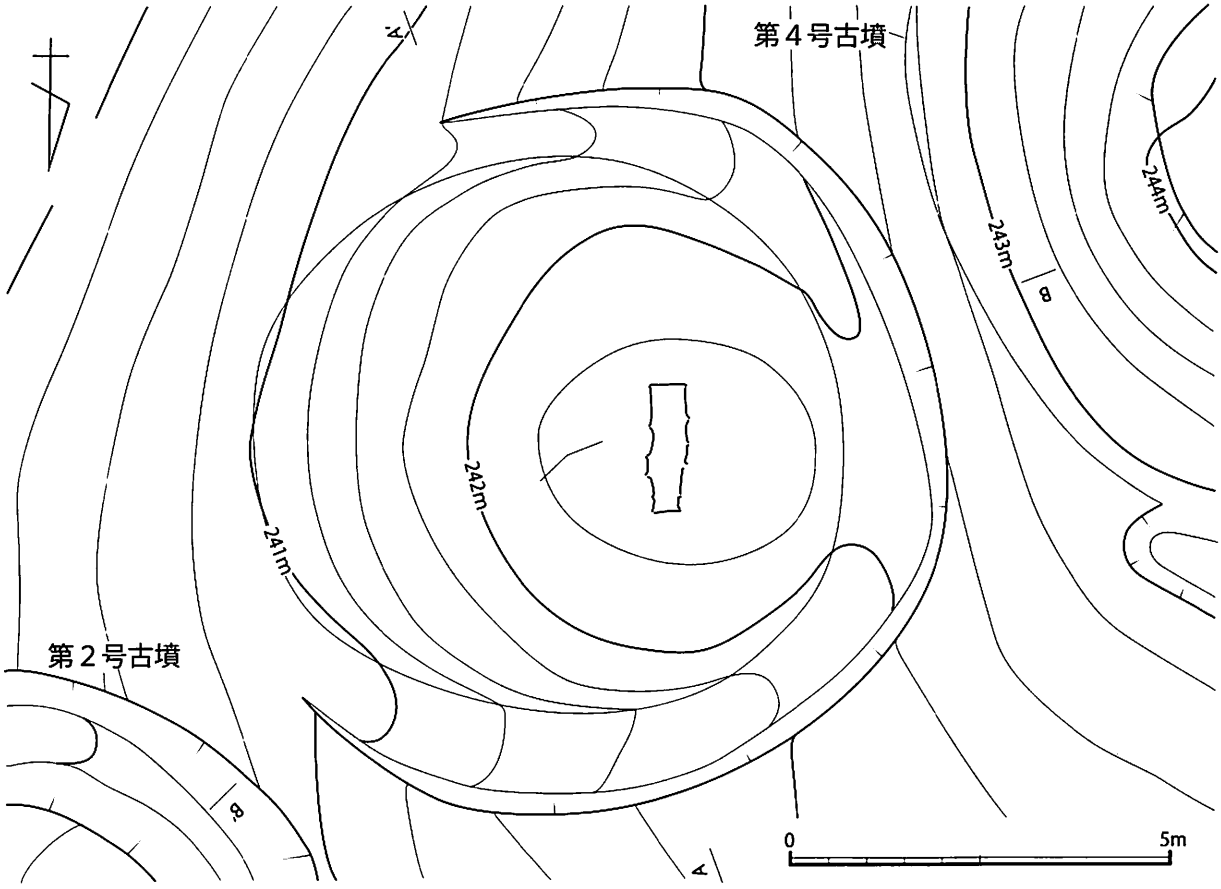
第17図　長畑山北第３号古墳　調査前地形測量図（１：100）

（２）墳丘・周溝（第18・19図，図版８・９）

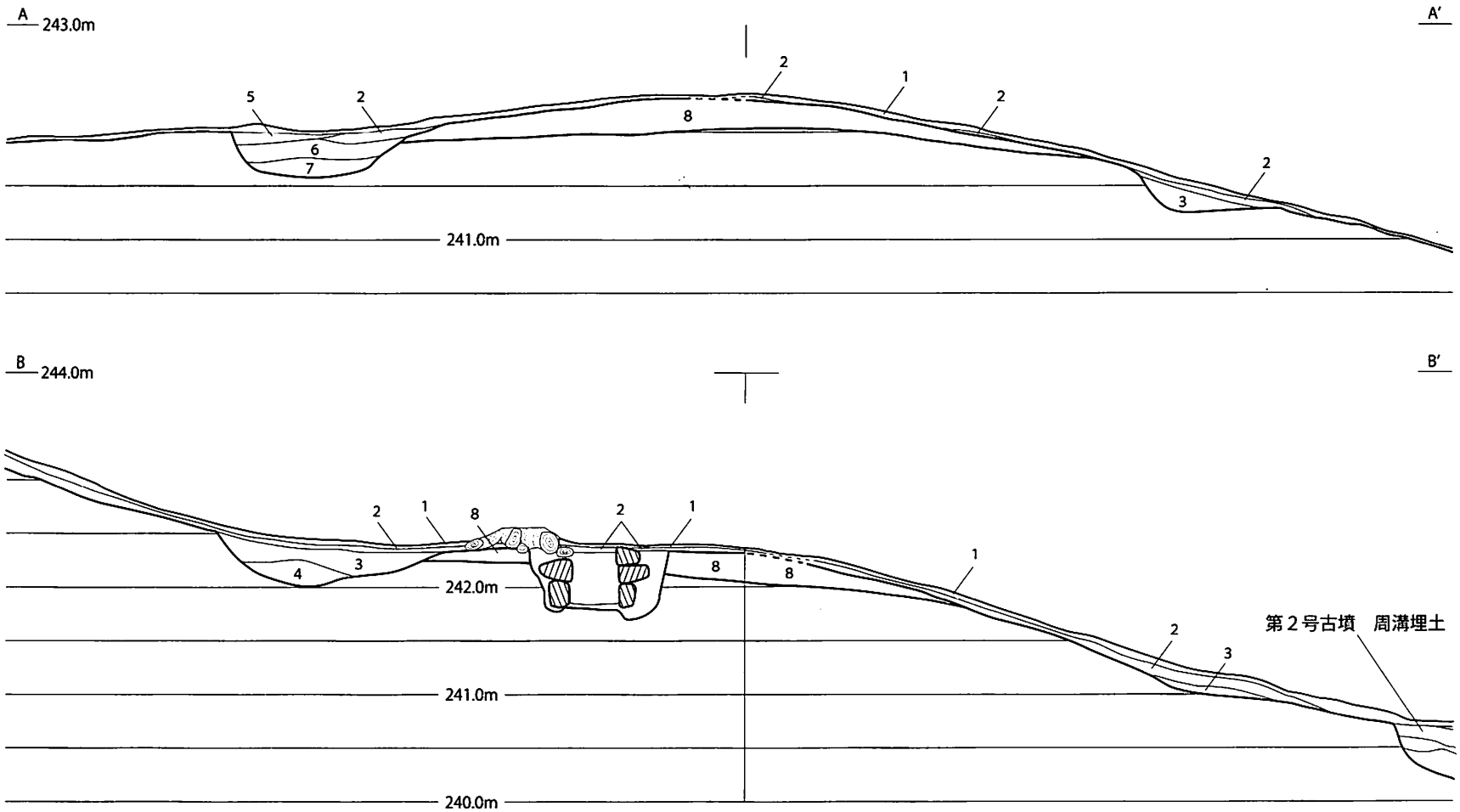
墳丘は，直径7.3～7.8ｍで，東西方向にやや長いものの，円形に近い平面形である。墳丘の西寄りに頂部があり，埋葬施設の場所と重なっている。墳頂から東側の墳裾までは比較的なだらかで，特に埋葬施設の東側は平坦に近い。そのため，埋葬施設が別に存在することも考えられたが，最終的には単独であると判明した。

墳丘の高さは，斜面下側（東側）の墳裾からは1.3ｍ，斜面上側（西側）の墳裾からは0.4ｍである。斜面に葺石などを施した痕跡はなく，埋葬施設以外で石材が出土することはなかった。斜面下側は地山を僅かに削って裾部を造り，斜面上側は幅2.1ｍ，深さ0.5ｍの周溝によって区画されている。墳丘の２／３よりやや多く廻る周溝は，幅が広く浅い。周溝の底から墳丘側の斜面はなだらかな傾斜であるが，底から外側の上端まではやや急な斜面となっている。周溝の上端から第４号古墳の墳裾までは現状で0.8ｍであり，周溝の外側の傾斜を急にすることで第４号古墳の墳裾を壊さないようにしたとも考えられる。なお，ほかの古墳とも，墳丘や周溝の平面プランや土層観察で重複関係は確認できなかった。

盛土は，現状での厚さ0.3ｍであり，小礫を少し含む褐色土の単一層である。盛土に含まれる小礫は，地山に含まれる礫と同じものが細かくなったものと思われる。盛土の下は地山の黄褐色土層であり，埋葬施設の掘方は地山まで掘り込まれている。



第18図　長畑山北第３号古墳　墳丘測量図（１：100）



1．表土
2．褐色土
3．暗褐色土
4．暗褐色土(0.5cm大の礫を僅かに含む。)
5．黄褐色土(0.5～1.5cm大の礫を多く含む。)
6．にぶい黄褐色土
7．暗褐色土(3よりやや明るい。)

墳丘土層
8．褐色土(0.5～1.5cm大の礫を少し含む。)

0　5m

第19図　長畑山北第３号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）

（３）埋葬施設（第20図，図版10・11）

埋葬施設は小規模な竪穴式石室１基であり，墳丘の中央より西寄りで南北方向（N－1°－E）に構築されている。在地性のある横穴式石室に近い石の積み方であり，一般的な竪穴式石室とは様子が異なっている。調査前の段階で地表面に露出しており，２枚しか残っていない天井石は本来の位置から移動した状態であった。内法の長さは1.67m，内法の幅は頭位と考えられる南側で0.46m，足元の北側で0.34mである。石室内から須恵器（杯蓋・杯身・大甕）や鉄器（刀子・摘鎌）が出土しており，床面には礫が敷かれている。

①　天井石

北側の小口あたりで，石室内にやや落ち込んだ状態で２枚確認された。本来は５枚程度の石材が，天井石に用いられていたと思われる。石材は共に均一な厚みを持ち，平面形は丸みのある比較的細長いものである。小口側が８～11cmの厚みで41×56cmの大きさの石材，中央側が13～15cmの厚みで38×59cmの大きさの石材である。

②　側壁

東側壁の基底には，頭位である南側に高さ36cm，幅54cm，厚さ20cmの大きめの石材を横長に使用している。となりには，高さ33cm，幅42cm，厚さ15cmの石材を横長に使用し，さらに北側の小口までは高さ26～31cm，幅20～29cm，厚さ11～20cmの３点の石材を，縦長に使用している。この上には高さ15～20cm，幅20～30cm程度の13点の石材を横長に使用して２段積み上げているが，南側の小口に接する部分はやや大きめの石材を使って１段で済ませてある。

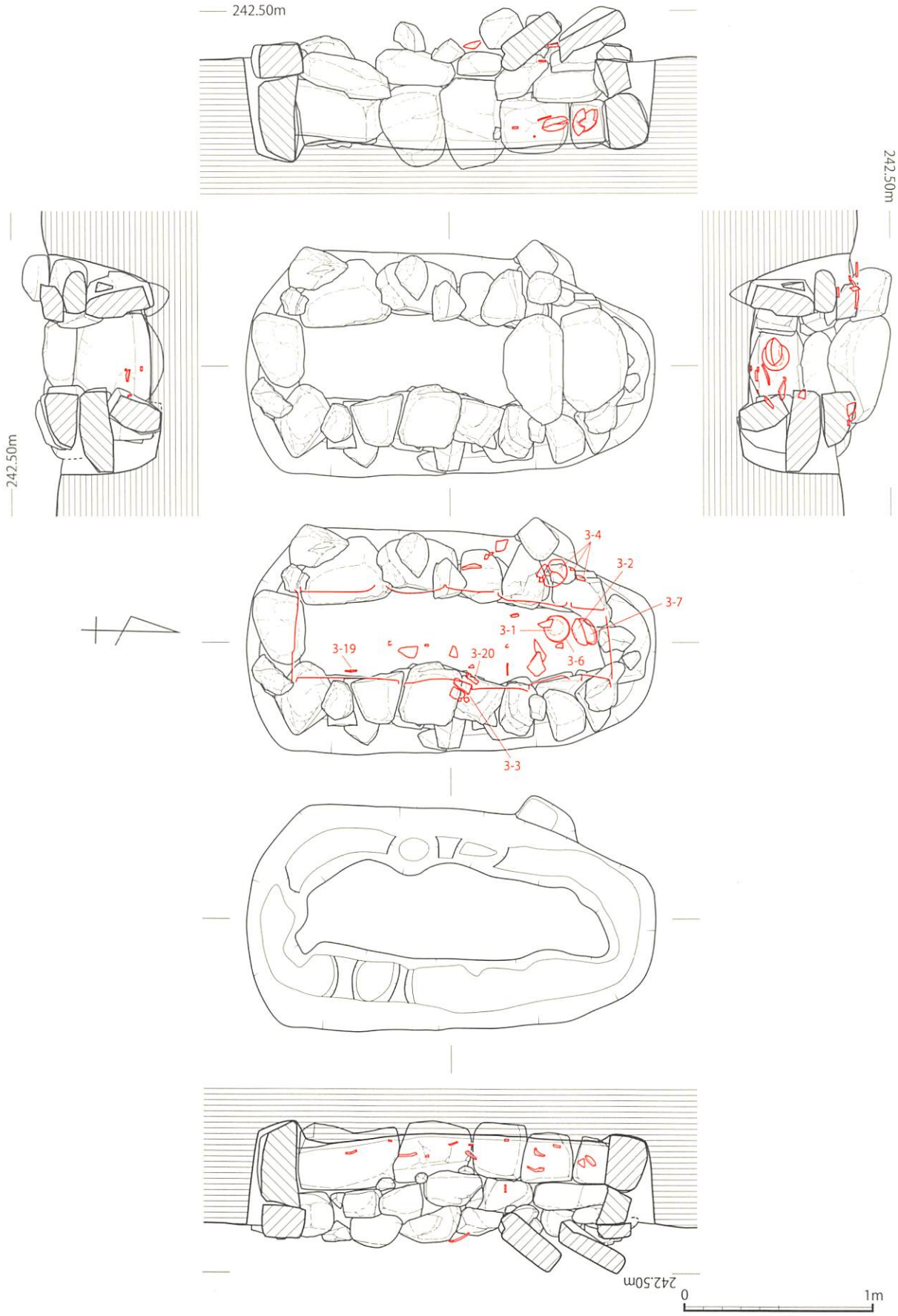
西側壁の基底には，東側壁と同じく南側に高さ36cm，幅47cm，厚さ20cmの大きめの石材を横長に使用しているが，となりには，高さ45cm，幅35cm，厚さ20cmと，高さ50cm，幅35cm，厚さ20cmの石材を縦長に使用している。さらに北側の小口までは，高さ30cm，幅37cm，厚さ12cmの石材を横長に，高さ27cm，幅20cm，厚さ15cmの石材を縦長に使用している。この上には高さ15～20cm，幅20～40cm程度の７点の石材を横長に１～２段積み上げ，南側の小口に接する部分はやや大きめの高さ21cm，幅52cm，厚さ35cmの平らな石材を使っている。全体的に，東側壁よりも大振りな石材である。

③　小口壁

頭位にあたる南側小口には，高さ47cm，幅63cm，厚さ21cmの平らな石材を立てた状態で横長に使用し，その上に高さ18cm，幅50cm，厚さ23cmの細長い石材が積まれている。北側小口には，高さ30cm，幅55cm，厚さ22cmの細長い石材の上に，高さ21cm，幅48cm，厚さ17cmの細長い石材を積み重ね，高さを揃えるため高さ８cm，幅13cm，厚さ20cmの小型の石材を１枚足している。

④　掘方

掘方は，石材を組める最小限の大きさであり，平面形は隅丸長方形に近い不整形である。規模は，幅1.2m，長さ2.2mである。石材を置く場所は床面よりやや深く掘られており，深さは0.45～0.55mである。

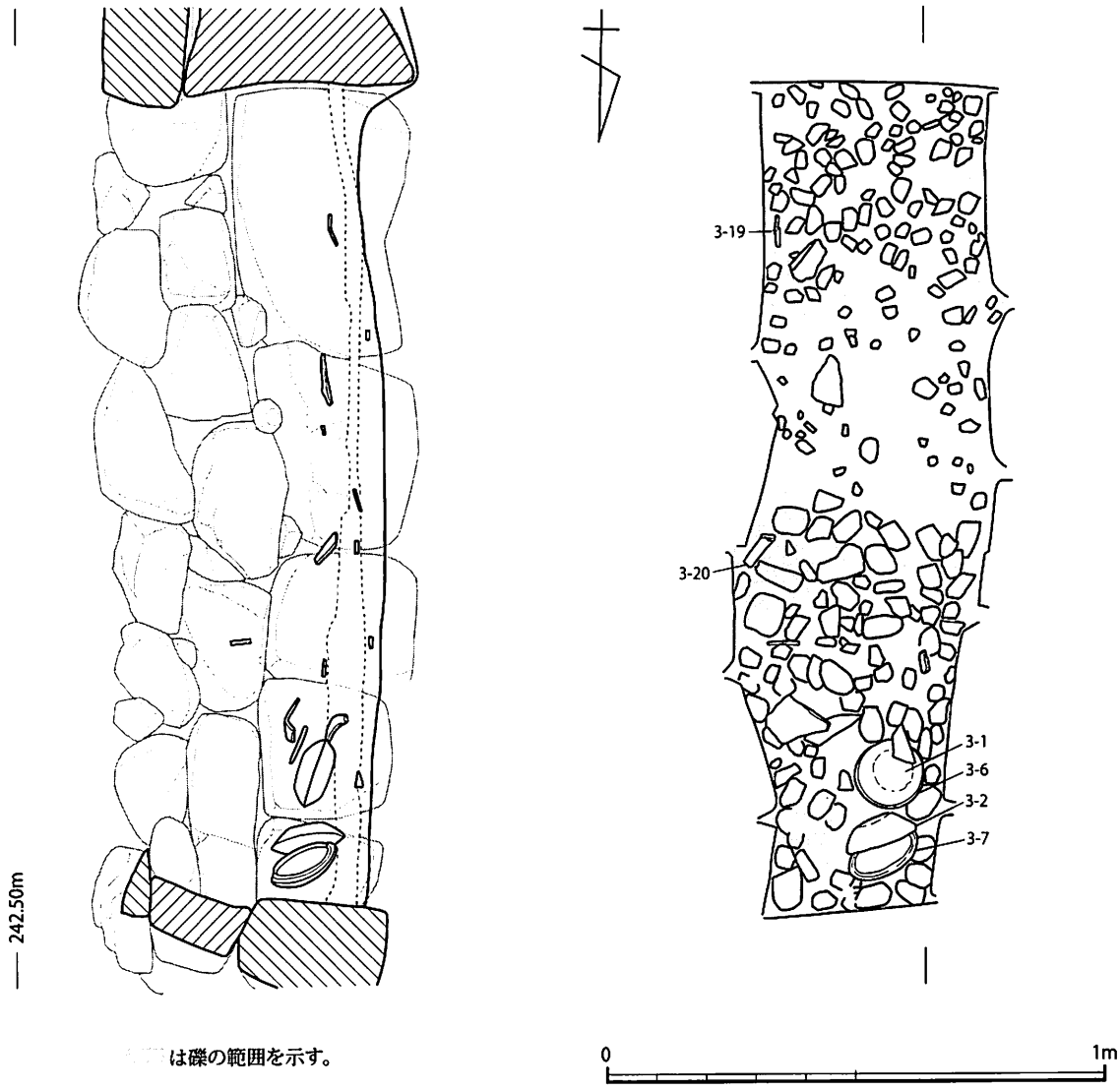


第20図　長畑山北第３号古墳　竪穴式石室実測図（１：30）

（４）遺物出土状況（第21図，図版10）

石室内から須恵器（杯蓋・杯身・大甕），鉄器（刀子・摘鎌）が出土した。側壁の上面から須恵器（杯蓋），周溝や墳丘検出面から須恵器（杯蓋・杯身・瑞・短頸壺・横瓶・大甕），土師器も出土している。

須恵器杯蓋3-1と杯身3-6は，埋葬施設北側の壁面近くで，床面に敷かれた礫の上に立った状態で出土した。本来は口縁部を重ね合わせていたと思われるが，現在はやや離れている。攪乱などによって立った状態になったのか，元々立てられた状態で副葬されたのかは不明である。この南側には，杯蓋3-2と杯身3-7が，杯身に杯蓋を被せ合わせた状態で，床面に敷かれた礫の上から出土した。中に，赤色顔料などの痕跡は見られなかった。杯蓋3-3は石室中央付近の東側壁の上面から出土し，一部は石室内の上層や中層，墳頂部の検出面からも見つかっている。杯蓋3-4は石室北側の西側壁の上面から，割れた状態であるがまとまって出土した。部分的に側壁を構成する石材の下敷きになっていたが，この石材は天井石と同様に本来の位置から動いている可能性がある。



第21図　長畑山北第３号古墳　遺物出土状況実測図（１：15）

杯蓋3-5は，最も大きな破片が埋葬施設東側の墳丘検出面から出土し，ほかに石室内の北側，周溝の北側や西側，墳丘の北西側など，広い範囲から見つかっている。杯身3-8は北側の周溝から出土したが，第２号古墳の周溝からも一部が見つかっている。杯身3-9は，北側や西側の周溝から出土した。杯身3-10は，埋葬施設東側の墳丘検出面や北側の周溝から出土した。杯身3-11は墳丘北東側の検出面や南東側の墳裾，西側の周溝から出土した。

瑞3-12は北東側の周溝中層から出土したが，口縁部付近の破片が石室内の中層や下層，東側の墳裾から出土している。

短頸壺3-13は，南西側の周溝下層や北西側の墳丘検出面から出土した。短頸壺3-14は，北側の周溝下層から出土した。

横瓶3-15は東側の墳丘検出面や裾部下層，北側の周溝上層や下層から出土した。一部は第２号古墳の南西側の周溝上層からも出土している。横瓶3-16は東側の墳丘検出面や裾部下層，北側や東側の周溝上層や下層から出土した。一部は第２号古墳の南西側の周溝上層や表土，第４号古墳の北東側の墳丘表土からも出土している。横瓶3-17は北側や東側の周溝上層や下層から出土し，一部は第２号古墳の調査区内検出面からも出土している。

大甕3-18は生焼けの状態であり，墳頂部の墳丘検出面，西側の周溝上層や下層から出土した。これと同一個体と思われる破片が石棺内から出土しており，礫の上に副葬された２組の杯蓋と杯身以外は，ほとんどがこの大甕の破片と思われる。また，北側や東側の墳丘検出面，北側や西側の周溝上層や下層から出土した土器片も同一個体の可能性が高く，これら全てを合わせると大甕一個体の１／２程度の量になる。

細片のため図示はしていないが，石棺内の礫下からは杯蓋の破片が出土し，北側の周溝からは杯蓋や杯身の破片，大甕（3-18より器壁が厚い。）の破片，盛土から杯身の破片などが出土している。

土師器は少なく，墳頂部の墳丘検出面や北側の周溝から数点の細片が出土した。

刀子3-19は石室南側の東側壁に沿う状態で，礫の上から出土した。埋葬者の頭部付近にあたる。

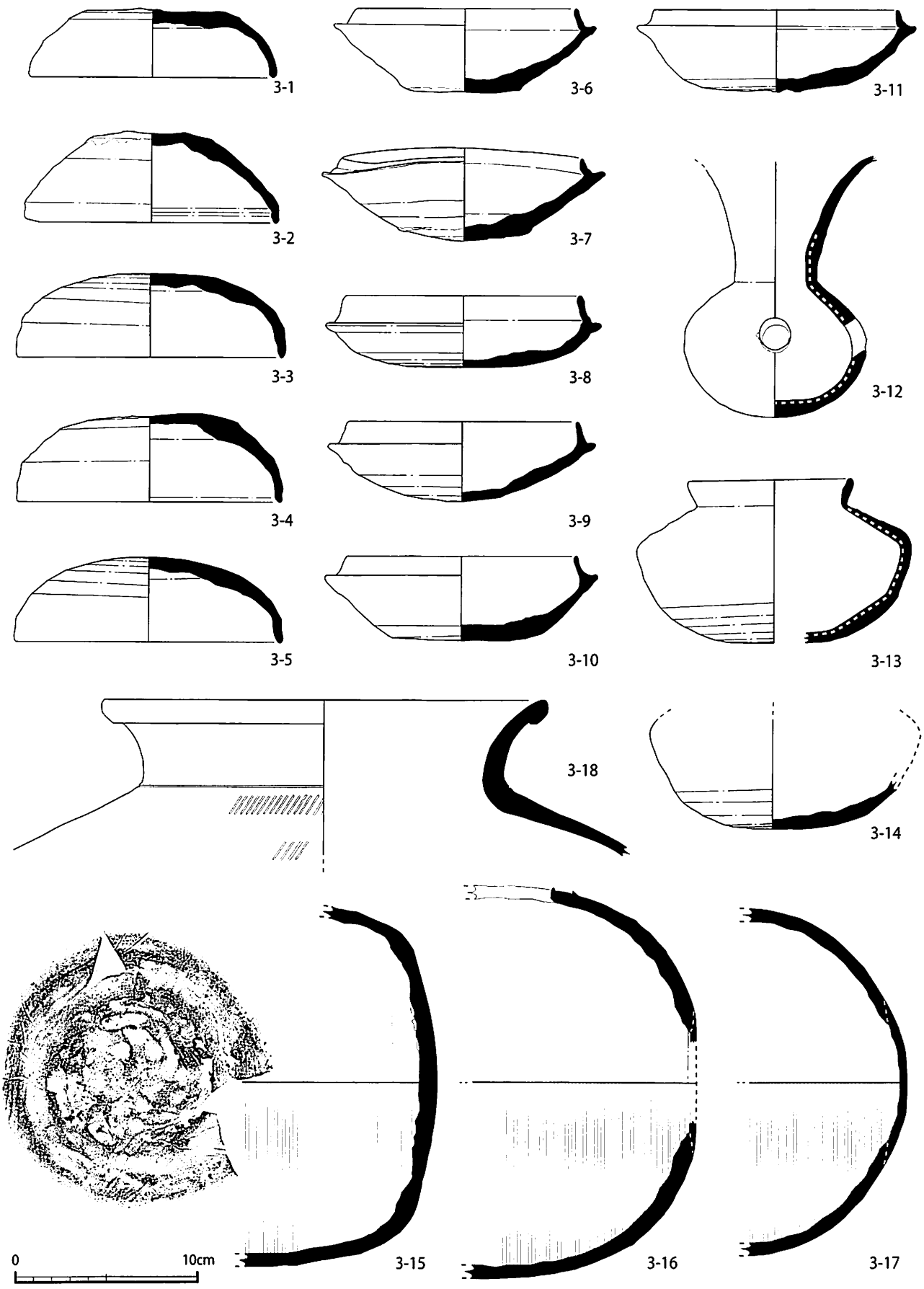
摘鎌3-20も石室中央付近の東側壁際で礫の上から出土したが，南側は礫に接するが北側が礫から浮く，やや斜めになった状態である。

（５）出土遺物について

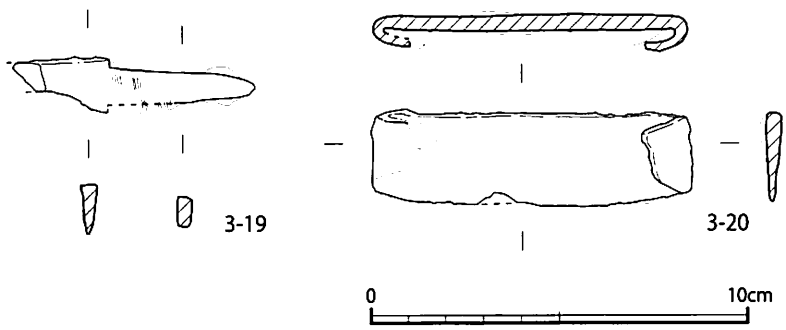
出土遺物には，須恵器（杯蓋５点・杯身６点・瑞１点・短頸壺２点・横瓶３点・大甕１点），鉄器（刀子１点・摘鎌１点）がある。ほかに土師器があるが，細片のため図示していない。なお，個々の寸法や特徴は，第２表の出土遺物観察表にまとめている。

須恵器（第22図，図版24・25）

杯蓋3-1・3-2と杯身3-6・3-7は埋葬施設から，杯蓋3-3・3-4は石室側壁の上面から，杯蓋3-5と杯身3-10・3-11は墳丘検出面や周溝などから，杯身3-8・3-9は周溝から出土した。杯蓋3-1の口径は13.7cm，器高は3.7cmである。やや平坦気味の天井部と口縁部の間には稜線が見られず，口縁



第22図　長畑山北第３号古墳　出土遺物実測図（１）（１：３）



第23図　長畑山北第３号古墳　出土遺物実測図（２）（１：２）

端部は丸みがある。ほかの杯蓋3-2～3-5は3-1よりやや大きく，口径は14.5～14.8cm，器高は4.6～4.9cmである。3-2と3-4は平坦気味の天井，3-3と3-5は丸みをもった天井に違いがあるが，稜線をもつものが多い。口縁端部は3-4がやや段をもつが，ほかは丸みをもつ。杯身は3-6がやや小さく，口径は12.7cm，受部径は14.7cm，器高は4.6cmである。立ち上がりは1.0cmで内傾しており，端部は丸くおさめている。受部は，やや外上方を向く。杯身3-7・3-9～3-11は，口径は12.7～13.4cm，受部径は15.0～15.6cm，器高は4.3～5.1cm，立ち上がりは0.8～1.2cmで内傾している。杯身3-8の口径は13.0cm，受部径は15.2cmであるが，器高は3.9cmと低く，内傾する立ち上がりは1.5cmとやや長い。これらの特徴から，概ねTK209型式の併行期に相当すると考えられるが，3-8のようにやや時期差を感じられるものもある。

甕3-12は，周溝や埋葬施設などから出土した。口縁部を欠いているが，ほかはよく残る。頸部内外面の調整は回転ナデ，体部外面の調整はナデである。

短頸壺3-13は周溝や墳丘検出面から，3-14は周溝から出土した。3-13の復元口径は9.0cm，体部径は15.2cm，残存高は9.0cmである。底部はやや丸みがあり，体部上位の張りが強い。体部から折れ曲がって口縁部となり，やや外反して短く延びる口縁端部は丸みがある。調整は，底部から体部下位の外面は回転ヘラ削りで内面はナデであり，ほかの内外面は回転ナデである。3-14は生焼けの状態で底部や体部の一部が残り，3-13と似た形態である。

横瓶3-15～3-17は，墳丘検出面や周溝などから出土した。何れも体部が部分的に残るのみで反転復元もできず，第22図では上半分に内面の調整を，下半分に外面の調整を示してしる。3-15は内面に指頭圧痕の痕跡が残り，外面にはカキ目を施している。3-16は口頸部の接合痕と側面に貼り付け痕が残る。3-16と3-17はともに外面にカキ目を施しよく似た形態であるが，接合関係などから別個体と思われる。

大甕3-18は墳丘検出面や周溝から出土し，同一個体と思われる破片が埋葬施設から出土している。生焼けの状態で，口縁部から胴部上半にかけての一部のみ残り，復元口径24.4cm，復元頸部径20.6cmである。頸部の下位には沈線が巡るが，回転ナデによって生じた可能性もある。その下に不明瞭であるが，やや斜め方向のタタキ痕が残る。胴部内面の調整はナデ，ほかの内外面の調整は回転ナデである。口縁部は肥厚し，端部は丸みを帯びている。

鉄器（第23図，図版25）

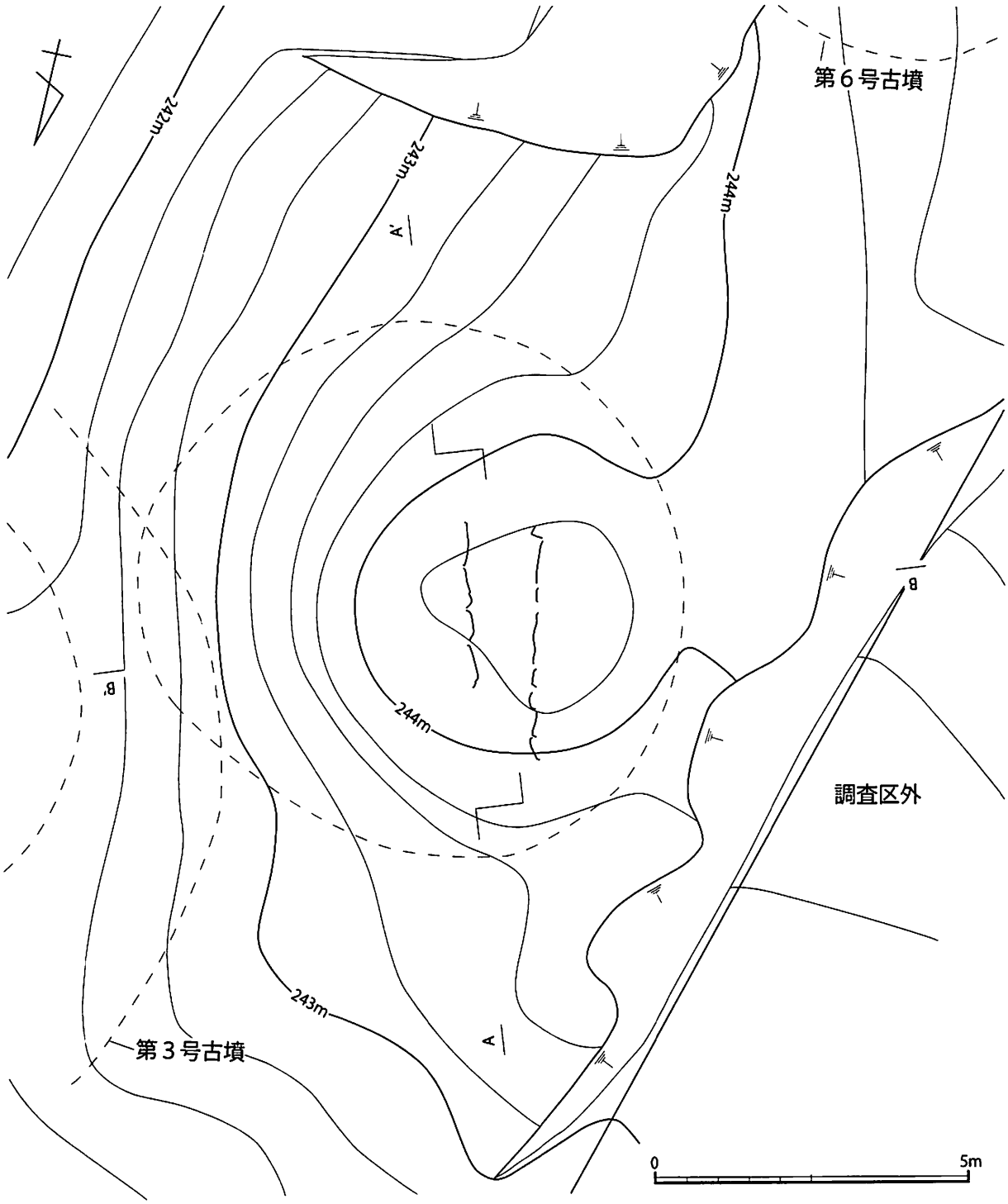
刀子3-19は埋葬施設から出土した。刃部と茎部の一部のみ残る。

摘鎌3-20も埋葬施設から出土した。刃先の一部と片方の折り返しの一部を欠損しているが，ほかはよく残り，全長は8.5cm，高さ2.5cm，厚さ0.4cmである。

4　長畑山北第４号古墳

（１）立地と調査前の状況（第24図，図版12）

南から北に延びる丘陵の先端部付近に立地しており，西から東方向に下る緩やかな斜面上にある。ただし，墳丘の中央あたりが斜度の変換点に重なっているため，墳丘西半は平坦気味な地面の上に築造されている。丘陵に沿って並ぶ古墳群の中でほぼ中央に位置し，中心的な存在である。



第24図　長畑山北第４号古墳　調査前地形測量図（１：100）

標高は墳頂部で244.3mであり，最も低い場所にある第２号古墳より3.7m高く，最も高い場所にある第５号古墳より1.9m低い。

調査前の観察では，墳丘には大きく削平を受けた痕跡はなかったが，墳丘裾から西側の平坦面が重機によって削平されており，何らかの影響を受けていることが予想された。また，墳頂部には埋葬施設の一部と思われる石材が露出しており，多くの盛土が流失していると考えられた。ただし，墳丘の高まりは比較的はっきりとして墳裾も把握しやすい状況であり，東側の墳裾は一部がやや張り出しているが，全体的には円形に近い平面形であると考えられた。なお，その後の調査で重複関係はないことが分かったが，東側の墳裾が第３号古墳の周溝と重なっているように観察できた。

試掘調査により，背面である西側に周溝が存在することを確認していたが，地表面の観察では周溝がどこまで廻るのか把握することはできなかった。

埋葬施設は完全に土で埋まっていることもあって，当初から北に開口する横穴式石室と推測することは難しい状況であった。両側壁の石材が露出し，閉塞石の一部が小口の石材のように露出していた。また，事前の試掘調査の結果と合わせ，埋葬施設は竪穴式石室または箱式石棺と考えて調査を開始した。

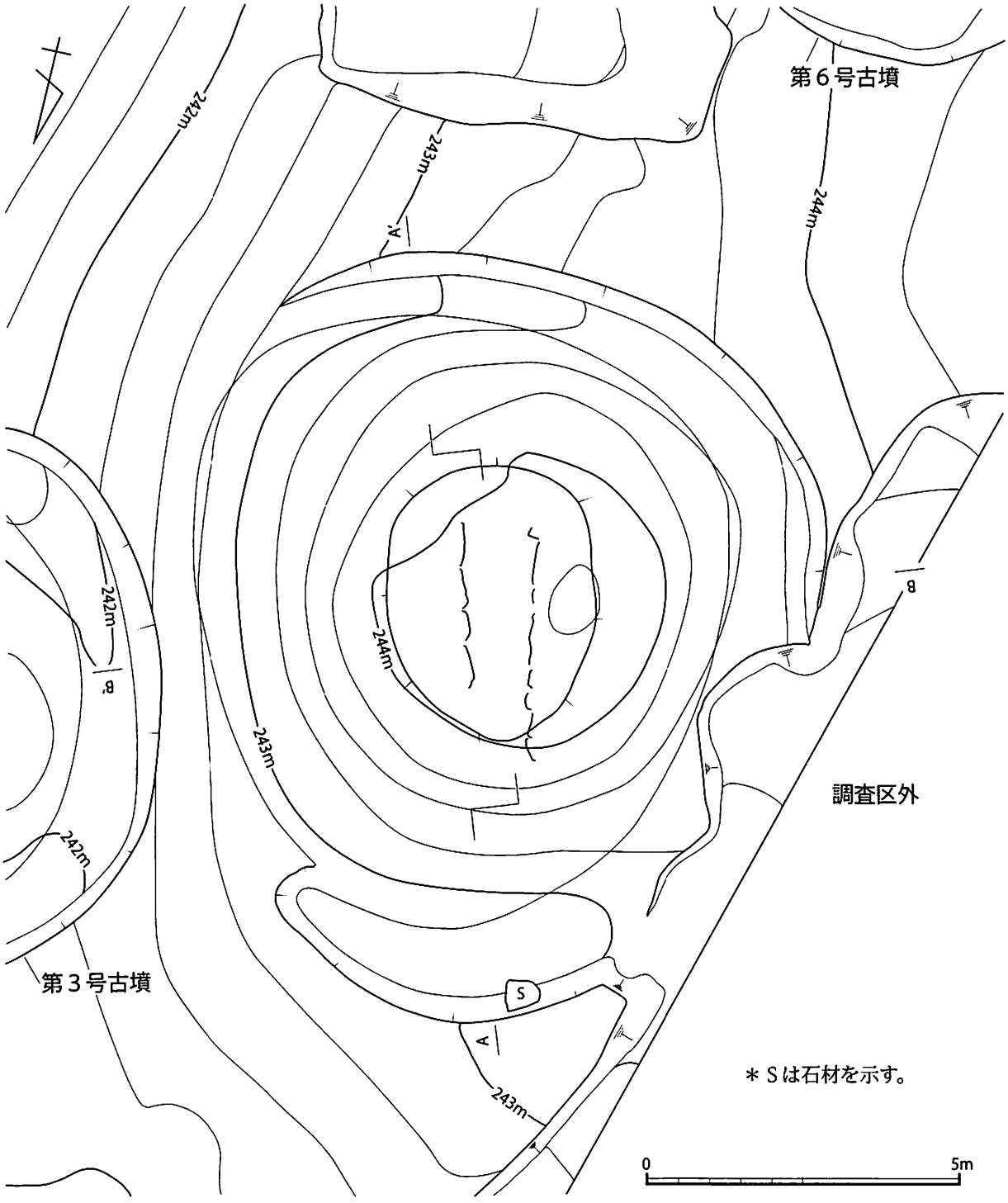
（２）墳丘・周溝（第25・26図，図版12・13）

墳丘は，直径8.4～9.8mで，北と南東と南西の３方向にやや張り出すが，円形に近い平面形である。墳丘の中央に東西3.3m×南北4.4mの楕円形の平坦面があるが，この平坦面の西寄りに最高位地点がある。上から見れば平坦面の内側に石室がほぼ収まっており，平坦面の長軸と石室の中心軸は概ね重なっている。平坦面から第３号古墳に向けて下っていく墳丘東側の斜面は，ほかの墳丘西側，南側，北側と比べるとやや急な傾斜である。墳丘の高さは，斜面下側である東側の墳裾から1.5m，斜面上側である西側の墳裾から0.7m，南側の墳裾から1.3m，開口部にあたる北側の墳裾から1.4mである。斜面下側は地山を僅かに削って裾部を造っており，列石や葺石などを施した痕跡はなかった。

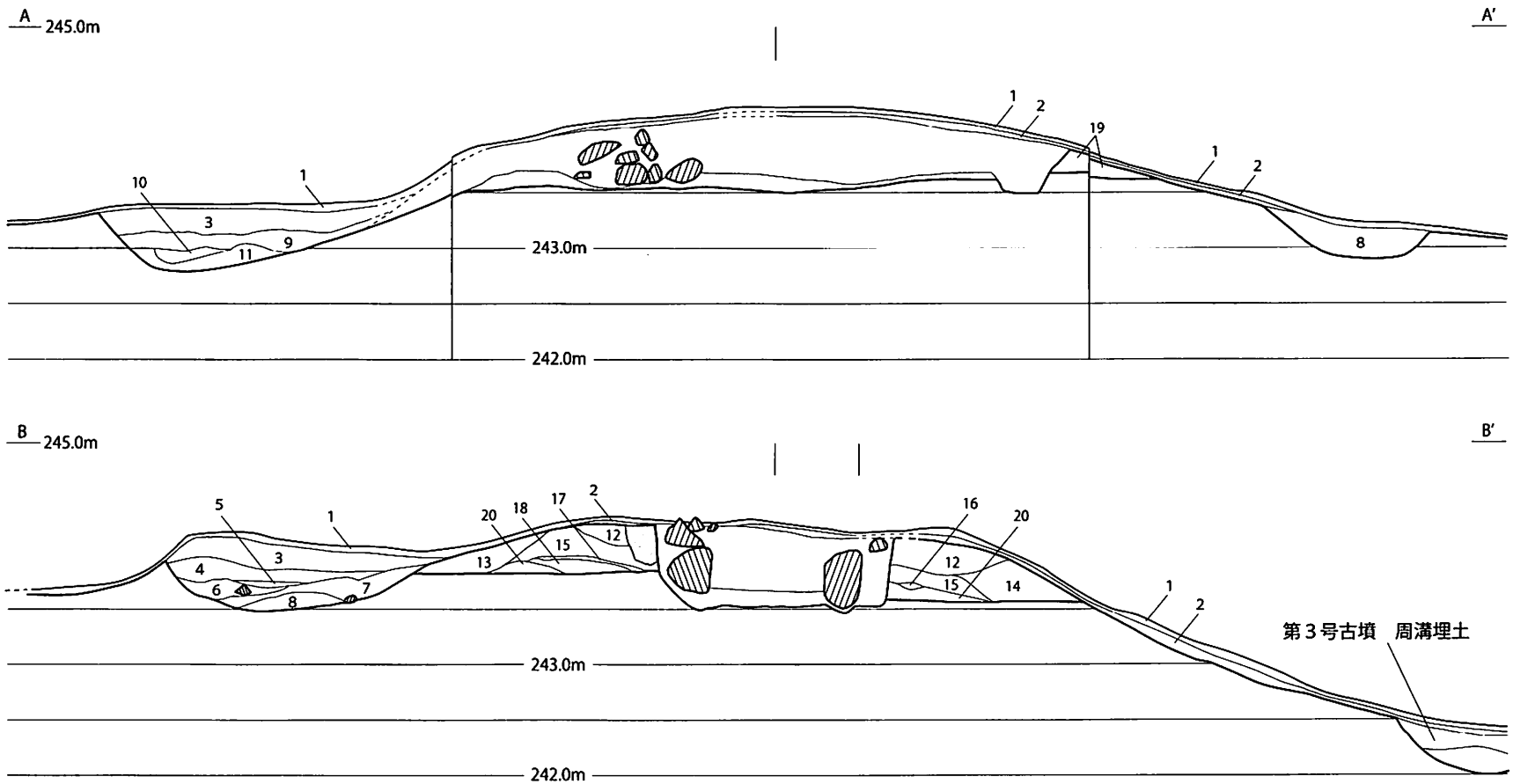
周溝は北西側の一部が削平を受けているため全容は明らかでないが，幅1.5～2.3m，深さ0.5mの規模であり，斜面上側を中心に墳丘の２／３程度廻っている。周溝南側の端は斜面に沿って自然消滅しているが，北側の端は掘り下げた段が残ったまま収束している。そのため，雨天の日などは，北側の周溝内に水がやや溜まってしまう状況であった。ほかの古墳の状況も含め，ここだけ周溝が突然に途切れている要因として墓道などに関係していることも考えられたが，その痕跡は確認できなかった。また，北側の周溝には0.5m大の平らな石材が出土しているが，埋葬施設の石材が転落したものと考えられる。

盛土の現状での厚さは，斜面下側の墳丘東側で0.55m，斜面上側の墳丘西側で0.45mである。主には灰黄褐色土や褐色土であり，下層には黒褐色土，にぶい黄褐色土，にぶい黄橙色土，灰褐色土なども見られる。

盛土の手順としては，墳丘の中央に，黒褐色土，灰褐色土，にぶい黄橙色土，灰黄褐色土などをそれぞれ0.05～0.15mの厚さで盛り，これらの上や墳丘外周に褐色土や灰黄褐色土などを0.15～0.35mの厚さで土手状になるように意識して盛っている。この内側には黄橙色粘土が混入した灰黄褐色土を入れ，その後に石室の掘方が掘られている。盛土には小礫を含むものも多いが，これは地山である黄褐色土層に含まれる礫と同じものが，細かくなったものと思われる。



第25図　長畑山北第４号古墳　墳丘測量図（１：100）



1．表土
2．褐色土
3．褐色土(1.0～2.0cm大の礫を多く含む。)
4．褐色土(1.0cm大の礫を僅かに含む。)
5．黄褐色土(1.0cm大の礫を多く含む。)
6．褐色土
7．にぶい黄褐色土
8．暗褐色土
9．黄褐色土
10．黄褐色土(1.0～1.5cm大の礫を多く含む。)
11．黄褐色土(0.5～1.0cm大の礫を僅かに含む。)

0　5m

は撹乱を示す。

墳丘土層
12．灰黄褐色土に黄橙色粘土の混入土
13．灰黄褐色土
14．褐色土
15．灰黄褐色土(0.5～1.0cm大の礫を多く含む。)
16．灰褐色土
17．灰黄褐色土(1.0cm大の礫を含む。)
18．にぶい黄橙色土(0.5～1.0cm大の礫を多く含む。)
19．にぶい黄橙色土(0.5～1.0cm大の礫を僅かに含む。)
20．黒褐色土(灰褐色土を少し含む。)

第26図　長畑山北第４号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）

（３）埋葬施設（第27・28図，図版15・16）

埋葬施設は，無袖式の横穴式石室１基であり，墳丘の中央で南北方向（N-13°-W）に構築され，北に開口している。長さは，残存する基底石で測って東側壁で2.78m，西側壁で3.73m，幅は，石室奥壁部で1.21m，石室中央で0.98m，石室入口で閉塞石から推定し0.90mである。高さは，天井石が残っていないため不明であるが，最も高い石室中央の西側壁で0.75mである。やや小型の丸みを持った石材が多く使われ，ほとんどが花崗岩である。閉塞石に接して石室内の床面には軋み石，西側壁には玄室と羨道の区画を意識した立石が見られる。石室内からは須恵器，土師器，鉄器，耳環，玉類，砥石が出土した。

①　天井石

天井石は１枚も残っておらず，墳丘や周溝はもちろん，ほかの古墳の調査区内でも，それらしき石材は確認されなかった。

②　側壁

東側壁は，基底石に高さ0.50～0.60m，幅0.52～0.75m，奥行き0.31～0.39mの大きめの石材を横長に用いている。確認できる基底石は４点であり，羨道付近の基底石は残っていない。掘方の様子から，残存する基底石よりやや小さめの石材を羨道付近に用いていたと推測される。基底石の上には高さ0.15～0.22m，幅0.30～0.36m，奥行き0.34～0.50mの石材を小口積みし，隅間を埋めるように小さな石材が使われている。東側壁に接して柱状の小さな立石が２点あり，長さ0.27mと0.29mである。この立石は，奥壁の推定位置から1.80mの場所にあり，西側壁の立石より0.38mほど奥壁側に寄っている。

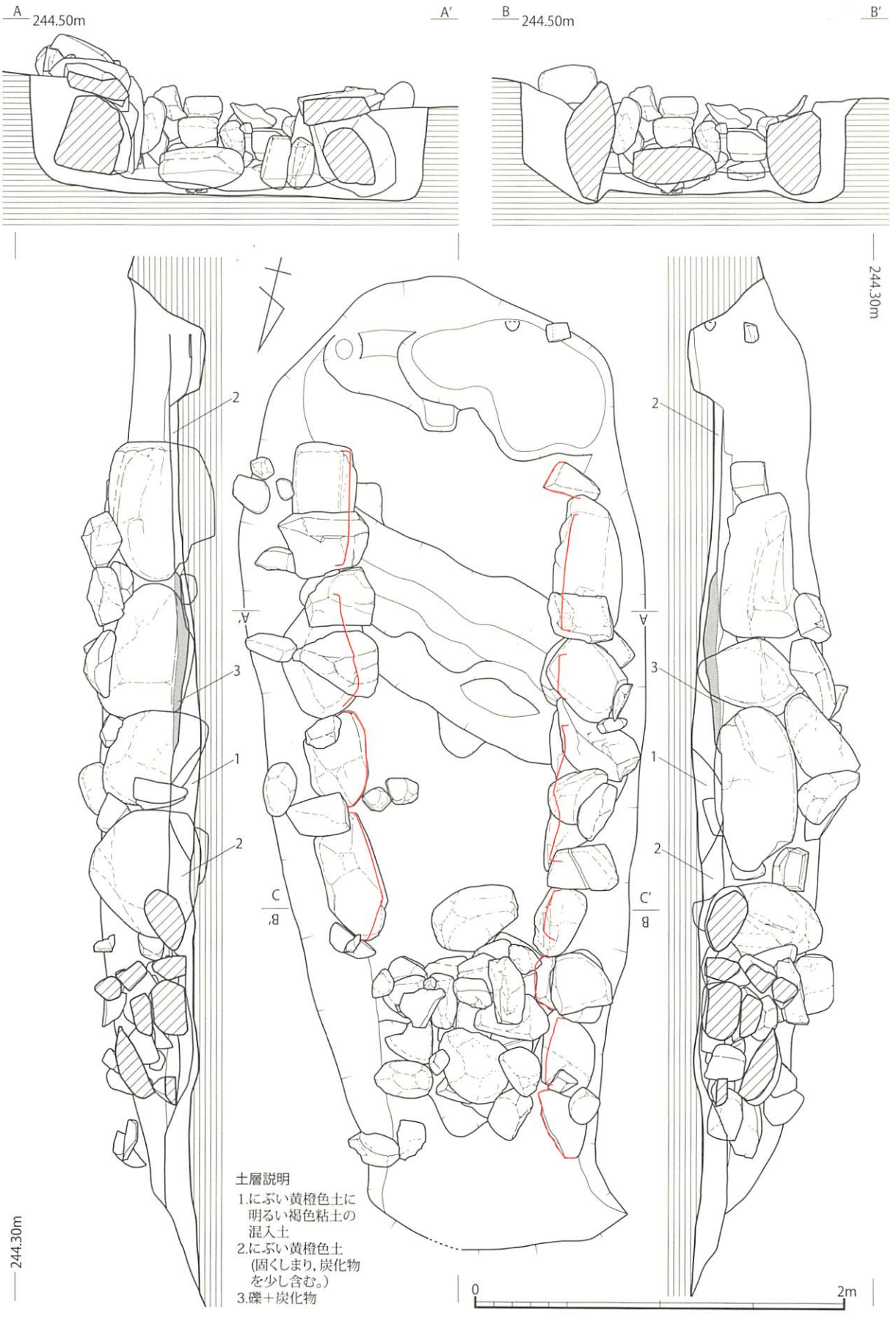
西側壁には，高さ0.70m，幅0.40m，奥行き0.24mの立石が見られる。玄室の基底石は，高さ0.44m，幅0.78m，奥行き0.37mと，高さ0.45m，幅0.88m，奥行き0.44mの大きめの石材を横長に用い，この間に高さ0.58m，幅0.42m，奥行き0.37mの石材を立てて使っている。また，高さ0.18m，幅0.16m，奥行き0.28mの細長の石材を小口が見えるように使って，奥壁との隙間を埋めている。基底石の上には高さ0.16～0.28m，幅0.25～0.35m，奥行き0.35～0.55mの石材を，小口積みや横積みにている。羨道の基底石は，やや小さめの高さ0.18～0.31m，幅0.35～0.47m，奥行き0.23～0.29mの石材３点を横長に用い，この上に高さ0.22～0.23m，幅0.22～0.36m，奥行き0.17～0.33mの石材を小口積みや横積みし，隅間を埋めるように小さな石材が使われている。

③　奥壁

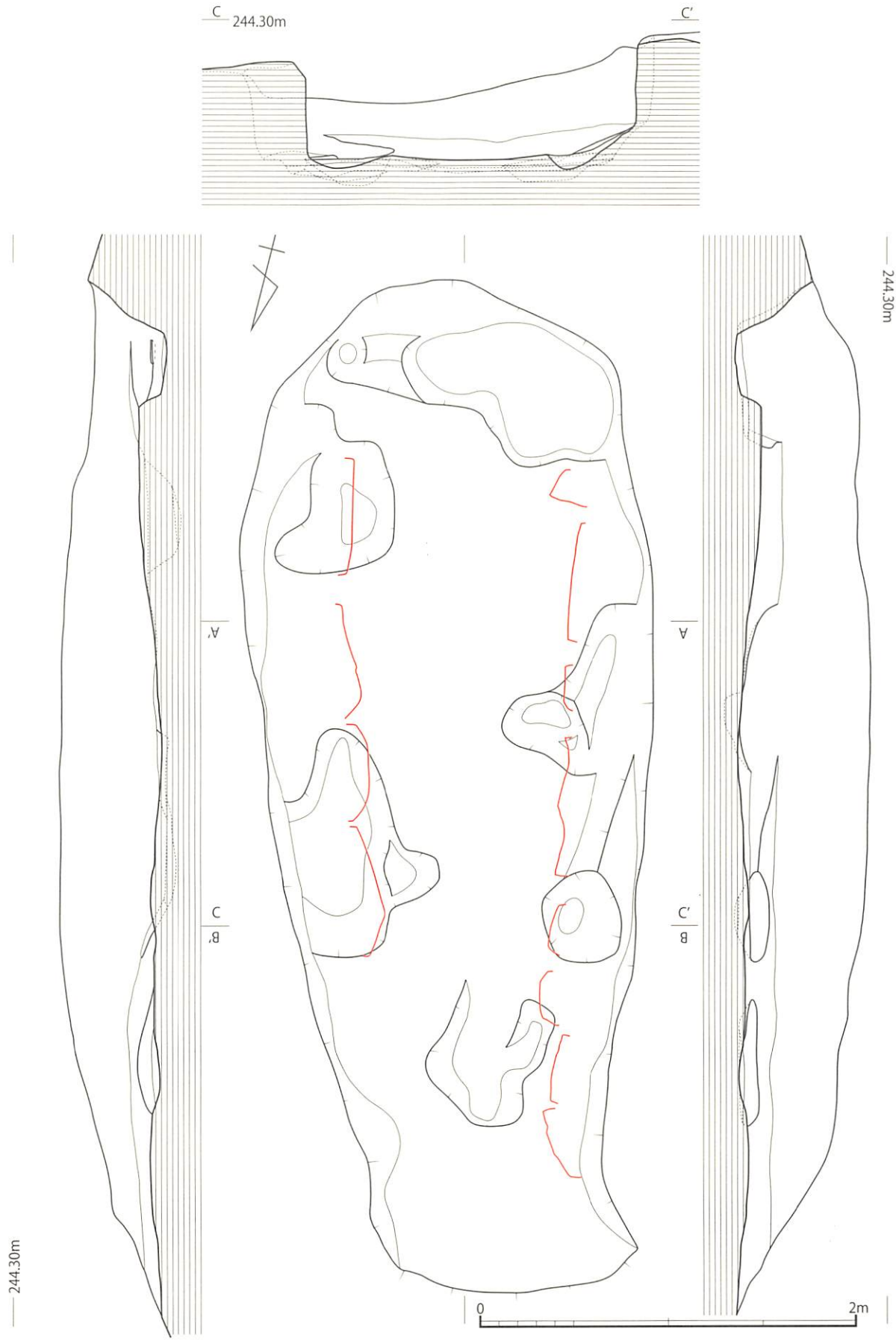
奥壁に用いられた石材は残っていない。床面などの状態から，基底石には大きめの石材１点を横長に用い，あまり深く掘って埋めなかったと考えられる。

④　閉塞石

0.15～0.45m大の石材が約20点使われている。比較的丸みのある石材が多いが，平らな石材や細長の石材も含まれている。石のかたまりとしての規模は，開口部から奥壁を見て，高さ0.59m，幅0.96m，奥行き1.08mである。



第27図　長畑山北第４号古墳　横穴式石室実測図（１）（１：30）



第28図　長畑山北第４号古墳　横穴式石室実測図（２）（１：30）

⑤　床面

奥壁の基底石があったと推測される場所から0.3～0.7mまでの範囲には，床面の表面に薄く広がる炭化物が見られる。また，炭化物が見られる範囲の開口部側には炭化物や細礫が混じる範囲が続いているが，表面だけのものでなく，両側壁に向かって伸びる幅0.75～0.90m，深さ0.15mの浅い溝状の落ち込みに入れられたものである。炭化物や礫が見られる範囲も含め，床面は全体的に平坦である。

西側壁に納まる立石近くの床面には，高さ0.22m，幅0.47m，奥行き0.34mの軋み石がある。やや丸みを持った幅広の石材であり，床面から下に半分ほど埋められている。石材の下から土器片が出土しているため追葬に伴うものと思われるが，床面は１面しか確認できなかった。

⑥　掘方

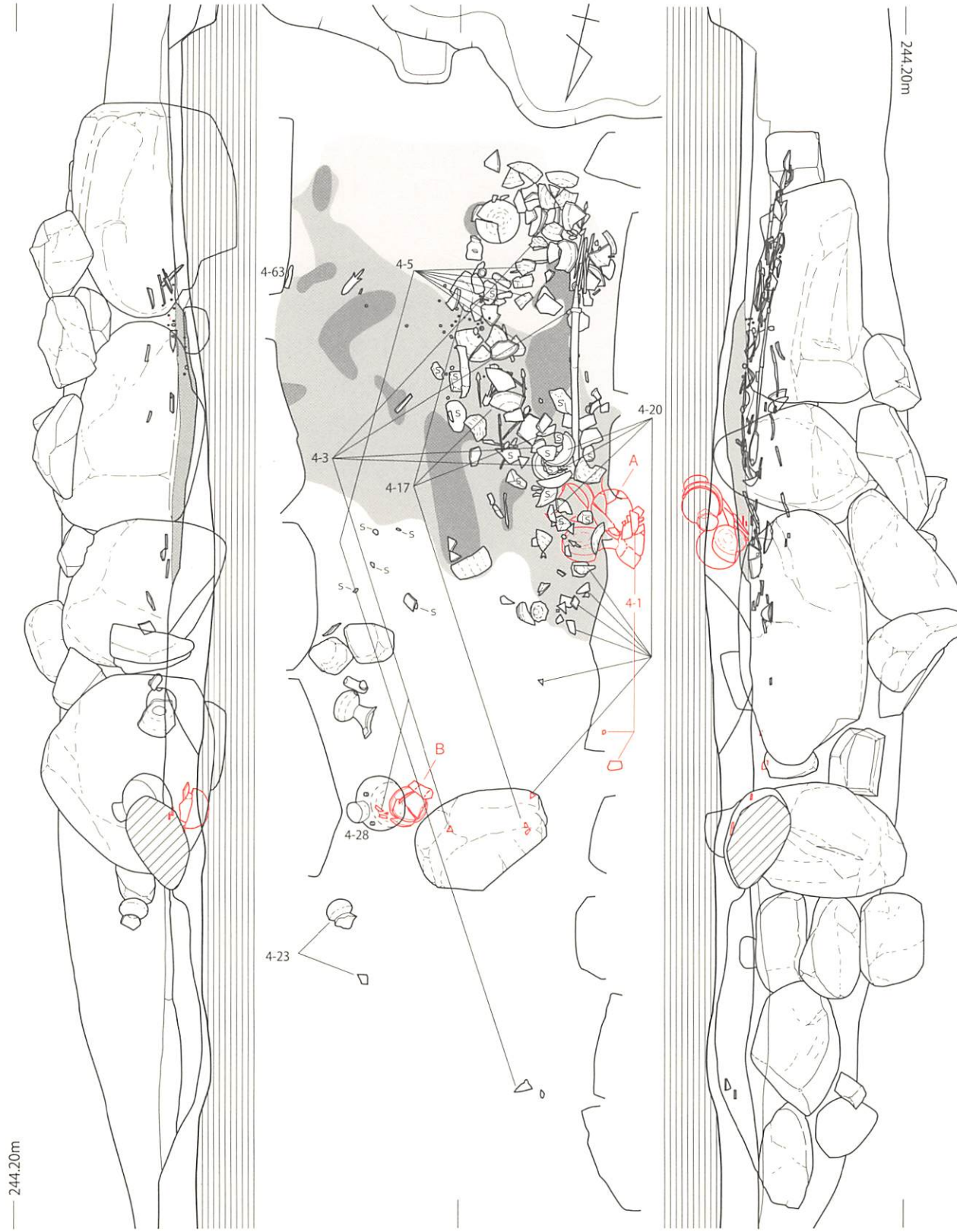
石材を組める最小限の大きさで掘っているため，東側や西側の斜面は垂直に近い。また，盛土だけでなく地山の黄褐色土層まで掘り込んで底は比較的平坦であるが，基底石に合わせて部分的に深く掘っているため，壁面沿いはやや凹凸感がある。奥壁側である南端には床面より0.2m深くなっている場所があるが，これは奥壁の石材を抜き取る際に掘られたものと考えられる。現在の規模は，長さ5.3m，幅2.2m，深さ0.8m程度であるが，南側は攪乱を受けているため本来はこれより短かったと思われる。

（４）遺物出土状況（第29・30図，図版14・15）

石室の床面上からは，須恵器（杯蓋・杯身・高杯・瑞・提瓶），鉄器（鉄鏃・刀子・剣・鎌・鉄斧・鉄鐸），耳環，玉類（丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉），砥石が出土した。ほとんどが玄室の中でも奥壁から1.7mまでの範囲に広がる炭化物や礫の上にあり，奥壁から開口部を見て左側の石室西半に片寄っている。また，玄室の床面下（第29図に示したＡ地点）から須恵器（杯身・杯蓋），土師器（高杯）が，玄室と羨道の境付近の床面下（第29図に示したＢ地点）から須恵器（短頸壺），土師器（椀）がまとまって出土し，築造の際に何らかの祭祀が行われた可能性がある。これらの遺物とは時期が大きく異なる須恵器の平底壺が石室上層から出土し，炭化物も検出されたことから，石室が再利用されたと考えられる。なお，石室内から出土した土器は大きく割れた状態のものが多いが，ほぼ全ての土器片の接合関係を確認することができ，完形品またはそれに近いものとなった。

石室外からの出土遺物は少なく，墳丘検出面から須恵器（杯身），周溝から須恵器（杯身），周溝より外側から須恵器（杯蓋・短頸壺）などの破片数点である。ほかに，第１～３号古墳の周溝などから出土した遺物が第４号古墳に関係する可能性はある。

須恵器杯蓋4-1・4-2は玄室の床面下で，杯身4-10～4-12や土師器の高杯4-31～４-33とともに掘方底に掘られた小穴からまとまって出土した。杯蓋はともに口縁が下を向く状態，杯身はそれぞれ口縁が上・下・横を向く状態，高杯は何れも横に倒された状態であり，規則的に並べられたものでなく複雑に重なり合っていた。最も上にある杯蓋4-1が比較的細かな破片となって杯身4-11の



＊　　は表面に炭化物を含む範囲，　　は炭化物と礫を含む範囲，
　　は炭化物を多く含む範囲を示す。
＊Sは床面出土の小石を示し，断面見透し図に図示していない。

第29図　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況実測図（１）（１：20）

上下や北に離れた基底石の下から出土し，その下の杯身4-12は割れた破片が動いた状態で出土するため，まとめて埋めた時点で既にある程度は割れていたと推測される。杯蓋4-3は破片が炭化物や礫の範囲に広く広がり，一部が軋み石の下で見つかった。杯蓋4-4は奥壁前で出土しており，破片は狭い範囲にまとまっている。その北で杯蓋4-5が出土しているが，一部は羨道で見つかった。杯蓋4-6は奥壁前の西側壁沿いで出土し，一部は玄室中央で見つかった。杯蓋4-7は奥壁前で出土し，破片同士がやや離れている。杯蓋4-8・4-9は，周溝より外側の北の地点で表採された。

杯身4-10～4-12は前述のように玄室の床面下から出土した。杯身4-13は，破片が炭化物や礫の範囲に広く広がっている。杯身4-14は奥壁前から口縁が下を向く状態で出土し，割れてはいるが原形を留める数少ない土器である。杯身4-15は炭化物や礫の範囲の中央から出土した。炭化物や礫の範囲の中央とは，玄室中央のやや奥壁寄りにあたる。杯身4-16は，奥壁前の西側壁寄りから出土した。杯身4-17は炭化物や礫の範囲の中央から出土したが，一部は軋み石の下で見つかった。杯身4-18は墳頂部の墳丘検出面から，杯身4-19は西側の周溝上層から出土した。

高杯4-20～4-22は玄室の炭化物や礫の上から出土しているが，その中でも開口部寄りに破片が集まっている。

甕4-23は玄室と羨道の境付近の東側壁沿いから，やや浮いた状態で出土した。甕4-24は東側壁に接する立石の北側で，側壁沿いの床面から出土した。

平底壺4-25は，奥壁付近で石室の上層から出土した。基底石の上面と同じ程度の高さで，口縁部が開口部の方向を向くようにやや傾いた状態である。

短頸壺4-26は，玄室と羨道の境付近の床面下から，土師器の椀4-30の中に入った状態で出土した。ともに口縁が上を向くように置かれているが，椀の口縁部は欠損し，その中の短頸壺は割れている。短頸壺4-27は，周溝より外側の北の地点で表採された。

提瓶4-28は，軋み石と東側壁の間の床面から，口縁が上を向くがやや倒れかけた状態で出土した。口縁部の一部に欠けがあるが，ほぼ完形品である。提瓶4-29は，破片が炭化物や礫の範囲の北端から南端まで広く広がっており，一部は東側壁に接する立石の近くでも出土している。剣や鉄鏃の集合体などほかの遺物の下になっている破片が多い。

土師器椀4-30は前述のように玄室と羨道の境付近の床面下から，高杯4-31～4-33も前述のように玄室の床面下から出土した。

鉄鏃は，ほとんどが土器と同じく炭化物や礫の上から出土した。鉄鏃4-34は奥壁前のやや石室中央寄りで出土し，その南には鉄鏃4-48が，東には鉄鏃4-59が出土している。奥壁前の西側壁沿いには鉄鏃4-46が，その北には鉄鏃4-41や鉄鏃の集合体4-55が剣と同じく南北方向を向いて揃えた状態で出土した。この近くには鉄鏃の一部と思われる4-51・4-52も見つかっている。反対側の東側壁沿いには鉄鏃の一部と思われる4-54や鉄鏃4-58が出土した。玄室中央のやや奥壁寄りでは鉄鏃4-35・4-38・4-40・4-44・4-56・4-57が無造作に置かれた状態で出土し，その西側壁沿いでは鉄鏃の一部と思われる4-53や鉄鏃4-60・4-62も見つかった。玄室中央では鉄鏃4-36・4-39・4-43・4-47が，やはり無造作に置かれた状態で出土した。玄室中央のやや開口部寄りでは鉄鏃4-37

第30図　長畑山北第４号古墳　遺物出土状況実測図（２）（１：10）

が出土し，その西側壁沿いでは鉄鏃4-42が出土した。このほかに，石室の南半から鉄鏃の一部と思われる4-49・4-50が，石室の北半から鉄鏃4-45・4-61が見つかっている。

刀子4-63は，奥壁前のやや石室中央寄りで東側壁沿いから出土し，一部は石室南側の上層から見つかった。刀子4-64・4-65は玄室中央のやや東側壁寄り，刀子4-66は玄室中央のやや開口部寄りで出土した。何れも炭化物や礫の上からである。

剣4-67は奥壁前から玄室中央にかけての西側壁沿いで，剣先が開口部を向いた状態で出土した。水平ではなく，剣先が炭化物や礫近くまでやや下がっている。

鎌4-68は玄室中央のやや奥壁寄りで炭化物や礫の上から，刃が西側壁を向き，先が開口部を向いた状態で出土した。

鉄斧4-69は東側壁に接する立石の北側で，側壁沿いの床面から出土した。

鉄鐸4-70は石室中央の床面近くで出土し，一部は東側壁の間から見つかった。

用途不明の鉄器4-71は奥壁前のやや石室中央寄りで，床面に広がる炭化物の上から出土した。

耳環4-72・4-73は奥壁前のやや石室中央寄りで，用途不明の鉄器と同じく炭化物の上から出土した。石室中心軸より西側壁寄りに耳環4-72があり，0.30m離れた西側壁沿いの剣の下に耳環4-73がある。

丸玉4-74は玄室中央のやや奥壁寄りで，炭化物や礫の上から出土した。ガラス小玉を中心とする玉類がまとまって出土した場所である。

切子玉4-75・4-78・4-80は玄室中央で，切子玉4-76・4-77・4-79・4-81は玄室中央のやや奥壁寄りで出土した。この中の切子玉4-76・4-77は，玉類の集中部から見つかっている。基本的には炭化物や礫の上からの出土であるが，杯身4-15の上から切子玉4-77が，下から切子玉4-79が出土し，鉄鏃4-43の上から切子玉4-78が出土するなど，ほかの土器や鉄器などと重なり合っている。

土玉4-82は玄室中央のやや奥壁寄りで，玉類の集中部から出土した。杯蓋4-5の破片の上から見つかっている。土玉4-83は，石室の中央付近からの出土である。

ガラス小玉4-84・4-85・4-87～4-107は第30図に図示しているように，玄室中央のやや奥壁寄りで集中的に出土している。細かく見れば，大振りのガラス小玉4-84・4-85・4-87がやや北に離れて，大振りに近いガラス小玉4-88・4-89がやや東に離れて出土している。そのほかの大振りのガラス小玉4-86とガラス小玉4-108～4-117も図示はしていないが，ほぼ同じ場所からの出土である。これらとは別のガラス小玉の細片を，４か所から取り上げた。床面となっている炭化物や礫の上からの出土が多いが，炭化物や礫の間からも出土している。比較的浅い場所からの出土であり，床面より上にあったものが，炭化物や礫の間に落ち込んだと思われる。また，土器片の上から出土しているものがあるが，ほかのガラス小玉と比べて極端に高い位置からの出土ではない。ガラス小玉4-92は杯身4-17の上から，ガラス小玉4-93は杯蓋4-7の上から，ガラス小玉4-106は杯身4-15の上から出土した。詳細な場所は確定しないが，ガラス小玉4-118～4-120は石室北側の床面から，ガラス小玉4-121は石室内から出土した。

砥石4-122は，奥壁前のやや石室中央寄りで，床面に薄く広がる炭化物の上から出土した。

（５）出土遺物について

出土遺物には，須恵器（杯蓋９点・杯身10点・高杯３点・瑞２点・平底壺１点・短頸壺２点・提瓶２点），土師器（椀１点・高杯３点），鉄器（鉄鏃33点・刀子４点・剣１点・鎌１点・鉄斧１点・鉄鐸１点・用途不明の鉄器１点），耳環２点，玉類（丸玉１点・切子玉７点・土玉２点・ガラス小玉38点），砥石１点がある。なお，個々の寸法や特徴は，第２表の出土遺物観察表にまとめている。

須恵器（第31・32図，図版26・27）

杯蓋4-1～4-7と杯身4-10～4-17は石室内から出土し，杯蓋4-8・4-9と杯身4-18・4-19は石室外から出土した。

石室内から出土した杯蓋と杯身は，それぞれ大きく２つの形態に分類することができる。床面下から出土した杯蓋4-1・4-2の２点と，床面上から出土した杯蓋4-3～4-7の５点，床面下から出土した杯身4-10～4-12の３点と，床面上から出土した杯身4-13～4-17の５点である。

杯蓋4-1と4-2は，丸みのある天井部と口縁部の間に明瞭な稜線が見られる。4-1の口径は14.9cm，器高は5.0cm，4-2の口径は15.7cm，器高は5.8cmと大きい。これに対して杯蓋4-3～4-7はやや小さく，口径は14.2～14.9cm，器高は4.4～4.9cmである。4-3は天井部と口縁部の間に凹線が巡り，ほかにも稜線が巡るものが多いが4-1や4-2ほど明瞭ではない。口縁端部は床面より下から出土したものと上から出土したものとで大きな違いはなく，段をもっているものが多い。4-2と4-4は口縁端部を丸くおさめているが，4-2は器壁がやや薄く4-4は器壁に厚みがある。なお，4-3の口縁端部には板状工具による面調整が外面の一部に見られる。

杯身4-10～4-12の立ち上がりは1.6～2.2cmであり，杯身4-13～4-17の立ち上がり0.7～1.2cmよりも高い。また，器高は4-10～4-12が5.4～6.1cmで，4-13～4-17の4.2～4.9cmより高く，口径や受部径も多少の違いがある。受部は何れも端部を丸くおさめているが，4-10～4-12が外上方に伸び，4-13～4-17は外上方もしくは外方向に伸びている。

これらの特徴から，床面下から出土した杯蓋や杯身は概ねＴＫ10型式の併行期に相当し，床面上から出土した杯蓋や杯身は概ねＴＫ43型式の併行期に相当すると考えられる。

高杯4-20～4-22は，石室内から出土した。何れも有蓋であり，口径は12.1～13.0cm，受部径は14.5～15.1cm，器高は7.3～9.5cm，脚部高は3.1～5.0cmの低脚である。また，立ち上がりは0.6～1.0cmで内傾し，受部は外上方に短く伸びて端部は丸みをもつ。杯部は，床面上から出土した杯身と似た形態である。また，何れの杯部も水平でなく傾いたり歪んだりしている。4-20の脚端部は地面に水平に接するが中央が窪み，4-21と4-22の脚端部は外傾する面をもつ。

瑞4-23・4-24は，石室内から出土した。瑞4-23の口径は11.4cm，体部最大径は11.2cm，器高は12.0cmである。孔に重なるように，ハケ状工具の木口を使ったと思われる刺突文と細かなカキ目が上下に巡っている。また，頸部には細かいハケ状工具による波状文が施され，口縁端部には沈線が巡る。瑞4-24の復元口径は14.2cm，体部最大径は10.6cm，器高は16.0cmである。細く締まる頸部から口縁部に向かって，外上方に大きく広がり口縁端部はやや窪んだ面をもつ。孔の上に２条，孔の下に１条，凹線状に巡っている。

平底壺4-25は，石室内の上層から出土した。口径は8.1cm，体部最大径は15.4cm，底径は10.5cm，器高は20.3cmである。頸部と体部の間はやや凸帯状になっており，底は若干凸凹している。

短頸壺4-26は，石室の床面下から出土した。復元口径は10.2cm，体部最大径は15.3cm，器高は13.4cmである。底部は丸みがあるもののやや尖り気味で，体部上位の張りがやや強い。頸部は「く」の字状に折れ曲がり，やや外反して延びる口縁端部は丸みがある。底部や体部下位にはタタキ痕が明瞭に見られるが，底部中央付近では薄くなっている。体部中位には細かく浅いカキ目を施している。短頸壺4-27は，石室外で表採された。口縁部と頸部の一部が残り，口縁端部にはU字状の沈線が巡る。

提瓶4-28・4-29は，石室内から出土した。提瓶4-28の口径は7.3cm，体部最大径は18.9cm，体部最大幅は12.4cm，器高は23.0cmである。体部側面の両肩には，円形浮文を貼り付けている。提瓶4-29はやや大きく，口径は8.3cm，体部最大径は20.9cm，体部最大幅は14.5cm，器高は23.7cmである。体部側面の両肩には，環状の把手を貼り付けた痕跡が残る。

土師器（第32図，図版25）

椀4-30は，石室内の床面下から出土した。口縁部を欠いており，体部最大径は13.0cm，残存器高は8.1cmである。底部や体部は，丸みをもつ。器壁が荒れているため内外面の調整は不明であるが，体部の外面には整形時の凹凸が残る。

高杯4-31～4-33は，石室内の床面下から出土した。口径は14.6～15.8cm，器高は12.4～13.5cmである。杯部は緩やかに内湾したのち最後はやや外反し，口縁端部は丸みをもつ。ただし，4-32のみ内側に段をもっている。脚部高は5.1～5.8cmと低脚であり，基部から脚端部まで丸みをもって広がっていく。

鉄器（第33・34図，図版28・29）

鉄鏃4-34～4-62は，全て石室内から出土した。4-34～4-46のように長頸鏃が多く，そのほとんどが鏃身部の外形は長三角形で断面は丸造または平造，頸部と茎部の断面形は方形である。不明瞭であるため断言できないが，鏃身関部は角関で一部がナデ関，関部は角関で一部が斜関と思われる。一部を欠くものが多いが全長がおよそ分かるものもあり，4-34は14.8cm，4-39は14.9cmである。なお，4-55は５点の鉄鏃がまとまって出土したものであり，出土状況を後世に伝えるため個別にせず集合体として扱っている。

数は少ないが，鏃身部の外形が長三角形で逆刺のある4-56・4-57，柳葉形で逆刺のある4-58，圭頭形の4-59などもある。これらの鏃身部の断面形は丸造であり，頸部や茎部の断面形は方形と思われる。4-57・4-58の関部は無関，4-59の鏃身関部は無関と思われるが，4-56の関部は斜関の可能性もある。

刀子4-63～4-65は，石室内から出土した。4-66はやや長めであるが刃部の先が欠損しており，全長が分かるものは4-63の14.7cmである。茎部には何れも木質が残り，棟区や刀区も見られる。なお，4-71は刀子の刃部片とも思えるが，扁平で両端にやや丸みをもつ断面形などから，用途不明の鉄器としている。

剣4-67は，石室内から出土した。ほぼ完形であり，全長は65.1cm，幅は3.3cm，厚さ0.7cmである。身部の断面形はレンズ状であり，先は尖っている。茎部には直径0.3cmほどの目釘穴があり，鎺も見られる。

鎌4-68は，石室内から出土した。ほぼ完形の曲刃鎌であり，全長は17.8cm，幅は3.6cm，厚さ0.6cmである。折り返しの様子から，直角よりやや鈍角に柄がついていたと思われる。

鉄斧4-69は，石室内から出土した。袋状鉄斧で，全長8.0cm，幅3.8cm，厚さ2.6cmである。刃部は丸みをもち，断面形は長方形である。

鉄鐸4-70は，石室内から出土した。中空の円錐形をしており，身部長3.6cm，開口部径1.6×1.4cmである。身の断面形は，頂部付近では円形であるが，開口部付近ではやや楕円形に近い。合わせ目は比較的はっきりと観察でき，扇形または台形に裁断した厚さ0.1cmの鉄板を捻るように丸めて閉じ合わせたと思われる。舌は遺存していないが，X線透過観察では鐸身の頂部に舌を吊るすための懸通孔がある。

用途不明の鉄器4-71は，石室内から出土した。刀子の可能性もあるが，前述のように断面形では両側に刃をもつようにみえる。

耳環（第35図，図版30）

耳環4-72・4-73は，石室内から出土した。4-72の外形は2.75×3.03cm，断面は0.59×0.61cm，重量は14.64ｇである。4-73の外形は2.76×3.05cm，断面は0.61×0.62cm，重量は15.18ｇである。何れも銅芯に銀を用いて鍍金したものであり，4-72の一部に緑青が見られる。

玉類（第35図，図版30）

丸玉4-74は，石室内から出土した。長さ8.7㎜，径9.7～10.3㎜，孔径1.8～2.7㎜である。孔は片側から穿たれ，翡翠にも似た碧玉が使用されている。

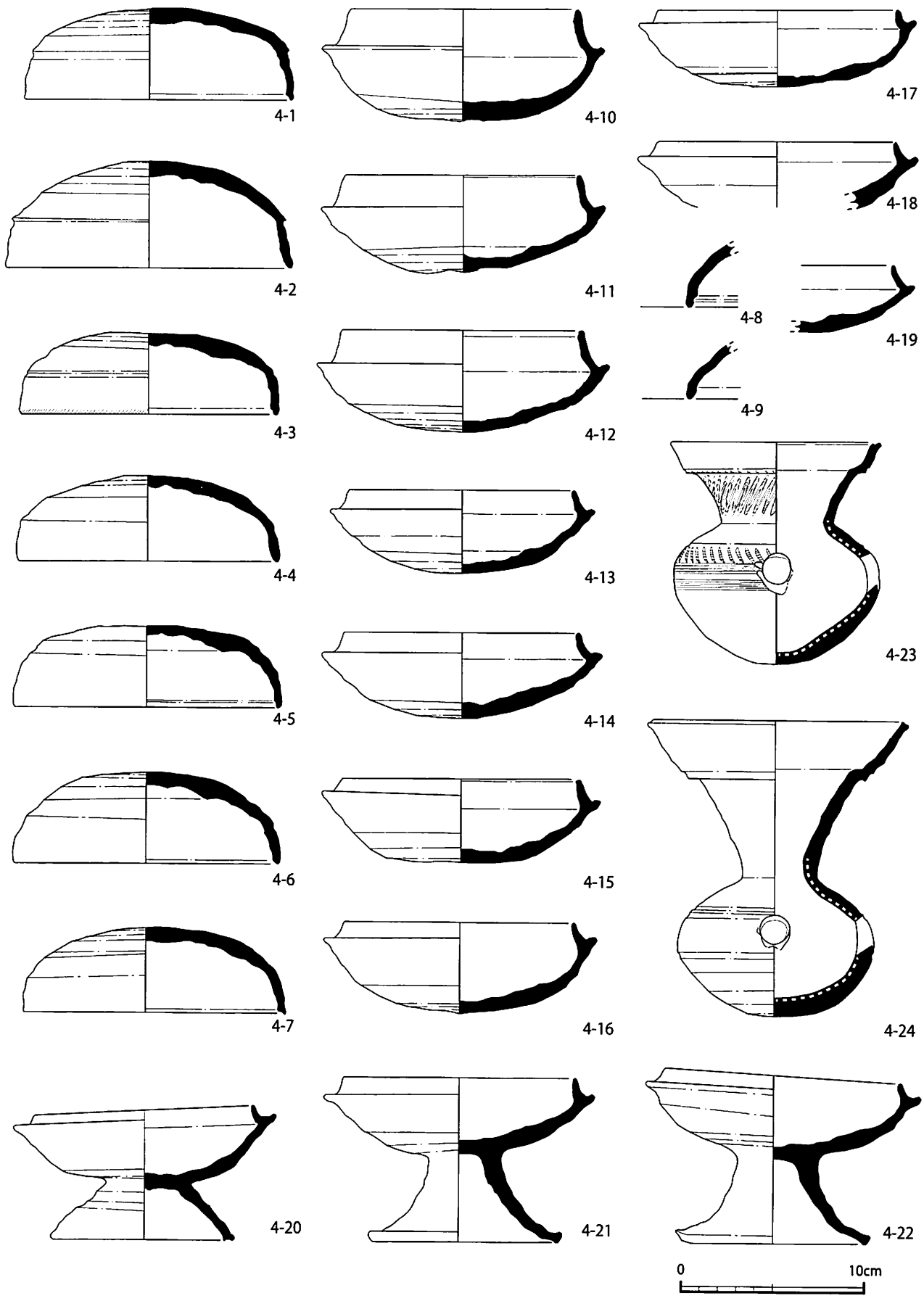
切子玉4-75～4-81は，石室内から出土した。石英が使用された全７点であるが，大きいものから小さいものまで様々である。最も大ききものは4-75の長さ30.8㎜，幅18.1㎜であり，小さいものは4-81の長さ11.0㎜，幅10.9㎜である。孔は何れも片側から穿たれ，初孔は3.0～4.1㎜，終孔は1.6～1.7㎜と，７点で大きな違いはない。

土玉4-82・4-83は，石室内から出土した。4-82は長さ7.1㎜，径6.7～7.1㎜，孔径1.3～1.4㎜で，4-83は長さ5.9㎜，径6.7～7.1㎜，孔径1.7～1.9㎜である。

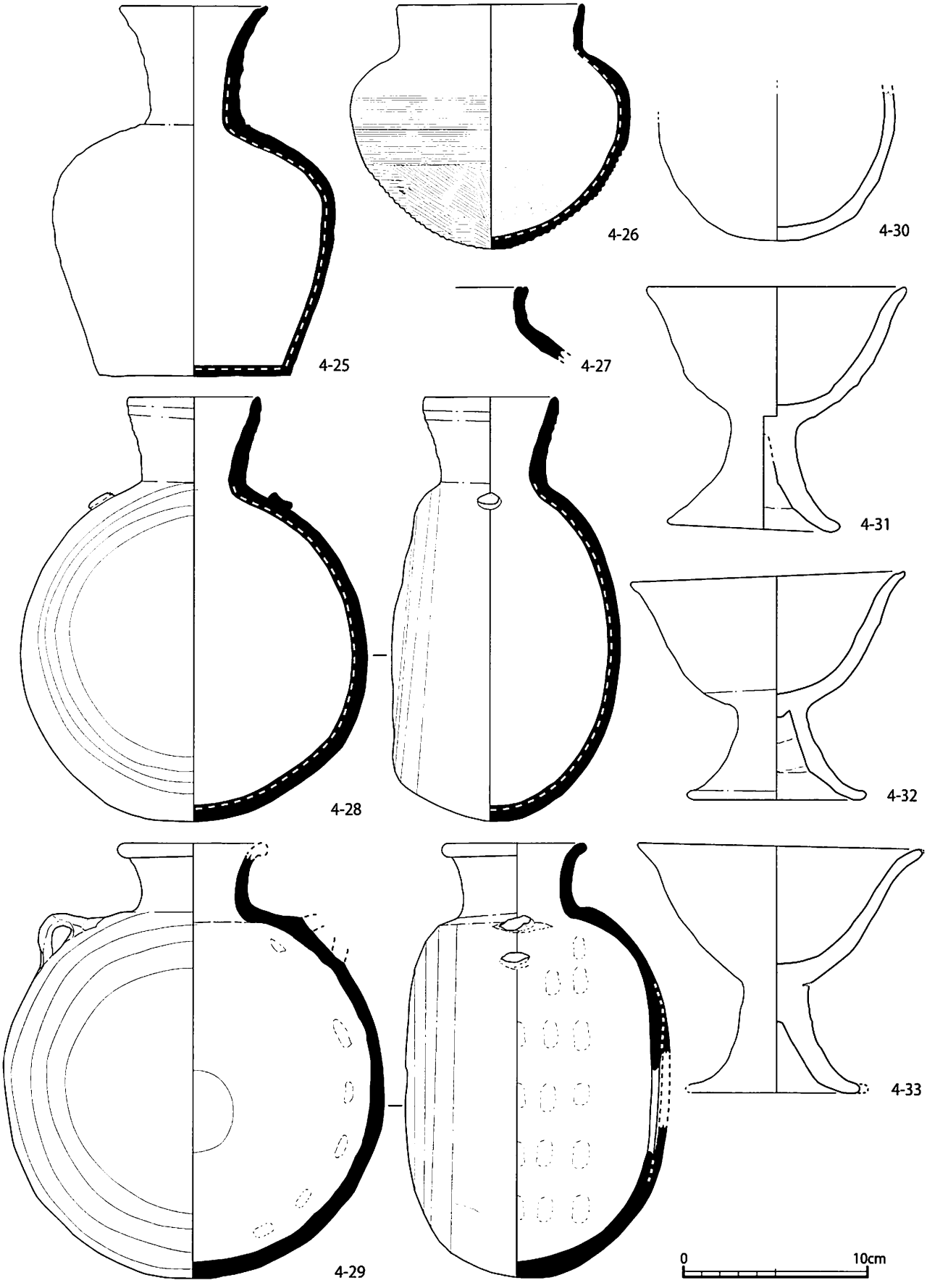
ガラス小玉4-84～4-121は，何れも石室内から出土した。図示できたのは38点であるが，細片となっているものが別に３～４点ほどある。4-84～4-86の３点は長さ3.6～5.7㎜，径7.3～8.6㎜と大きく，ほかは長さ1.5～4.1㎜，径3.0～4.9㎜である。青や緑系の色調のものが多いが，4-89・4-90・4-103・4-104・4-114～4-116の７点は黄色である。

砥石（第35図，図版30）

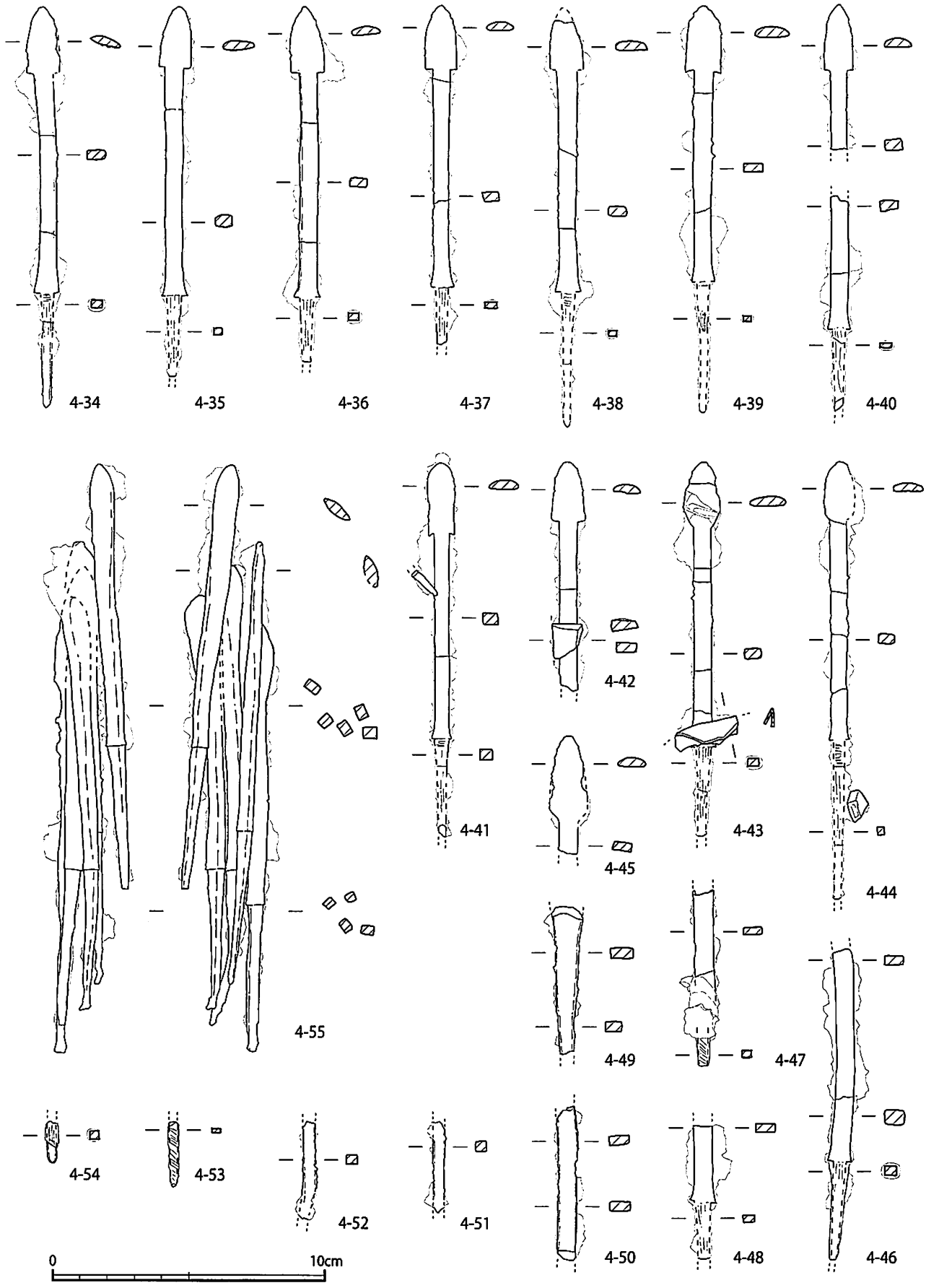
砥石4-122は，石室内から出土した。小型の薄い砥石であり，長さ7.4cm，幅2.8cm，厚さ0.5～0.9cmである。小口を上下にしてみた形は長方形であるが中央がやや膨らみ，横からみると円弧状にやや反り返る。石材は珪長岩であり，小口以外の４面は使用によって平滑である。



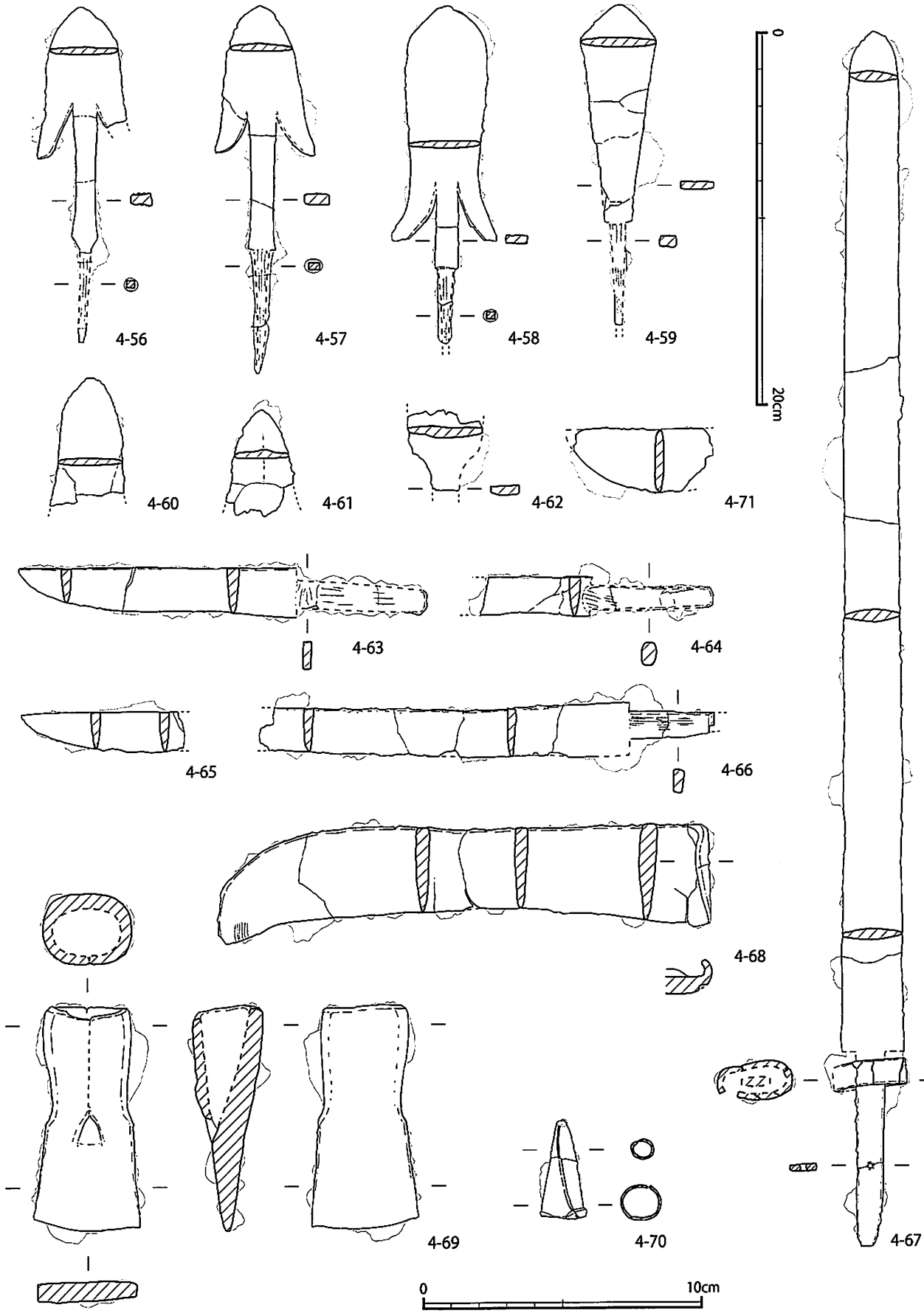
第31図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（１）（１：３）



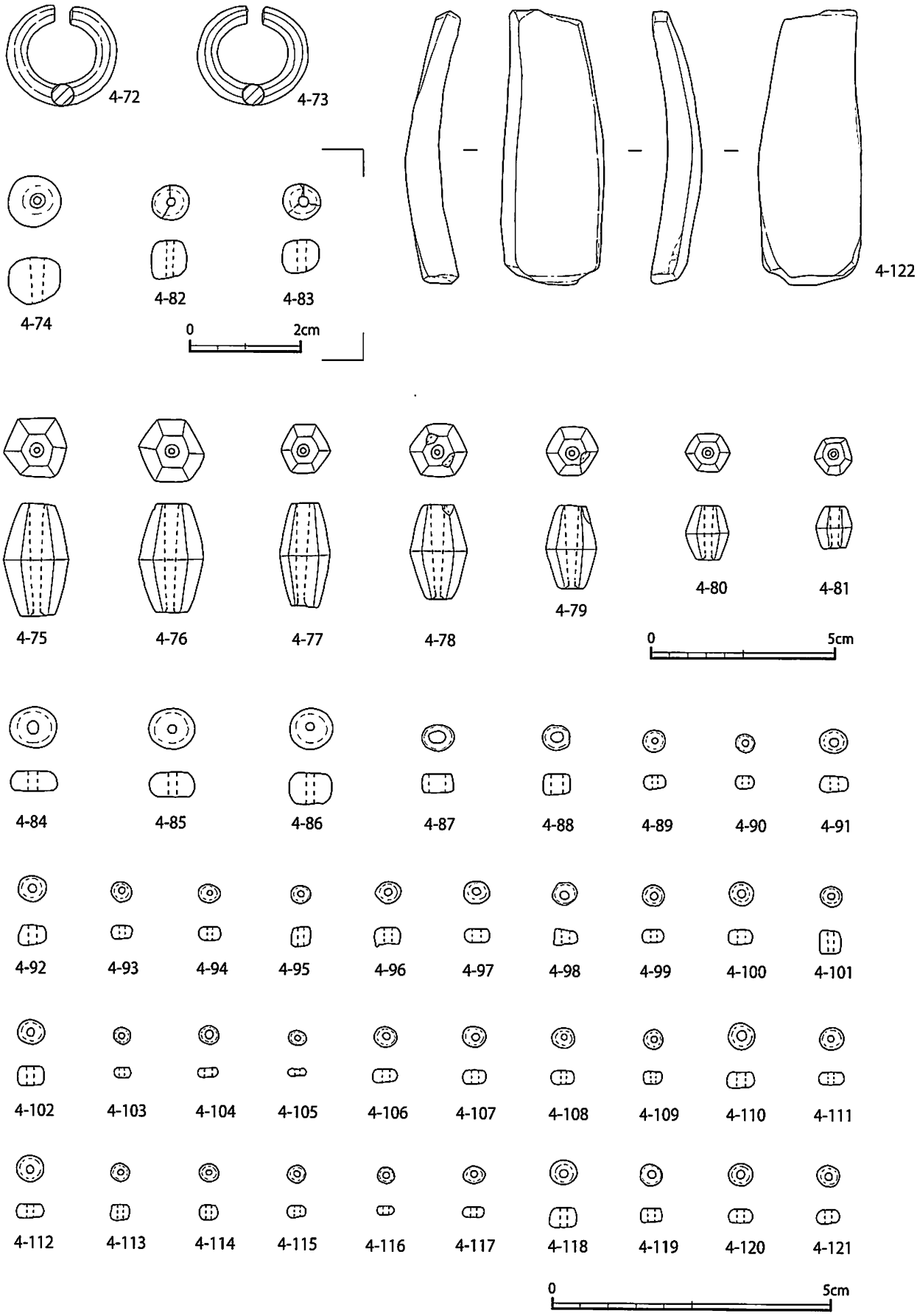
第32図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（２）（１：３）



第33図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（３）（１：２）



第34図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（４）（１：２，１：３）



第35図　長畑山北第４号古墳　出土遺物実測図（５）（１：１，２：３）

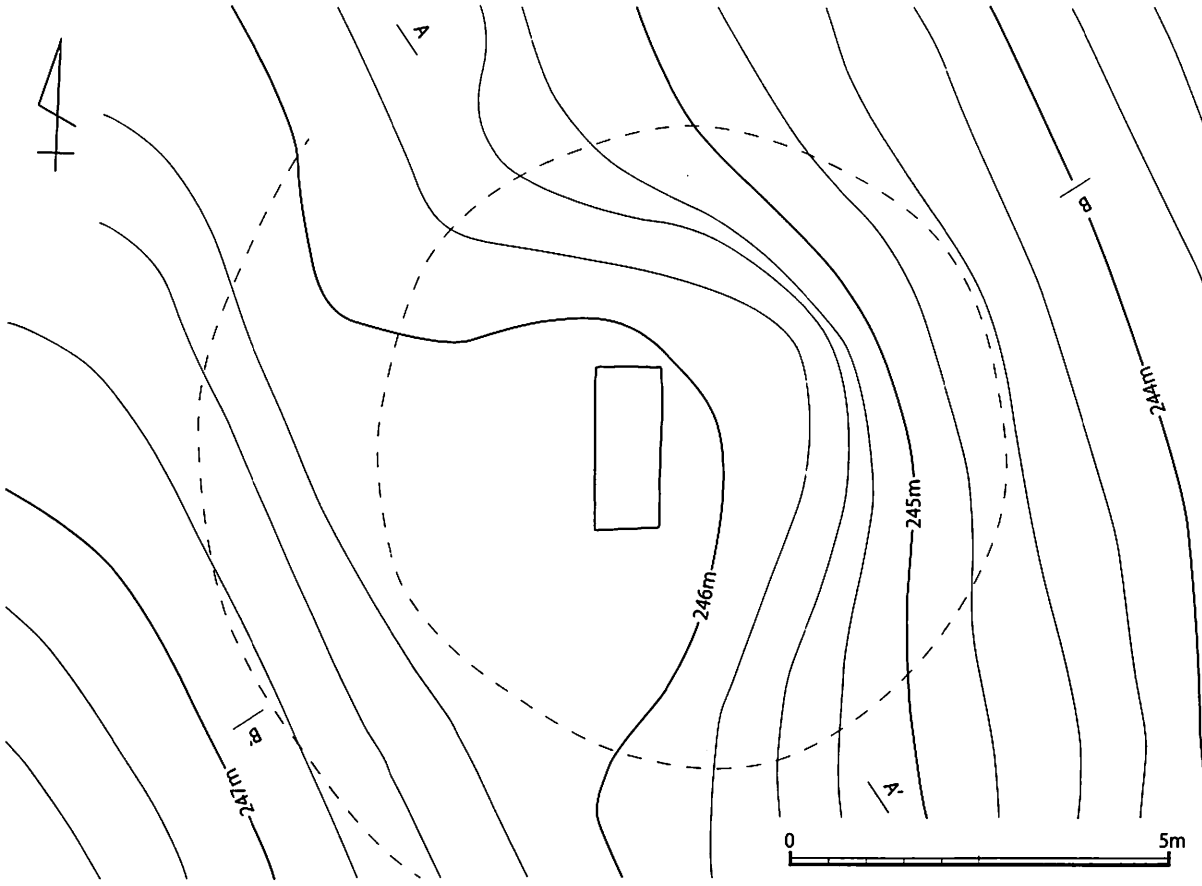
5　長畑山北第５号古墳

（１）立地と調査前の状況（第36図，図版17）

南から北に延びる丘陵の先端部付近に立地し，南西から北東方向に下る緩やかな斜面上にある。丘陵に沿って並ぶ古墳群の中では，最も南に位置している。これより南で同じ丘陵上に古墳は存在しないが，約600m南には同じ峯から派生する丘陵上に33基からなる海田原古墳群が，東隣の丘陵上には横穴式石室を埋葬施設に持つ長畑山古墳などが存在する。標高は墳頂部で246.2mと古墳群の中で最も高い場所にあり，北に36.0m離れて最も低い場所にある第２号古墳の240.6mとは5.6mの標高差がある。

調査前の観察では，削平や盗掘などを受けた痕跡はなかったが，墳丘の高まりはやや低く，盛土の多くが流失していることが予想された。また，背面である西側では周溝が１／３程度廻る様子が確認できたほか，墳裾は比較的はっきりとしており，平面形はきれいな円形であると把握することができた。

墳丘に石材の露出や散乱はなく，また事前の試掘調査の結果と合わせ，木棺を埋葬施設とする小規模な円墳であると考えられた。しかし，盛土の様子から，埋葬施設の遺存状況は悪いことが予想された。



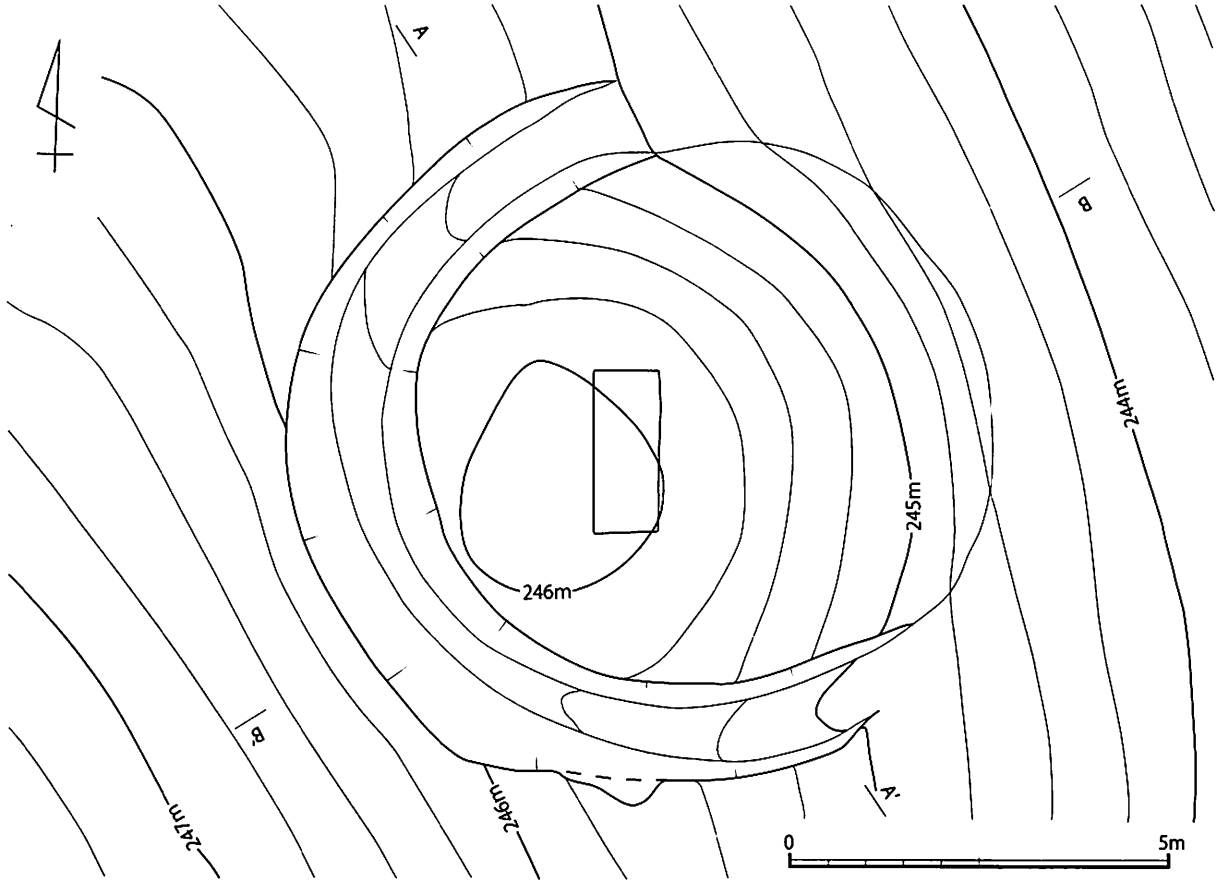
第36図　長畑山北第５号古墳　調査前地形測量図（１：100）

（２）墳丘・周溝（第37・38図，図版17・18）

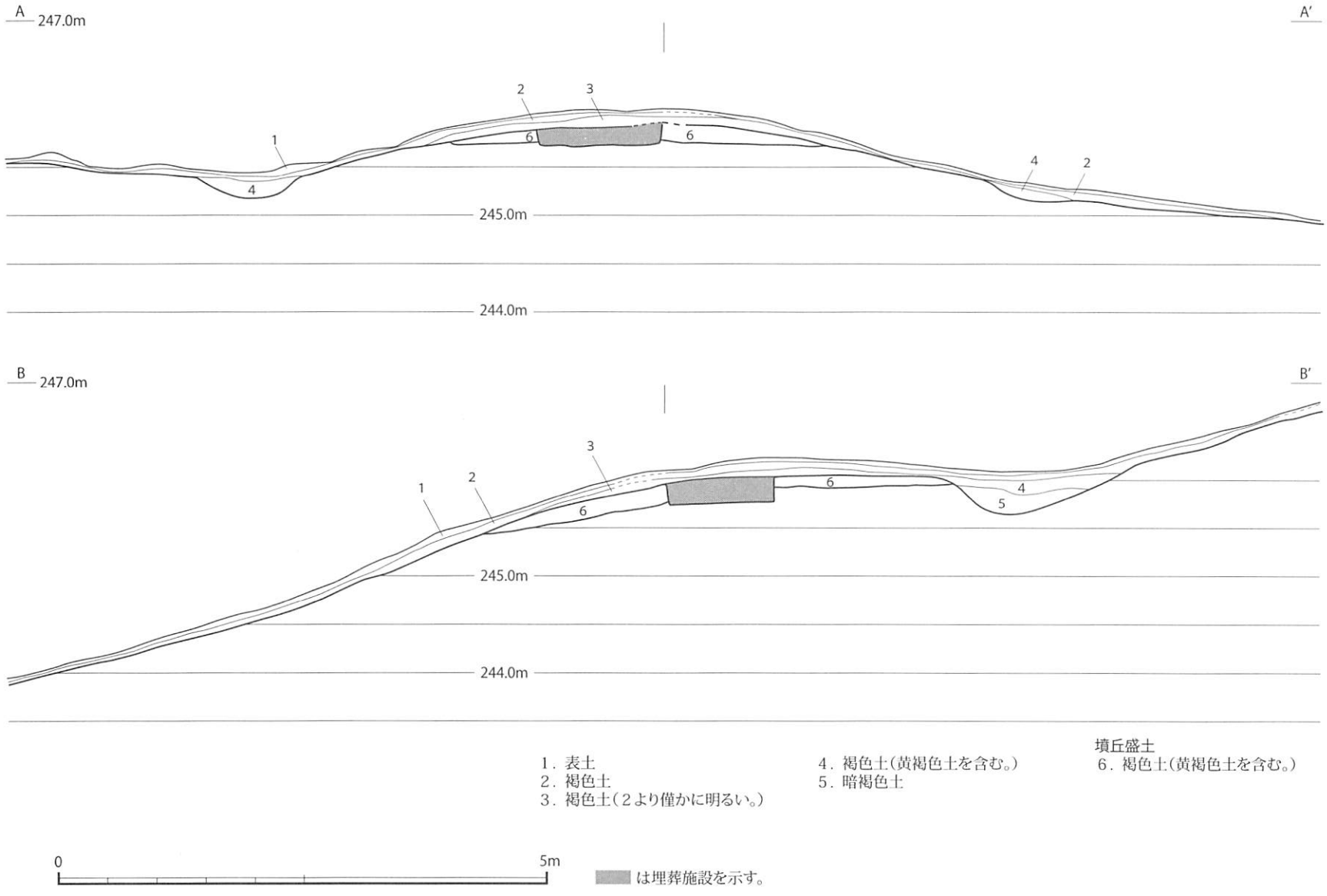
墳丘は，直径7.4～8.1ｍで，やや東西に長いが円形に近い平面形である。墳丘の西側に頂部があり，墳裾から1.9ｍしか離れていない。そのため，墳丘の東側はごく緩やかな斜面が墳裾まで長く続いている。墳丘の高さは，斜面下側（東側）の墳裾からは1.5ｍ，斜面上側（西側）の墳裾からは0.4ｍである。葺石などを施した痕跡はなく，斜面下側は地山を僅かに削って裾部を造り，斜面上側は幅1.8ｍ，深さ0.5ｍの周溝によって区画されている。墳丘の１／２よりはやや多く廻る周溝は，幅が広く浅い。周溝の底に平坦面はなく，全体的に丸みを持った断面形である。背面にあたる西側の底は墳丘側にやや偏っているため，底から外側の上端までは緩やかな傾斜となっている。墳丘の西側には東西に延びる削平の痕跡があり，重機によるものと思われる。

盛土は，現状での厚さ0.2ｍであり，黄褐色土を含む褐色土の単一層である。盛土の下は地山の黄褐色土層であり，盛土に含まれる黄褐色土は地山を掘り込んだ際に出たものと考えられる。埋葬施設の底は盛土の中で納まらず，地山まで僅かに掘り込んで造られており，第６号古墳と似た様子である。

ほかの古墳とはやや離れていることもあり，墳丘や周溝の平面プラン及び土層観察で重複関係は確認できなかった。



第37図　長畑山北第５号古墳　墳丘測量図（１：100）



第38図　長畑山北第５号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）

（３）埋葬施設（第39図，図版19）

墳丘のやや西寄りで土坑１基が検出され，木棺と考えられる。平面形は長方形であり，四隅は丸みをあまり帯びていない。長軸は，ほぼ真北（N-1°-E）を向いている。規模は，長さ2.12～2.15m，幅0.86～0.90m，深さ0.14～0.21mであり，木棺を埋葬施設とするほかの古墳の埋葬施設より0.2～0.6m程度長めである。床面は，南側より北側が0.03～0.05m低いもののほぼ平坦で，埋土と比べるとやや固く締まっている状況であった。壁面の立ち上がりは僅かに傾斜するが垂直に近く，凹凸感はない。

埋葬施設の埋土は，盛土と同じような褐色土である。ただし，盛土には黄褐色土が均等に含まれている状況に対して，埋葬施設の埋土には黄褐色土がブロック状に含まれている点で異なっている。盛土にも細礫が含まれているが，埋土にはこれより多くの細礫が含まれている違いも観察できた。

南側の壁際には上から下まで0.03～0.04mの均一の厚さで，ほかの褐色土よりやや暗くなっている部分があった。木棺の痕跡かと思われたが，ほかの場所ではこのような土色の違いを確認することはできなかった。

埋葬施設の幅は北側から南側まで同じような広さであり，埋葬施設からの出土遺物もないため頭位の方向は定かでないが，床面の北側が南側よりやや深いことや，ほかの古墳の状況からみて，北側ではないかと思われる。

東側と西側の一部が削平されているが，これは重機が通った際にできたものと思われる。壁面や床面にも相当の圧力を受けた可能性があるが，部分的に陥没したり土色が変色したりする様子はなく，被害は最小限に留まっている状況であった。

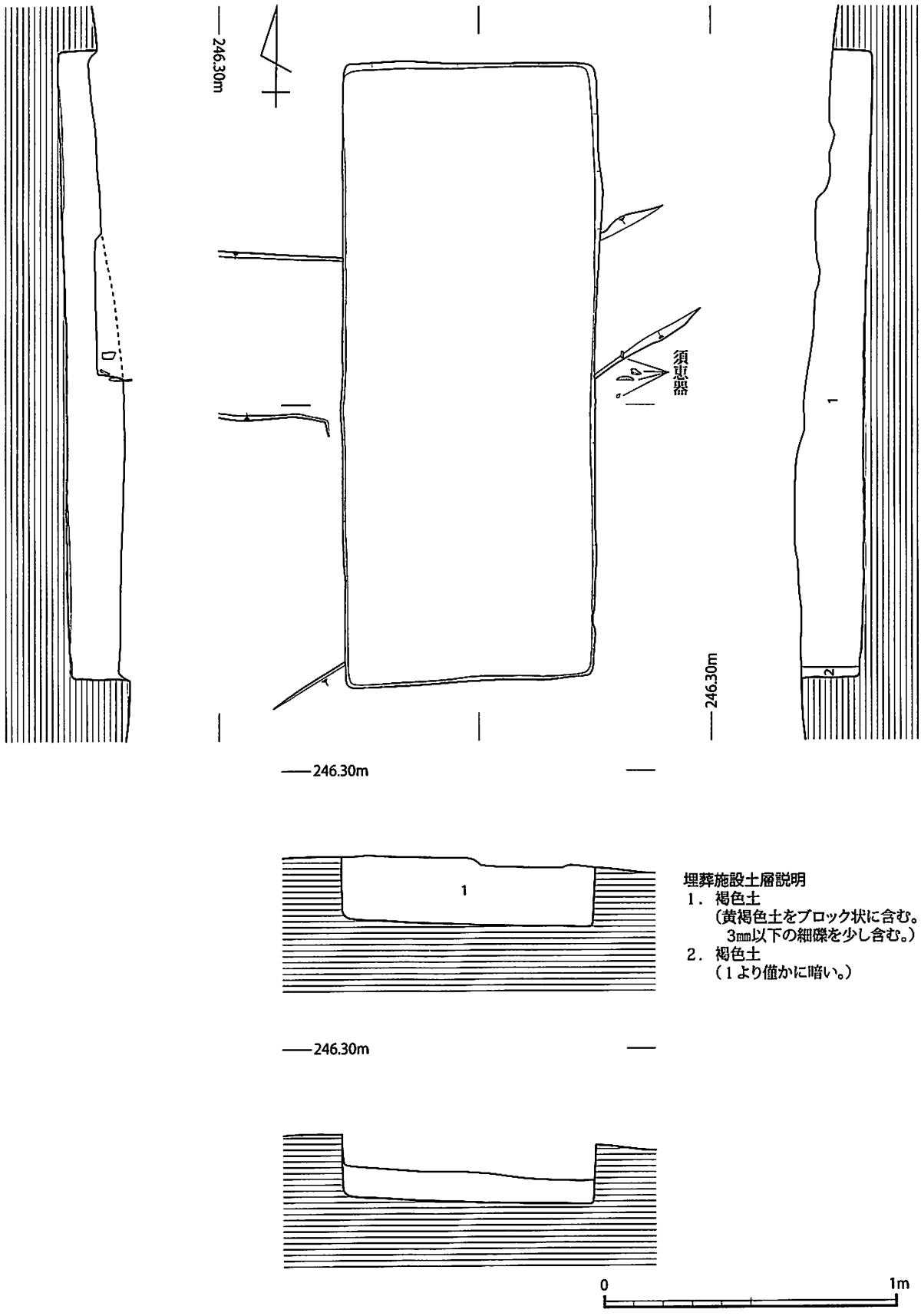
（４）遺物出土状況（第39図，図版19）

埋葬施設から遺物は出土していないが，２～７cm大の須恵器片約30点が，墳丘検出面から散在的に出土した。ほとんどが墳丘の東側から出土したものであり，墳丘の西側から出土したものは数点である。

また，埋葬施設から東に８～17cm離れて４～７cm大の須恵器片が４点，盛土の中からまとまって出土している。出土した須恵器片は少量であり，規則的に置かれた状況でもなく，意図的に置かれた痕跡もないため，祭祀などに関わるものではなく，盛土をする際に混入したものと思われる。

（５）出土遺物について

出土した須恵器は，何れも細片のため図示していないが，ほとんどが内面に同心円状の当て具の痕跡があり，外面には叩き目が残っているため，甕の体部片と思われる。第１号古墳では大甕の体部片と思われる須恵器が出土しているが，第５号古墳のものはこれより器壁が薄く，やや丸みを帯びているものが多いため，それほど大きな甕ではないと考えられる。



第39図　長畑山北第５号古墳　埋葬施設実測図（１：20）

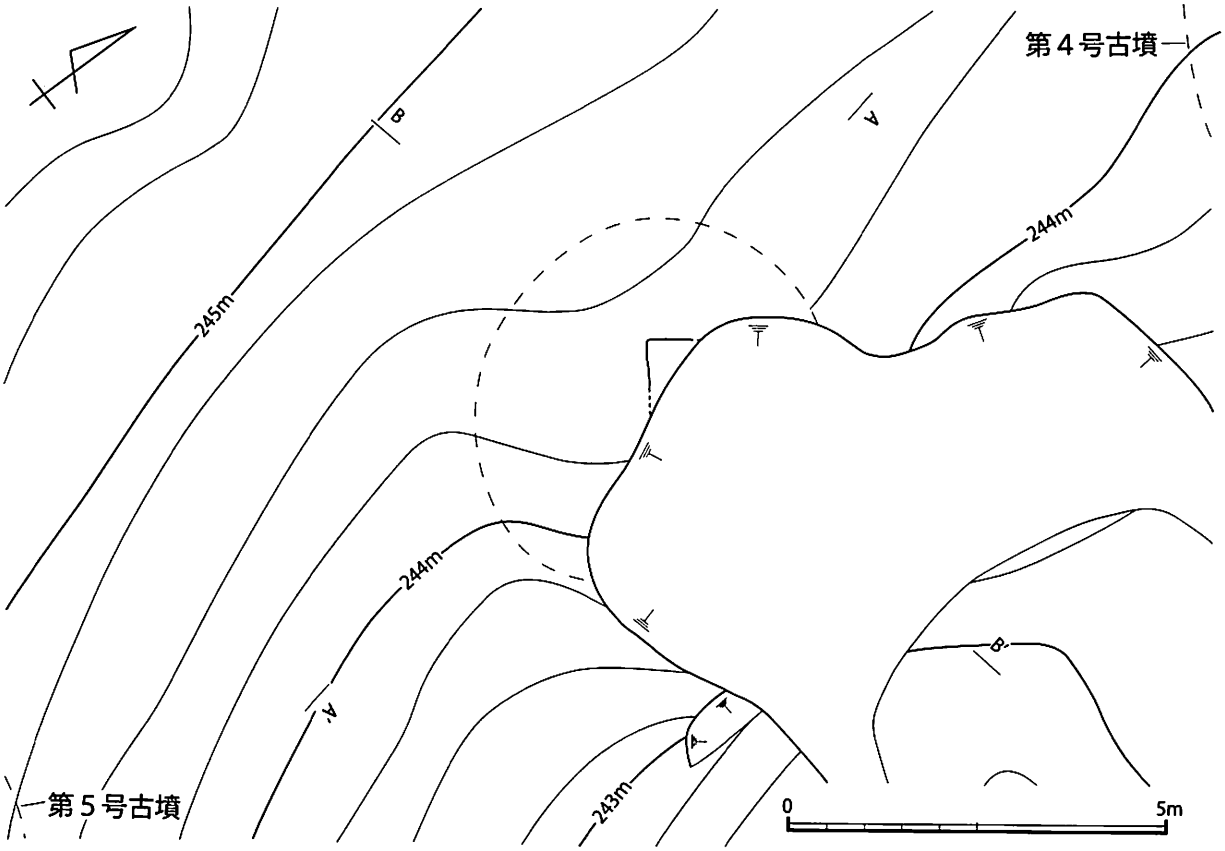
6　長畑山北第６号古墳

（１）立地と調査前の状況（第40図，図版20）

南から北に延びる丘陵の先端部付近に立地し，西から東方向にごく緩やかに下る斜面上にある。丘陵に沿って並ぶ古墳群の中では，第５号古墳に次いで南に位置している。標高は墳頂部で244.4mであり，やはり第５号古墳に次いで高い場所にある。

調査前の観察では，盗掘などを受けた痕跡はないものの，墳丘の東側半分は崩れ落ちて崖となっている状態であった。崖面に覆い被さる草木などを取り除くと，墳丘の中央部付近の崖から半分ほど露出している須恵器（杯蓋・杯身）が見つかり，副葬品であることが窺えた。また，第６号古墳は調査中に見つかった古墳であり，墳丘の高まりはあまり感じられない程度しかなく，ほとんどの盛土が流失しているか，残っていても僅かであることが予想された。試掘調査によって背面である西側に周溝が確認されていたが，地表面を見る限りでは僅かに窪むところがあるものの，周溝の位置や規模を明確に把握するのは難しい状態であった。なお，崖下には平坦面があり，人為的に掘り下げられてできたものと思われた。

墳丘に石材の露出や散乱はなく，また事前の試掘調査の結果と合わせ，木棺を埋葬施設とする小規模な円墳であると考えられた。しかし，盛土の様子や副葬品が露出する状況から，埋葬施設の遺存状況は悪いことが予想された。



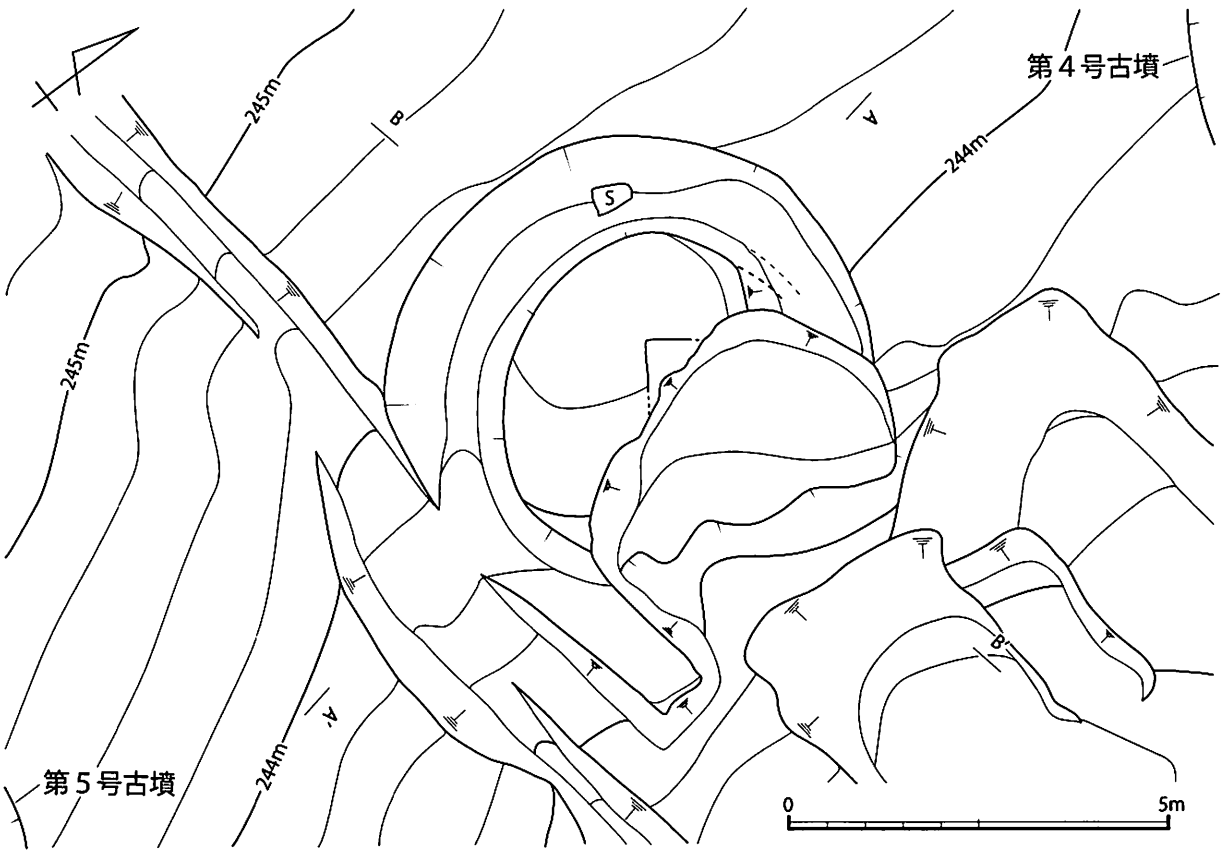
第40図　長畑山北第６号古墳　調査前地形測量図（１：100）

（２）墳丘・周溝（第41・42図，図版20・21）

墳丘は，斜面下側である東側の半分近くが崩れ落ちているため全容は明らかでないが，直径4.8～5.0mで，円形に近い平面形であったと推測される。墳丘の北西側に頂部があり，墳裾からは1.0mと近い。墳丘の高さは，斜面上側である西側の墳裾からは0.4m，北側の墳裾からは0.4m，南側の墳裾からは0.7mである。

葺石などを施した痕跡はなく，背面は幅1.6m，深さ0.5mの周溝によって区画されている。周溝は墳丘の１／２よりは多く廻ると思われるが，斜面の状況やほかの古墳の築造方法からみて，斜面下側は地山を掘り下げて裾部を造り出していた可能性が高い。周溝の南側は削平によって不明な点もあるが，北側や西側の周溝は幅が広く浅い。周溝の底には平坦面があり，墳丘側の斜面はやや急で，底から外側の上端まではやや緩やかな斜面となっている。北西側の底から出土している0.5m大の平らな石材は，隣接する第４号古墳から転落した可能性もある。

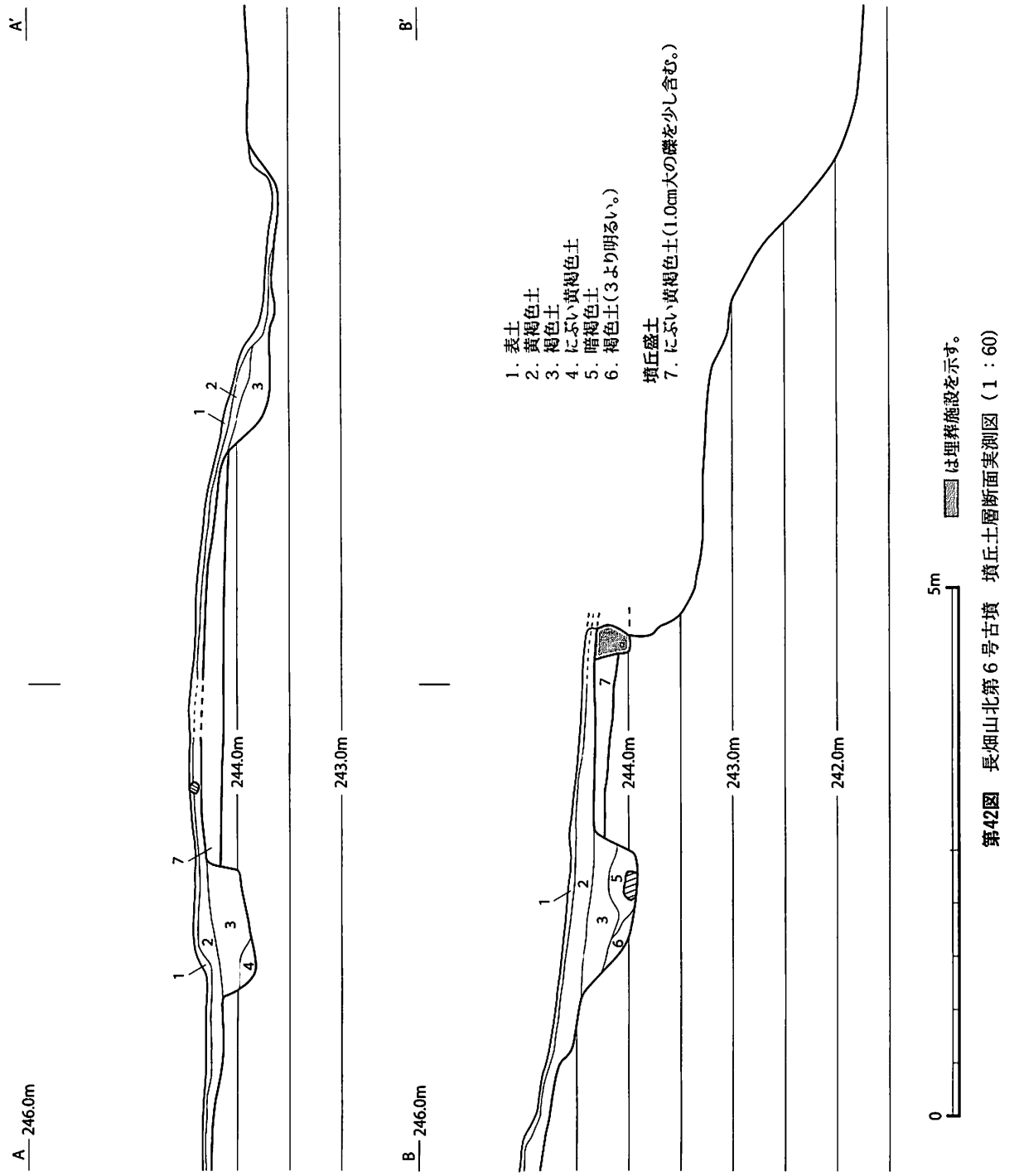
墳丘東側を削り取っている崖は，墳頂から1.0m低い場所に平坦面があり，さらにそこから1.5m低い場所にも平坦面があることから，人為的な要因によってできたものであると考えられる。比較的古くない時代に現在の状態になったことが，崖面の状況や露出していた須恵器の風化具合などから推測される。また，周溝の一部を削平する東西に長い溝状の落ち込みは，重機などによるものの可能性が高い。



第41図　長畑山北第６号古墳　墳丘測量図（１：100）

盛土は，現状での厚さ0.2mであり，にぶい黄褐色土に小礫を含む単一層である。この小礫は地山に含まれる礫と同じものが細かくなったものと考えられる。盛土の下は地山の黄褐色土層であり，埋葬施設の底は盛土の中で納まらず，地山まで僅かに掘り込んで造られている。

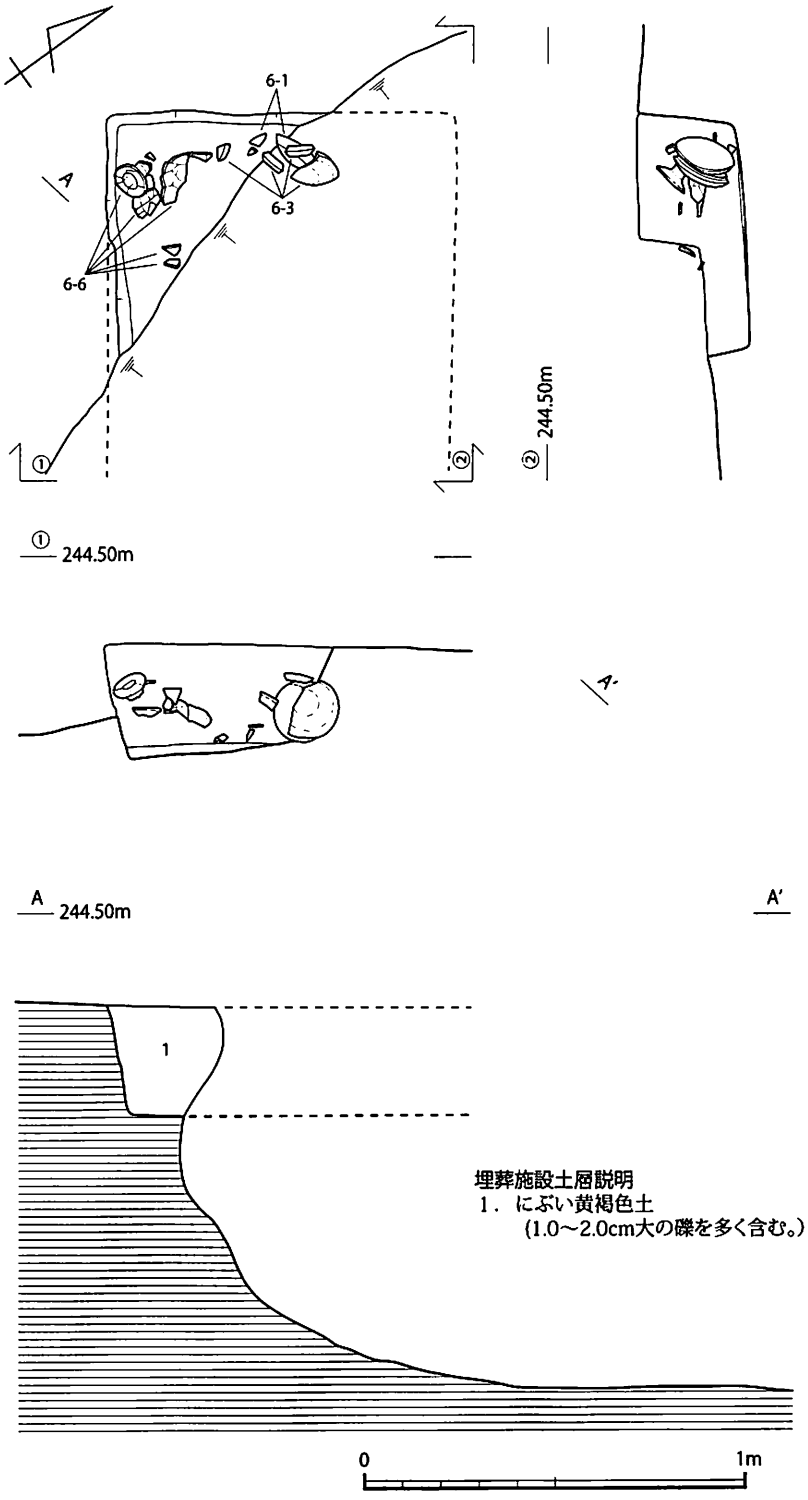
なお，墳丘や周溝の平面プラン及び土層観察では，隣接する第４号古墳やほかの古墳との重複関係は確認できなかった。



第42図　長畑山北第６号古墳　墳丘土層断面実測図（１：60）

（３）埋葬施設（第43図，図版22）

墳丘の中央部付近で土坑１基が検出され，木棺と考えられる。削平によって大部分を失っているが，残存する土坑の様子やほかの古墳の状況から推測し，平面形は長方形であったと思われ，長軸は北西（N-54°-W）を向いている。規模は，深さ0.25～0.28mであり，長さや幅は木棺を埋葬施設とするほかの古墳と似た数値であったと考えられる。



第43図　長畑山北第６号古墳　埋葬施設実測図（１：20）

床面は壁際から中央に向かって僅かに下っているがほぼ平坦であり，埋土と比べるとやや固く締まっている状況であった。北西側の壁面の立ち上がりは少し傾斜があるものの垂直に近く，南西側の壁面は比べるとやや傾斜している。

埋葬施設の埋土は盛土と同じように小礫を含むにぶい黄褐色土の単一層であるが，盛土よりやや大きめの礫を多く含んでいる。

頭位と考えられるのは北西側であり，埋葬施設の壁際から須恵器（杯蓋・杯身）や土師器（高杯）が出土した。これらの須恵器は位置的にみて棺外に副葬されたものではないかと思われる。

（４）遺物出土状況（第43図，図版22）

埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身）や土師器（高杯）が出土した。また，埋葬施設の下にあたる崖下から須恵器（杯蓋）のほか，周溝から須恵器（大甕）の破片，盛土の下層から石鏃，調査区内から叩き石も出土している。

須恵器杯蓋6-1・杯身6-3は埋葬施設の北西側から壁面近くで出土した。ともに口縁部が壁面を向き，重なった状態である。割れた状態であるがほぼ完形品であり，棺外に副葬されていたと推測される。杯蓋6-2は崖下からの出土ではあるが，大きく削平された埋葬施設の下であり，副葬品であった可能性が高い。杯身6-4は北東側の墳丘検出面から，杯身6-5は北東側の墳丘検出面や周溝の外側からの出土である。図示はしていないが，北西側の周溝埋土上層から，9×11cmの大甕の破片が出土した。

土師器高杯6-6は，埋葬施設の西側隅から出土した。壁面に近い場所で，須恵器とともに棺外に副葬された可能性がある。現在は伏せられた状態であるが，床面からやや浮いており，副葬当時の様子は定かでない。

石鏃6-7は，墳丘南西側の盛土の下からの出土したものである。偶然に旧地表面にあった石鏃の上に盛土が行われたようである。

叩き石6-8は，調査区内で表採したものである。

（５）出土遺物について

出土遺物には，須恵器（杯蓋２点・杯身３点），土師器（高杯１点），石製品（石鏃１点・叩き石１点）がある。ほかに須恵器（大甕）があるが，細片のため図示していない。なお，個々の寸法や特徴は，第２表の出土遺物観察表にまとめている。

須恵器（第44図，図版30）

杯蓋6-1・杯身6-3は埋葬施設から，杯蓋6-2は埋葬施設の下の崖から，杯身6-4は墳丘検出面から，杯身6-5は墳丘検出面や周溝の外側からの出土である。杯蓋6-1の口径は16.2cm，器高は5.3cmである。やや丸みのある天井部と口縁部の境には凹線が巡り，口縁端部には段が見られる。杯蓋6-2の口径は15.0cm，器高は5.1cmである。6-1と似た形態であるが，天井部と口縁部の境には凹線ではなく稜線が巡る。杯身6-3の口径は13.7cm，受部径は16.5cm，器高は5.2cmである。立ち上りは1.4cmで内傾しており，端部は丸くおさめている。受部はやや外上方を向き，ほかの杯身も同様であるが端部は丸みを帯びている。杯身6-4は約１／３残り，復元して口径は13.0cm，受部径は15.2cmである。ほかと比べてやや小振りで，器高も4.0cmと低い。立ち上りは1.2cmで内傾しており，端部は丸くおさめている。受部は6-3よりやや上方を向く。杯身6-5は約１／４残り，復元して口径は13.2cm，受部径は15.5cmで，器高は5.2cmである。立ち上りは1.5cmで内傾しており，端部は丸くおさめている。丸みのある底部で，受部はやや外上方を向く。これらの特徴から，埋葬施設から出土した杯蓋6-1や杯身6-3，埋葬施設からの可能性が高い杯蓋6-2は，概ねＴＫ10型式の併行期に相当すると考えられる。これに対して，墳丘検出面などから出土した杯身6-4・6-5はやや新

しく，ＭＴ85型式の併行期に相当する特徴も見られる。

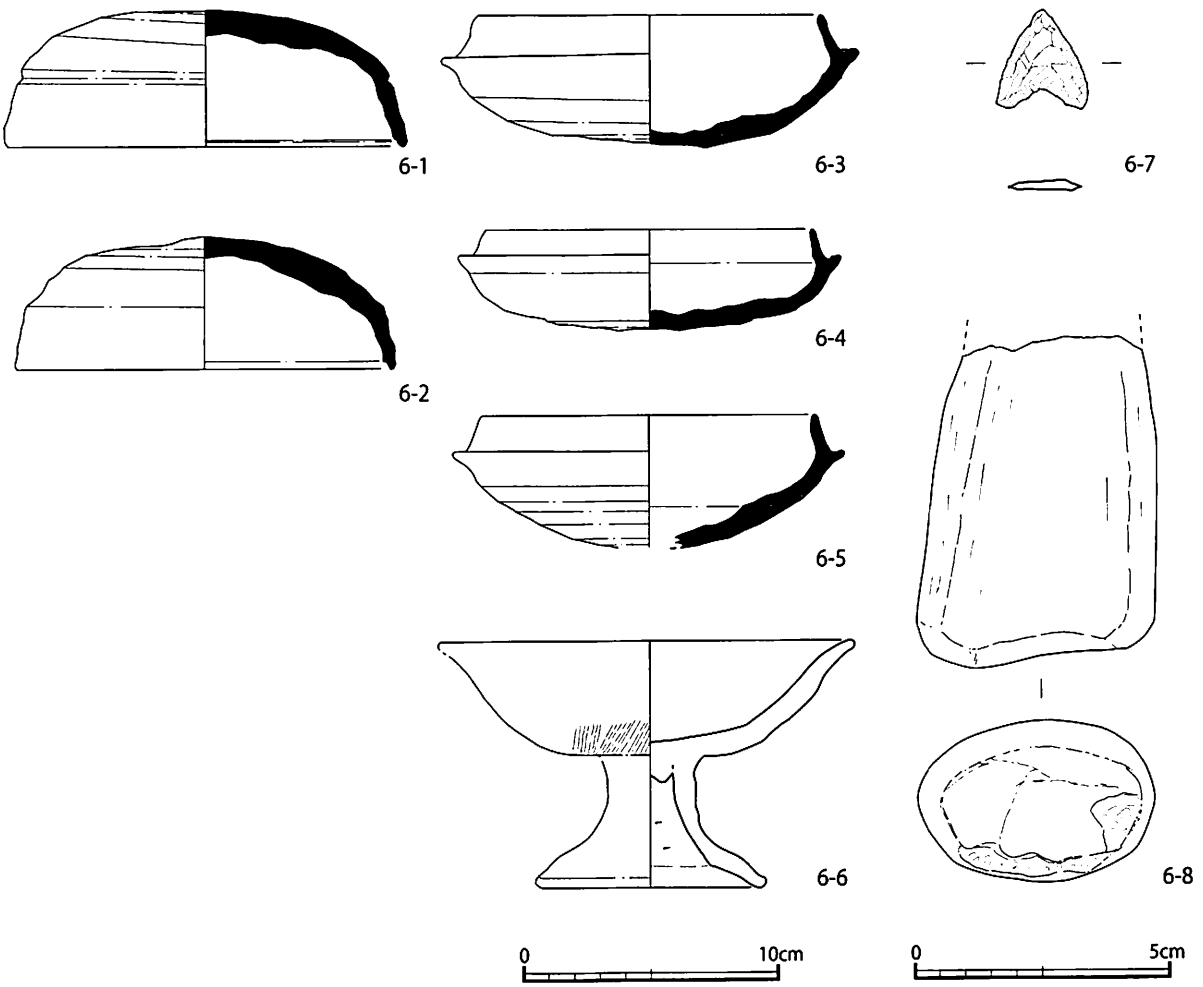
土師器（第44図，図版30）

高杯6-6は埋葬施設から出土した。復元口径16.5cm，脚底径9.5cm，器高9.7cmである。杯部外面の下位には部分的にハケ目の痕跡が，脚柱部の内面にはヘラ削りの痕跡が残り，ほかは回転ナデまたはナデ調整である。杯部は緩やかに内湾した後に外上方に短く伸び，端部は丸くおさめている。短く伸びる脚柱部から緩やかに脚部は広がり，端部はやや面をもって終わっている。

石製品（第44図，図版30）

石鏃6-7は，盛土の下の旧地表面から出土した。縄文時代のものと思われ，長さ2.0cm，幅1.8cm，厚さ0.2cm，重さ0.62ｇで，石材は珪質凝灰岩である。

叩き石6-8は調査区内で表採したものである。石斧であったものが，刃部が折れるなどの原因によって叩き石に転用されたと思われる。溶結凝灰岩で製作されており，残存長は6.6cm，幅4.8cm，厚さ3.2cm，横方向の断面形は楕円である。小口に当たる面には周辺部に叩いた痕跡が残るが，中央の窪んだ箇所には擦った痕跡も残る。また，側面もよく使いこまれており，全体的に擦った痕跡が残っている。



第44図　長畑山北第６号古墳　出土遺物実測図（１：３，２：３）

第２表　出土遺物観察表

①須恵器

遺物番号	出土位置	器種	法量（cm）※1					調整・文様　※2	胎土	焼成	色調
			口径	受部径	立上高 脚底径	体部 最大径	器高				
1-1	1号古墳 埋葬施設	杯蓋	14.3 ～ 14.5	－	－	－	4.8	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ナデ 口縁部と天井部の境に凹線 (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰，一部黒灰 (内) 暗青灰
1-2	1号古墳 埋葬施設	杯身	12.0 ～ 12.4	14.9 ～ 15.0	2.0	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
1-3	1号古墳 埋葬施設	杯身	12.1 ～ 12.4	14.4 ～ 14.5	2.1	－	5.1	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) やや暗青灰 (内) 暗青灰
1-4	1号古墳 埋葬施設	杯身	13.5 ～ 14.0	15.8 ～ 16.1	0.8	－	3.7	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～3mm大の砂粒を含む	良好	(外) 青灰 (内) 青灰
1-5	1号古墳 墳丘北西側裾	高杯	(12.4)	－	9.2	－	11.7	杯部 (外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 脚部 (外) 回転ナデ (内) 粗い横ナデ～回転ナデ	1mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
1-6	1号古墳 埋葬施設	甕	－	－	－	10.0	(13.0)	(外) 回転ナデ～カキ目～回転ナデ～カキ目～ナデ (内) 回転ナデ～調整不明	1mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
1-7	1号古墳 埋葬施設	甕	11.6 ～ 12.0	－	－	10.2	13.8 ～ 14.2	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～調整不明 回転は逆時計まわり	1mm大の砂粒を含む	良好 口縁部が歪む	(外) 暗灰 (内) 暗灰 外面，口縁部～頸部内面に自然釉
1-8	1号古墳 周溝北西側	提瓶	10.2	－	－	－	(28.0)	(外) 回転ナデ～カキ目・体部周辺に刺突文・側面肩に角状の把手張付け (内) 回転ナデ～体部内面同心円文	1mm大の砂粒を含む	良好 口縁部が歪む	(外) 暗緑灰 (内) 暗灰褐 外面，口縁部内面に自然釉
2-1	2号古墳 埋葬施設	杯蓋	14.5 ～ 15.0	－	－	－	4.8	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好 やや歪む	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰 外面一部に自然釉
2-2	2号古墳 埋葬施設	杯身	12.2 ～ 12.6	15.2	2.4	－	4.8	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好 底部が歪む	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰 外面一部に自然釉
3-1	3号古墳 石室	杯蓋	13.5 ～ 13.7	－	－	－	3.7	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起しによる凹凸 (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり？	1～2mm大の砂粒を含む	やや良好	(外) 青灰 (内) 暗青灰
3-2	3号古墳 石室	杯蓋	14.0 ～ 14.5	－	－	－	4.9	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し (内) 回転ナデ～仕上げナデ	2～3mm大の砂粒を含む	良好 口縁部が歪む	(外) 暗青灰白 (内) 暗青灰白
3-3	3号古墳 石室・墳頂部	杯蓋	14.7 ～ 14.8	－	－	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～ナデ（押さえ）？ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
3-4	3号古墳 西側壁上面	杯蓋	14.4 ～ 14.6	－	－	－	4.8	(外) 回転ナデ～ヘラ起し・ヘラナデ？ (内) 回転ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	やや良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
3-5	3号古墳 墳丘・石室・周溝	杯蓋	14.8	－	－	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	やや良好	(外) 黒灰 (内) 黒灰
3-6	3号古墳 石室	杯身	12.1 ～ 12.7	14.4 ～ 14.7	1.0	－	4.5 ～ 4.6	(外) 回転ナデ～板状工具によるナデ (内) 回転ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
3-7	3号古墳 石室	杯身	11.5 ～ 13.4	14.1 ～ 15.6	0.8	－	4.4 ～ 5.1	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好 歪む	(外) 暗灰 (内) 暗青灰
3-8	3号古墳 周溝ほか	杯身	(13.0)	(15.2)	1.5	－	(3.9)	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗青灰
3-9	3号古墳 周溝	杯身	12.6 ～ 12.7	14.6 ～ 15.0	1.2	－	3.9 ～ 4.3	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 灰白 (内) 灰白
3-10	3号古墳 墳丘・周溝	杯身	12.6 ～ 13.0	15.0 ～ 15.5	1.1	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 黒・暗灰 (内) 黒・暗灰

遺物番号	出土位置	器種	法量（cm）※1					調整・文様　※2	胎土	焼成	色調
			口径	受部径	立上高 脚底径	体部 最大径	器高				
3-11	3号古墳 墳丘・墳裾・ 周溝	杯身	(13.4)	15.3 ～ 15.5	0.9	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
3-12	3号古墳 周溝・石室・ 墳裾	甕	－	－	－	10.0	(14.3)	(外) 回転ナデ～ナデ (内) 回転ナデ～調整不明	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
3-13	3号古墳 周溝・墳丘	短径壺	(9.0)	－	－	15.2	(9.0)	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～ナデ？ 回転は逆時計まわり	2～3mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
3-14	3号古墳 周溝	短径壺	－	－	－	(14.3)	(6.0)	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1mm大の砂粒を含む	良好 生焼け	(外) 暗赤茶褐 (内) 茶褐色
3-15	3号古墳 墳丘・墳裾・ 周溝	横瓶	－	－	－	－	－	(外) 回転ヘラ削り～カキ目 (内) 指頭圧痕～回転ナデ	2～3mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
3-16	3号古墳 墳丘・墳裾・ 周溝	横瓶	－	－	－	－	－	(外) カキ目～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 口頸部との接合痕 側面に貼り付け痕	1～3mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
3-17	3号古墳 周溝ほか	横瓶	－	－	－	－	－	(外) カキ目 (内) ナデ～回転ナデ	1mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
3-18	3号古墳 墳丘・周溝	甕	(24.4)	－	－	－	(8.2)	(外) 回転ナデ～やや斜め方向のタタキ痕 (内) 回転ナデ～ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	不良 生焼け	(外) 暗灰 (内) 口頸部は暗灰 胴部は暗赤褐色
4-1	4号古墳 玄室の床面下	杯蓋	14.7 ～ 14.9	－	－	－	5.0	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り 口縁部と天井部の間に稜線 (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
4-2	4号古墳 玄室の床面下	杯蓋	15.7	－	－	－	5.8	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り 口縁部と天井部の間に稜線 (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～3mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 黒茶を帯びる (内) 暗青灰
4-3	4号古墳 玄室・一部は 軋み石の下	杯蓋	14.0 ～ 14.2	－	－	－	4.4	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り 口縁部と天井部の間に凹線 口縁端部に板状工具の面調整 (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
4-4	4号古墳 玄室	杯蓋	14.3 ～ 14.5	－	－	－	4.7	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り 口縁部と天井部の間に稜線 (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 やや黒を帯びる (内) 暗青灰
4-5	4号古墳 玄室・一部は 羨道	杯蓋	14.7 ～ 14.9	－	－	－	4.4	(外) 回転ナデ～ヘラ起し・ヘラ削り？ (内) 回転ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
4-6	4号古墳 玄室	杯蓋	14.6 ～ 14.7	－	－	－	4.9	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り 口縁部と天井部の間に稜線 (内) 回転ナデ～仕上げナデ？ 回転は逆時計まわり	1～3mm大の砂粒を含む	やや不良 生焼け	(外) 淡黄灰 (内) 淡黄灰
4-7	4号古墳 玄室	杯蓋	14.0 ～ 14.3	－	－	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 回転は時計まわり？	1～2mm大の砂粒を含む	やや良好	(外) 灰白 (内) 灰白
4-8	4号古墳 周溝より外側	杯蓋	－	－	－	－	－	(外) 回転ナデ～ (内) 回転ナデ～	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 黒灰 (内) 暗灰
4-9	4号古墳 周溝より外側	杯蓋	－	－	－	－	－	(外) 回転ナデ～ (内) 回転ナデ～	微砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
4-10	4号古墳 玄室の床面下	杯身	12.2 ～ 12.6	15.3 ～ 15.6	2.2	－	6.1	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
4-11	4号古墳 玄室の床面下	杯身	12.8 ～ 12.9	15.5	1.6	－	5.2 ～ 5.4	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
4-12	4号古墳 玄室の床面下	杯身	13.2 ～ 13.3	15.8 ～ 15.9	1.9	－	5.4	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～当て具の痕跡 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 淡暗青灰 (内) 淡暗青灰
4-13	4号古墳 玄室	杯身	12.3 ～ 12.4	14.3 ～ 14.5	1.1	－	4.5	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2mm大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰

遺物番号	出土位置	器種	法量（cm）※1					調整・文様 ※2	胎土	焼成	色調
			口径	受部径	立上高 脚底径	体部 最大径	器高				
4-14	4号古墳 玄室	杯身	12.7 ～ 12.9	15.2 ～ 15.4	1.1	－	4.6	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
4-15	4号古墳 玄室	杯身	13.0 ～ 13.3	15.2 ～ 15.5	1.2	－	4.5	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2㎜大の砂粒を含む	やや良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰 外面より黒い
4-16	4号古墳 玄室	杯身	12.5 ～ 12.7	14.6 ～ 14.9	0.9	－	4.9	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2㎜大の砂粒を含む	やや不良	(外) 灰白 (内) 灰白
4-17	4号古墳 玄室・一部は 軋み石の下	杯身	13.1 ～ 13.5	15.0 ～ 15.3	0.7	－	4.2	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ切り離し後ナデ？ (内) 回転ナデ 回転は逆時計まわり	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰 黒を帯びる
4-18	4号古墳 墳丘	杯身	(13.0)	(15.3)	1.0	－	－	(外) 回転ナデ～ (内) 回転ナデ～	1～2㎜大の砂粒を含む	やや良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
4-19	4号古墳 周溝	杯身	－	－	1.1	－	－	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ	1㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
4-20	4号古墳 玄室	高杯	11.9 ～ 12.1	14.3 ～ 14.5	0.6 10.3	－	7.3	杯部 (外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 脚部 (外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	1～2㎜大の砂粒を含む	やや良好 杯部が傾く	(外) 暗青灰 脚部は黒灰 (内) 暗青灰
4-21	4号古墳 玄室	高杯	11.7 ～ 12.8	14.2 ～ 14.8	1.0 10.5	－	8.9 ～ 9.2	杯部 (外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 脚部 (外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	1～2㎜大の砂粒を含む	やや良好 杯部が歪む	(外) 暗灰～黒灰 (内) 暗灰～黒灰
4-22	4号古墳 玄室	高杯	12.8 ～ 13.0	14.9 ～ 15.1	0.8 10.5	－	8.6 ～ 9.5	杯部 (外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ 脚部 (外) 回転ナデ (内) ナデ～回転ナデ	1～2㎜大の砂粒を含む	良好 杯部が傾く	(外) 暗灰～黒灰 (内) 暗灰～黒灰
4-23	4号古墳 玄室と羨道の 境付近	甕	11.4	－	－	11.2	12.0	(外) 回転ナデ～カキ目～ナデ 頸部に櫛状工具の波状文，体部にハケ状工具木口の刺突文 (内) 回転ナデ～調整不明 口縁端部に沈線	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 黒灰～暗灰 一部灰白 (内) 黒灰～暗灰 一部灰白
4-24	4号古墳 羨道	甕	(14.2)	－	－	10.6	16.0	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ナデ (内) 回転ナデ～調整不明	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰～黒灰 (内) 暗灰～黒灰
4-25	4号古墳 石室上層	平底壺	(8.1)	底径 10.5		15.4	20.3	(外) 回転ナデ～ナデ (内) 回転ナデ～調整不明	微砂粒を含む	やや良好	(外) 暗茶褐 (内) 暗茶褐
4-26	4号古墳 軋み石近くの 床面下	短径壺	(10.2)	－	－	15.3	13.4	(外) 回転ナデ～ナデ～カキ目～タタキ痕（底部中央はやや磨滅） (内) 回転ナデ～円形タタキ後ナデ	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
4-27	4号古墳 周溝より外側	短径壺	－	－	－	－	(4.0)	(外) 回転ナデ～ (内) 回転ナデ～ 口縁端部に沈線	1㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 黒灰 外面に自然釉
4-28	4号古墳 軋み石近く	提瓶	7.3	－	－	18.9	23.0	(外) 回転ナデ～浅いカキ目 回転ナデ～回転ヘラ削り～ナデ 側面肩に円形浮文を貼り付け (内) 回転ナデ～調整不明	1㎜大以下の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰白～黒灰 (内) 暗灰白～黒灰 口縁部内外面，体部外面に自然釉
4-29	4号古墳 玄室	提瓶	7.8 ～ 8.3	－	－	20.9	23.7	(外) 回転ナデ～ナデ～回転ナデ（同心円状）～ナデ 回転ナデ～回転ヘラ削り～ナデ 側面肩に輪状把手の張り付け痕 (内) 回転ナデ～指頭圧痕・ナデ～回転ナデ（同心円状）～指頭圧痕・ナデ	1㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 黒灰
6-1	6号古墳 埋葬施設	杯蓋	16.0 ～ 16.2	－	－	－	5.3	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～3㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰
6-2	6号古墳 崩下であるが 埋葬施設か	杯蓋	15.0	－	－	－	5.1	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り～ヘラ起し後粗いヘラ削り (内) 回転ナデ仕上げナデ 回転は逆時計まわり	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰
6-3	6号古墳 埋葬施設	杯身	13.5 ～ 13.7	16.3 ～ 16.5	1.4	－	5.2	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～一部に当て具の痕跡 回転は逆時計まわり	1～3㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗灰白 (内) 暗青灰
6-4	6号古墳 墳丘	杯身	(13.0)	(15.2)	1.2	－	4.0	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ	1～2㎜大の砂粒を含む	良好	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰

遺物番号	出土位置	器種	法量（cm）※1					調整・文様　※2	胎土	焼成	色調
			口径	受部径	立上高 脚底径	体部 最大径	器高				
6-5	6号古墳 墳丘・周溝より外側	杯身	(13.2)	(15.5)	1.5	－	5.2	(外) 回転ナデ～回転ヘラ削り (内) 回転ナデ～ 回転は逆時計まわり	1～2㎜大の砂粒を含む	やや良好	(外) 暗灰 (内) 暗灰

②土師器

遺物番号	出土位置	器種	法量（cm）※1					調整・文様　※2	胎土	焼成	色調
			口径	基部径	脚底径	体部 最大径	器高				
4-30	4号古墳 軋み石近くの床面下	椀	－	－	－	13.0	(8.1)	(外) 調整不明 (内) 調整不明	1㎜大の砂粒を含む	不良	(外) 明赤褐 (内) 明赤褐
4-31	4号古墳 玄室の床面下	高杯	13.9 ～ 14.6	3.7 ～ 3.8	(9.5)	－	12.2 ～ 13.5	杯部 (外) 横ナデ～調整不明 (内) 横ナデ～ナデ 脚部 (外) 調整不明 (内) ケズリ～調整不明	1～2㎜大の砂粒を含む	やや不良 全体が歪む	(外) 明黄褐 やや赤みを帯びる (内) 明黄褐 やや赤みを帯びる
4-32	4号古墳 玄室の床面下	高杯	14.8 ～ 15.5	3.9 ～ 4.0	(9.8)	－	11.8 ～ 12.4	杯部 (外) 調整不明 (内) 調整不明 脚部 (外) 調整不明 (内) ケズリ～横ナデ？	1㎜大の砂粒を含む	不良	(外) 明黄褐 (内) 明黄褐
4-33	4号古墳 玄室の床面下	高杯	15.0 ～ 15.8	4.3 ～ 4.5	(9.2)	－	13.2 ～ 13.5	杯部 (外) 調整不明 (内) 調整不明 脚部 (外) 調整不明 (内) 調整不明	1㎜大の砂粒を含む	不良	(外) 明黄褐 (内) 明黄褐
6-6	6号古墳 埋葬施設	高杯	(16.5)	4.0	9.1 ～ 9.5	－	9.7	杯部 (外) 横ナデ～一部にハケ目 (内) 横ナデ～ナデ？ 脚部 (外) 調整不明～横ナデ (内) ヘラ削り～横ナデ	1～2㎜大の砂粒を含む	やや不良	(外) 明黄褐～明赤黄褐 (内) 明黄褐～明赤黄褐

③鉄器（鉄鏃）

遺物番号	出土位置	頸	鏃身	長さ（cm）※3				幅（cm）			厚さ（cm）			重さ（g）※4	備考
				全長	鏃身部	頸部	茎部	鏃身部	頸部	茎部	鏃身部	頸部	茎部		
1-9	1号古墳 盛土	－	三角	10.9	3.8	2.7	4.4	3.7	1.0～1.1	0.4	0.3	0.5	0.4	20.27	茎部に木質残る
1-10	1号古墳 盛土	－	－	(3.9)	－	(1.5)	2.4	－	0.7	0.4	－	0.3	0.3	(1.77)	頸部・茎部に木質残る
4-34	4号古墳 玄室	長頸	長三角	14.8	2.5	8.1	4.2	1.2	0.7～0.9	0.3～0.4	0.3	0.4	0.3	11.37	茎部に木質わずか残る
4-35	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(13.7)	2.2	8.5	(3.0)	1.2	0.7～0.9	0.3～0.6	0.3	0.5	0.3	10.83	茎部に木質わずか残る
4-36	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(13.1)	2.4	8.3	(2.4)	1.2	0.6～1.0	0.3～0.6	0.3	0.4	0.3	12.13	茎部に木質残る
4-37	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(12.5)	2.3	8.0	(2.2)	1.2	0.7～0.9	0.4～0.5	0.3	0.4	0.2～0.3	8.88	茎部に木質残る
4-38	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(14.9)	(1.8)	8.2	4.9	1.2	0.7～0.9	0.3～0.5	0.3	0.4	0.3	12.08	茎部に木質残る
4-39	4号古墳 玄室	長頸	長三角	14.9	2.4	7.8	4.7	1.3	0.7～0.9	0.3～0.5	0.4	0.4	0.2～0.3	12.14	茎部に木質わずか残る
4-40	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(5.3と7.9)	2.4	(2.9と4.9)	(3.0)	1.1	0.6～0.9	0.3～0.5	0.3	0.4	0.2～0.3	4.09と6.37	2点に分かれて間は欠損 茎部に木質わずか残る
4-41	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(13.6)	2.6	7.4	(3.6)	1.0	0.6～0.8	0.3～0.5	0.3～0.4	0.5	0.3～0.4	13.28	頸部に別の鉄鏃片？付着 茎部に木質わずか残る
4-42	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(8.4)	2.1	(6.3)	－	1.3	0.7	－	0.3～0.4	0.4	－	(7.31)	頸部に別の刀子片？付着
4-43	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(13.7)	2.4	8.0	3.3	1.3	0.6～0.9	0.3～0.5	0.4	0.4	0.3～0.4	12.41	頸部に別の刀子片？付着 茎部に木質わずか残る
4-44	4号古墳 玄室	長頸	長三角	(16.0)	2.1	8.1	(5.8)	1.1	0.6～0.8	0.3～0.5	0.3	0.4	0.3	12.95	茎部に別の鉄鏃片？付着 茎部に木質わずか残る
4-45	4号古墳 石室北半	－	長三角	(4.3)	2.7	(1.6)	－	1.3	0.7	－	0.3	0.3	－	(4.03)	
4-46	4号古墳 玄室	長頸	－	(11.3)	－	(7.7)	(3.6)	－	0.7～0.9	0.3～0.5	－	0.4～0.5	0.3	(15.23)	茎部に木質わずか残る
4-47	4号古墳 玄室	長頸？	－	(6.4)	－	(4.7)	(1.7)	－	0.7	0.4～0.5	－	0.3	0.3	(4.36)	茎部に木質わずか残る
4-48	4号古墳 玄室	長頸？	－	(4.9)	－	(2.8)	(2.1)	－	0.7～0.9	0.4～0.6	－	0.3	0.3	(4.71)	茎部に木質わずか残る

遺物番号	出土位置	頸	鏃身	長さ（cm）※3				幅（cm）			厚さ（cm）			重さ（g）※4	備考
				全長	鏃身部	頸部	茎部	鏃身部	頸部	茎部	鏃身部	頸部	茎部		
4-49	4号古墳 石室南半	長頸？	－	(5.7)	－	(5.7)	－	－	0.7	－	－	0.3～0.4	－	(4.37)	
4-50	4号古墳 石室南半	長頸？	－	(5.4)	－	(5.4)	－	－	0.5～1.2	－	－	0.4	－	(4.70)	
4-51	4号古墳 玄室	長頸？	－	(3.3)	－	(3.3)	－	－	0.4	－	－	0.4	－	(1.60)	
4-52	4号古墳 玄室	長頸？	－	(3.6)	－	(3.6)	－	－	0.4～0.5	－	－	0.3	－	(1.69)	
4-53	4号古墳 玄室	－	－	(2.4)	－	－	(2.4)	－	－	0.3～0.4	－	－	0.2	(0.38)	茎部に木質わずか残る
4-54	4号古墳 玄室	－	－	(1.5)	－	－	(1.5)	－	－	0.3～0.4	－	－	0.3	(0.39)	茎部に木質残る
4-55	4号古墳 玄室	長頸	長三角？	(15.5)	不明	不明	(5.7)	1.2？	0.5？	0.3～0.4？	0.4？	0.4？	0.3？	81.84	鉄鏃5本の集合体 長さ以外の数値は推定
				(15.1)	不明	不明	(5.1)	1.2？	0.5？	0.3～0.4？	0.4？	0.4？	0.3？		
				(16.9)	不明	不明	(5.7)	1.2？	0.5？	0.3～0.4？	0.4？	0.4？	0.3？		
				(16.1)	不明	不明	(5.6)	1.2？	0.5？	0.3～0.4？	0.4？	0.4？	0.3？		
				(16.6)	不明	不明	(5.3)	1.2？	0.5？	0.3～0.4？	0.4？	0.5？	0.3？		
4-56	4号古墳 玄室	－	長三角	12.1	5.5	5.3	3.4	(3.2)	0.7～0.9	0.3～0.4	0.3	0.3～0.5	0.3	14.01	鏃身に逆刺が付く 茎部に木質残る
4-57	4号古墳 玄室	－	長三角	13.3	5.4	4.8	4.5	3.6	0.8～1.0	0.3～0.5	0.3	0.4～0.5	0.3	16.87	鏃身に逆刺が付く 茎部に木質残る
4-58	4号古墳 玄室	－	柳葉	(12.2)	8.5	3.2	(2.7)	3.8	0.8	0.3～0.5	0.3	0.3	0.3	23.30	鏃身に逆刺が付く 茎部に木質残る
4-59	4号古墳 玄室	－	圭頭	(11.5)	7.8	－	(3.7)	2.8	－	0.3～0.6	0.3	－	0.4	15.50	茎部に木質わずか残る
4-60	4号古墳 玄室	－	長三角	(4.6)	(4.6)	－	－	(2.7)	－	－	0.3	－	－	(5.37)	
4-61	4号古墳 石室北半	－	長三角	(3.8)	(3.8)	－	－	(2.4)	－	－	0.3	－	－	(4.26)	
4-62	4号古墳 玄室	－	－	(2.8)	(1.5)	(1.3)	－	2.7	1.0～2.4？	－	0.4	0.3		(6.42)	

④鉄器（鉄鏃以外）

遺物番号	出土位置	種類	長さ（cm）※3			幅（cm）		厚さ（cm）		重さ（g）※4	備考
			全長	刃部	茎部	刃部	茎部	刃部	茎部		
1-11	1号古墳 盛土	刀子	(5.8)	(2.4)	(3.4)	1.0～1.7	0.8～1.7	0.4	0.4	(8.28)	
1-12	1号古墳 盛土	直刃鏃	16.7			3.4		0.5		79.68	
2-3	2号古墳 盛土	摘鏃	7.7			2.6		0.3		(12.77)	刃先は欠損，木質残る
3-19	3号古墳 石室	刀子	(6.4)	(2.5)	3.9	0.8～1.5	1.0	0.4	0.4	(5.97)	茎部に木質わずか残る
3-20	3号古墳 石室	摘鏃	8.5			2.5		0.4		21.11	
4-63	4号古墳 玄室	刀子	14.7	10.0	4.7	1.8	0.8～1.0	0.5	0.3	26.22	茎部に木質わずか残る
4-64	4号古墳 玄室	刀子	(8.8)	(4.4)	4.4	1.4	0.7～0.9	0.4	0.5	(9.72)	茎部に木質わずか残る
4-65	4号古墳 玄室	刀子	(5.9)	(5.9)	－	1.4	－	0.3	－	(8.66)	
4-66	4号古墳 玄室	刀子	(16.3)	(13.2)	(3.1)	1.9	0.7～1.0	0.4	0.5	(31.33)	茎部に木質わずか残る
4-67	4号古墳 玄室	剣	65.1	54.7	10.4	3.3	1.5	0.7	0.3～0.5	429.37	目釘穴，鎺がある
4-68	4号古墳 玄室	曲刃鏃	17.8			3.6		0.6		88.72	
4-69	4号古墳 立柱石近く	鉄斧	8.0			3.8		2.6		120.40	袋状鉄斧　刃部は丸みをもち，断面形は長方形
4-70	4号古墳 石室中央付近	鉄鐸	3.6			1.6		1.4		4.07	円錐形で中空　舌は遺存しないが懸通孔がある
4-71	4号古墳 玄室	不明	(5.1)			2.3		0.3		(7.83)	刀子の可能性

⑤耳環

遺物番号	出土位置	外形（高さ×幅）(cm)	断面（高さ×幅）(cm)	重さ（g）	備考
4-72	4号古墳　玄室	2.75×3.03	0.59×0.61	14.64	銅芯　鍍銀　一部に緑青
4-73	4号古墳　玄室	2.76×3.05	0.61×0.62	15.18	銅芯　鍍銀

⑥玉類（滑石製小玉・丸玉・切子玉）

遺物番号	出土位置	種類	長さ（mm）	径・幅（mm）	孔径（mm）	重さ（g）	材質	色調	備考
2-4	2号古墳　盛土	小玉	2.7	4.0～4.1	1.8～1.9	0.06	滑石	灰白	
2-5	2号古墳　盛土	小玉	2.3	4.4～4.5	1.7～1.9	0.07	滑石	灰白	
2-6	2号古墳　盛土	小玉	2.9	4.8～5.0	1.6～1.7	0.11	滑石	灰白	
2-7	2号古墳　盛土	小玉	3.0	5.1～5.4	1.5～1.7	0.14	滑石	灰白	
2-8	2号古墳　盛土	小玉	1.9	4.8～4.9	1.5～1.6	0.08	滑石	灰白	
2-9	2号古墳　盛土	小玉	1.6	4.3	1.7～1.8	0.05	滑石	灰白	
2-10	2号古墳　盛土	小玉	2.2	4.4～4.5	1.8～1.9	0.06	滑石	灰白	
2-11	2号古墳　埋葬施設	小玉	2.7	4.7～4.9	1.4～1.8	0.09	滑石	灰白	
4-74	4号古墳　玄室	丸玉	8.7	9.7～10.3	1.8～2.7	1.16	碧玉	暗緑	翡翠にも似た石材
4-75	4号古墳　玄室	切子玉	30.8	16.3～18.1	1.6～4.1	11.62	石英	半透明	
4-76	4号古墳　玄室	切子玉	29.7	15.7～18.0	1.6～4.3	10.73	石英	半透明	
4-77	4号古墳　玄室	切子玉	28.4	12.3～13.6	1.6～3.9	6.18	石英	半透明	
4-78	4号古墳　玄室	切子玉	25.7	13.4～15.5	1.6～4.0	6.71	石英	半透明	
4-79	4号古墳　玄室	切子玉	22.8	12.7～13.9	1.6～3.9	5.19	石英	半透明	
4-80	4号古墳　玄室	切子玉	14.6	10.8～11.8	1.7～3.1	2.36	石英	半透明（淡乳白）	
4-81	4号古墳　玄室	切子玉	11.0	9.9～10.9	1.6～3.0	1.63	石英	半透明（淡乳白）	

⑦玉類（土玉）

遺物番号	出土位置	種類	長さ（mm）	径（mm）	孔径（mm）	重さ（g）※4	材質	色調	備考
2-12	2号古墳　盛土	土玉	5.5	6.1～6.7	1.4～1.5	0.16	土	暗褐	
2-13	2号古墳　盛土	土玉	5.4	6.2～6.5	1.3～1.4	0.19	土	暗褐	
2-14	2号古墳　盛土	土玉	4.8	6.0	1.4	(0.07)	土	暗褐	1/2残
2-15	2号古墳　盛土	土玉	4.7	5.9～6.3	1.3～1.5	0.17	土	暗褐	
2-16	2号古墳　盛土	土玉	5.2	6.0～6.4	1.3～1.4	0.18	土	暗褐	
2-17	2号古墳　盛土	土玉	4.9	6.0～6.2	1.3～1.6	0.18	土	暗褐	
2-18	2号古墳　盛土	土玉	5.6	6.2～6.4	1.3～1.4	0.17	土	暗褐	
2-19	2号古墳　盛土	土玉	5.2	6.3～6.4	1.3～1.4	0.18	土	暗褐	一部欠
2-20	2号古墳　盛土	土玉	4.5	6.0～6.3	1.4～1.5	0.15	土	暗褐	一部欠
2-21	2号古墳　盛土	土玉	5.0	6.0～6.3	1.3～1.5	0.16	土	暗褐	一部欠
2-22	2号古墳　盛土	土玉	5.1	5.8～6.3	1.3～1.4	0.16	土	暗褐	
2-23	2号古墳　盛土	土玉	5.0	5.8～6.2	1.3～1.4	0.17	土	暗褐	
2-24	2号古墳　埋葬施設	土玉	4.9	6.1～6.2	1.4～1.5	0.17	土	暗褐	
4-82	4号古墳　玄室	土玉	7.1	6.7～7.1	1.3～1.4	0.33	土	暗褐	
4-83	4号古墳　石室中央付近	土玉	5.9	6.7～7.1	1.7～1.9	0.28	土	暗褐	

⑧玉類（ガラス小玉）

遺物番号	出土位置	種類	長さ（㎜）	径（㎜）	孔径（㎜）	重さ（g）	材質	色調	備考
4-84	4号古墳　玄室	小玉	3.6	7.6～8.6	2.2～2.4	0.36	ガラス	群青	
4-85	4号古墳　玄室	小玉	4.4	7.3～8.2	1.5～1.6	0.40	ガラス	群青	
4-86	4号古墳　玄室	小玉	5.7	7.8～7.9	1.4～1.5	0.52	ガラス	群青	
4-87	4号古墳　玄室	小玉	3.7	5.0～5.9	1.9～2.9	0.14	ガラス	淡緑青	
4-88	4号古墳　玄室	小玉	3.8	4.8～5.1	1.8～2.0	0.12	ガラス	青	
4-89	4号古墳　玄室	小玉	2.7	4.1～4.2	1.0～1.1	0.06	ガラス	黄	
4-90	4号古墳　玄室	小玉	2.6	3.3～3.5	1.1～1.2	0.04	ガラス	黄	
4-91	4号古墳　玄室	小玉	3.0	4.4～5.1	1.3～1.5	0.08	ガラス	淡緑青	
4-92	4号古墳　玄室	小玉	3.8	4.8～5.2	1.4～1.5	0.12	ガラス	淡緑青	
4-93	4号古墳　玄室	小玉	2.5	3.8～3.9	1.0～1.1	0.05	ガラス	青	
4-94	4号古墳　玄室	小玉	2.6	3.2～3.9	0.7～0.8	0.05	ガラス	淡青	
4-95	4号古墳　玄室	小玉	3.6	3.2～3.5	1.0～1.2	0.06	ガラス	緑	
4-96	4号古墳　玄室	小玉	3.3	4.2～4.6	1.2～1.3	0.07	ガラス	淡青	
4-97	4号古墳　玄室	小玉	2.7	4.3～4.7	1.2～1.5	0.08	ガラス	淡緑青	
4-98	4号古墳　玄室	小玉	3.0	4.2～4.4	1.2～1.8	0.07	ガラス	淡緑	
4-99	4号古墳　玄室	小玉	2.3	3.9～4.0	1.2～1.3	0.05	ガラス	淡青	
4-100	4号古墳　玄室	小玉	2.7	4.3～4.6	1.4～1.6	0.06	ガラス	淡緑	
4-101	4号古墳　玄室	小玉	4.1	3.8～4.0	1.0～1.2	0.08	ガラス	淡青	
4-102	4号古墳　玄室	小玉	3.3	4.6～5.0	1.4～1.5	0.11	ガラス	青	
4-103	4号古墳　玄室	小玉	2.0	3.0～3.2	0.9～1.0	0.03	ガラス	黄	
4-104	4号古墳　玄室	小玉	1.8	3.5～3.7	1.4～1.5	0.03	ガラス	黄	
4-105	4号古墳　玄室	小玉	1.5	2.9～3.4	1.0～1.1	0.02	ガラス	淡暗青	
4-106	4号古墳　玄室	小玉	2.6	3.8～4.2	1.1～1.2	0.06	ガラス	緑	
4-107	4号古墳　玄室	小玉	2.8	3.9～4.1	1.2～1.4	0.05	ガラス	淡青	
4-108	4号古墳　玄室	小玉	2.5	3.8～4.2	0.8～0.9	0.07	ガラス	青	
4-109	4号古墳　玄室	小玉	2.3	3.5～3.6	0.9～1.0	0.04	ガラス	淡暗青	
4-110	4号古墳　玄室	小玉	3.0	4.8～4.9	1.5～1.7	0.09	ガラス	緑	
4-111	4号古墳　玄室	小玉	2.2	4.1～4.5	1.2～1.3	0.06	ガラス	淡暗青	
4-112	4号古墳　玄室	小玉	2.4	4.8～4.9	1.4～1.5	0.08	ガラス	青	
4-113	4号古墳　玄室	小玉	2.8	3.3～3.5	0.9～1.1	0.04	ガラス	緑青	
4-114	4号古墳　玄室	小玉	2.7	3.4～3.5	0.8～0.9	0.04	ガラス	黄	
4-115	4号古墳　玄室	小玉	2.1	3.3～3.5	0.9～1.0	0.03	ガラス	黄	
4-116	4号古墳　玄室	小玉	1.7	3.0～3.2	0.9～1.0	0.02	ガラス	黄	
4-117	4号古墳　玄室	小玉	2.0	3.5～4.0	1.0～1.2	0.03	ガラス	青	
4-118	4号古墳　石室北側	小玉	3.3	4.7～4.9	1.3～1.4	0.11	ガラス	青	
4-119	4号古墳　石室北側	小玉	2.5	3.9～4.0	1.3～1.4	0.06	ガラス	淡緑	
4-120	4号古墳　石室北側	小玉	2.4	4.1～4.4	1.4～1.6	0.06	ガラス	淡緑	
4-121	4号古墳　石室内	小玉	2.5	4.0～4.2	1.4～1.5	0.06	ガラス	緑	

⑨石製品

遺物番号	出土位置	種類	長さ（cm）※3	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）※4	材質	色調	備考
4-122	4号古墳　玄室	砥石	7.4	2.8	0.5～0.9	30.34	珪長岩	にぶい黄橙	小口以外の4面使用
6-7	6号古墳　盛土下	石鏃	2.0	1.8	0.2	0.62	珪質凝灰岩	灰	
6-8	6号古墳　調査区内	叩き石	(6.6)	4.8	3.2	(139.50)	溶結凝灰岩	灰	

※1　（　）は，器高が現存値，その他は復元値を示す。
※2　土器の調整は，上から下に記述し，杯蓋は下から上に，横瓶は右から左に記述した。
※3　（　）は，現存値を示す。
※4　大きく欠損する場合のみ，（　）で現存値を示した。

Ⅴ　ま　と　め

長畑山北第１～６号古墳は，広島県三次市吉舎町海田原字長畑山に所在する。何れも小規模な円墳であるが第４号古墳の横穴式石室は吉舎町域で最も古く，在地色の残る木棺墓から横穴式石室が導入される様子がよくわかる貴重な資料である。以下において，調査の成果をもとに本古墳群の特色を整理し，まとめとしたい。

古墳群の概要

日本海に注ぐ江の川支流の馬洗川を北に望む丘陵上に位置し，馬洗川周辺の水田とは約40mの高低差がある。直径5.0～9.8mの６基の円墳で構成され，これらは丘陵に沿って並んでいる。最も低い場所にある古墳の標高は240.6m，最も高い場所にある古墳の標高は246.2mであり，古墳群のなかで5.6mの高低差がある。木棺を埋葬施設とする古墳が４基あり，竪穴式石室と横穴式石室は１基ずつである。各古墳の周溝は，斜面の上側を中心に１／２～２／３程度廻っているが，全周している古墳も１基ある。木棺墓からは須恵器，土師器が，竪穴式石室からは須恵器，土師器，鉄器が出土した。横穴式石室からの出土遺物は多く，須恵器，土師器，鉄器，耳環，玉類，砥石である。これらの遺物は主に玄室の礫や炭化物の上から出土しており，その礫や炭化物の範囲は正方形に近いとも言える。また，玄室の床面下や，玄室と羨道の境付近の床面下から須恵器や土師器がまとまって出土しており，築造時に何らかの祭祀が行われたと思われる。

各古墳の築造時期

第５号古墳の埋葬施設から遺物は出土していないが，ほかの埋葬施設からは須恵器を中心とする比較的多くの遺物が出土しており，次の各型式[(1)]の併行期に相当すると考えられる。

第１号古墳（木棺）	ＴＫ１０　ＴＫ４３
第２号古墳（木棺）	ＴＫ１０
第３号古墳（竪穴式石室）	ＴＫ２０９
第４号古墳（横穴式石室）	ＴＫ１０（床面下から出土）　ＴＫ４３（床面上から出土）
第５号古墳（木棺）	出土遺物なし
第６号古墳（木棺）	ＴＫ１０

これをもとに墳丘や埋葬施設の状況を合わせて考えると，木棺を埋葬施設とする古墳は６世紀中頃を中心とし一部は６世紀後半にかけて，横穴式石室が６世紀中頃から後半にかけて，簡略化した竪穴式石室が６世紀後半に築造されている。木棺から横穴式石室が導入され，最後に簡略化した竪穴式石室という流れである。

ただし，古墳群の中で最も古い遺物と思われるのは，第４号古墳の主に床面下から出土した遺物である。

各古墳の関係と築造順

位置関係からみると第４号古墳が古墳群の中心にあり，ほかの古墳よりやや大きいため中心的な存在である。この第４号古墳の北側に第１号古墳と第２号古墳が，南側に第５号古墳と第６号古墳がある。第３号古墳は，第４号古墳と第２号古墳の間にあり，最後に空いている場所に造られたという可能性がある。

第１号古墳と第２号古墳は，ほぼ同時期ではあるが埋葬施設から出土した遺物からすると，第２号古墳が先に，第１号古墳が後に築造されたと考えられる。両古墳の埋葬施設から出土した遺物の多くはＴＫ１０型式の併行期に相当するが，第１号古墳からはＴＫ４３型式の併行期に相当する遺物が１点ではあるが出土しているためである。ただし，第１号古墳の埋葬施設から出土したＴＫ１０型式の併行期に相当する遺物は第２号古墳のものより全体的にやや古い。立地からしても第１号古墳のほうが比較的平坦で条件の整った場所にあり，第２号古墳はやや下った場所にあるため，第２号古墳が第１号古墳よりも先行して築造されたとすると整合性に欠ける。したがって，第１号古墳に葬られることが決まっていたが，何らかの事情によって先に第２号古墳に葬られたなどの原因が考えられる。何れにせよ，両古墳はあまり時期差なく築造されており，このことからも第１号古墳と第２号古墳には関係の深い人物が埋葬されていたと推測される。

第５号古墳の埋葬施設からの出土遺物はないため築造時期は不明であるが，第６号古墳の埋葬施設から出土した遺物は，第１号古墳の古い時期の遺物と同時期である。

以上のようなことから，木棺を埋葬施設とする古墳はあまり時期差がないものの，第６号古墳が造られた後，第２号古墳が造られ，続いて第１号古墳が造られたと考えられる。立地，墳丘や埋葬施設の状況などを合わせて考えると，第１号古墳と第２号古墳に同じグループや家族が埋葬され，第５号古墳と第６号古墳に同じグループや家族が埋葬されたと推測される。この２つのグループの古墳が造られたあと，横穴式石室を埋葬施設とする第４号古墳や簡略化した竪穴式石室を埋葬施設とする第３号古墳のグループが造られている。

ただし，前述のように最も古いと思われるのは第４号古墳の主に床面下から出土した遺物である。玄室の床面下からは須恵器の杯蓋，杯身と土師器の高杯が，玄室と羨道の境付近の床面下からは須恵器の短頸壺と土師器の椀が，何らかの祭祀を想定できるようにまとまって出土した。これらの遺物は６世紀中頃のものと考えられるが，床面上から出土した副葬品は６世紀中頃から後半にかけての時期のものである。このような第４号古墳の遺物出土状況，古墳群の中心に位置する配置などを考えれば，予め第４号古墳を中心とした古墳群の構想があったのかどうか考慮する必要性もある。

地域で最も古い横穴式石室

第４号古墳の築造時期は，前述のように６世紀中頃から後半にかけてである。攪乱によって天井石と奥壁がない状態であり石室の全容は明らかではないが，墳丘の中央で南北方向（N-13°-W）に構築され，北に開口する無袖式である。長さは，残存する基底石で測って東側壁で2.78m，

西側壁で3.73m，幅は，石室奥壁部で1.21m，石室中央で0.98m，石室入口で閉塞石から推定し0.90mである。基底石にはやや大きめの丸みをもった石材が主に横長に使用されており，この上には小振りの丸みをもった石材を持送り気味に小口積みや横積みされている。床面は平坦であり，閉塞石に接して軋み石が見られる。また西側壁には，玄室と羨道の区画を意識した立石が見られる。石室内からは須恵器，土師器，鉄器，耳環，玉類（丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉），砥石が出土しているが，前述したように多くが奥壁前の礫や炭化物の上からであり，この礫や炭化物の範囲はやや正方形に近い。

吉舎町域に横穴式石室を埋葬施設とする同時期の古墳は現在のところ確認されていないが，三次市粟屋町の若屋南古墳（若屋第９号古墳[2]），少し離れるが庄原市東城町の犬塚第１号古墳[3]，福山市駅家町の山の神古墳[4]などは，何れも６世紀の中頃に位置づけられている。また，６世紀後半でも比較的早い時期に横穴式石室が取り入れた古墳として，三次市西酒屋町の久々原第10号古墳[5]などがある。

若屋南古墳は全長22mの前方後円墳であり，後円部にある石室は両袖式で，長さ3.3m，幅２m，高さ２mの長方形の玄室に，幅１mの狭い羨道がついている。出土遺物は，須恵器，玉類，金銅製金具などである。犬塚第１号古墳は直径11mの円墳で，片袖式の石室は全長3.6mである。玄室の長さは2.3m，幅は奥壁で1.9m，袖部で1.4mとなっており，玄室の平面形は正方形に近く，持送りの著しい壁面構成である。羨道の長さは袖のある西側で1.4m，幅は0.6mと狭く短い。石室内から須恵器，鉄器，耳環，玉類などが出土している。山の神古墳は前方後円墳とする説もあるが直径12mの円墳と考えられ，片袖式の石室は全長6.35mである。玄室の長さは4.1m，幅は2.9m，羨道の長さは2.25m，幅は1.26mで，玄室の側壁を持送ってアーチ状に近い天井部を構成しており，須恵器や金銀製馬具などが出土している。

これらの古墳と第４号古墳の共通点はあまり見出せないが，礫の範囲が正方形に近いことは犬塚第１号古墳の玄室の古い様相ともやや似ており，木棺墓から横穴式石室が導入される様子を犬塚古墳群内でも窺えることは共通している。また，これらの古墳が分布する地域では，先行する横穴式石室は現在のところ存在しておらず，当地域でもそれは同様である。

久々原第10号古墳は直径8.5mの円墳で，北に開口する無袖式の石室からは須恵器，鉄器が出土した。石室の全長は3.3mであり，玄室の長さは2.7m，幅は0.7～1.0m，高さ1.4mとなっている。両側壁には門柱状にたてられた立石が見られるが，石室内側に突出しない構造である。第４号古墳の西側壁にも壁面に納まる立石が見られるが，若屋南古墳のような両袖式の横穴式石室，犬塚第１号古墳のような片袖式の横穴式石室と同様に，玄室と羨道を区別する意識を受け継ぐものである。

以上のように，現状としては三次盆地に最初に横穴式石室が導入されたのは若屋南古墳であり，６世紀中頃のことである。その後，久々原第10号古墳などが築造されているが，出土遺物からすると第４号古墳は久々原第10号古墳と同時期か，やや先立って築造された可能性があり，三次盆地やその周辺における横穴式石室の導入時期や系譜を考える上で重要な古墳と言える。

横穴式石室の地域性

これまでに吉舎町内には353基の古墳[6]が確認されており，本古墳群の６基を加えると359基になる。その中で埋葬施設に横穴式石室を導入していることが確認されている古墳は，現在のところわずか22基であり，全体に占める割合は6.1％である。これを本古墳群近くの海田原・矢井・敷地地区でみれば，210基のうち横穴式石室が導入されているのは５基であり，割合も2.4％と低くなる。このように，従来から横穴式石室が少ない地域として知られてきたが，今回の調査結果からするとこれを見直す必要もある。

この地域の土は水分を含むと流動的になりやすく，第４号古墳の横穴式石室は開口部も含めて完全に土で埋まっている状態であったため，調査が始まる前までは竪穴式石室あるいは箱式石棺と考えられていた。平成20年度に調査が行われた同一丘陵上の長畑山古墳[7]も同様であり，まだ発見されていない横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が多く存在する可能性を秘めている。

また，長畑山古墳では玄室の奥壁側で人骨片が密集した状態で出土し，敷石を利用して埋葬を行う横穴式石室の再利用が確認された。第４号古墳でも石室埋土の上層から炭化物や８世紀代の須恵器が見つかっており，この地域では横穴式石室の再利用が頻繁に行われていた可能性がある。

祭祀的な行為

第２号古墳の盛土からは，摘鎌，滑石製小玉８点，土玉13点が比較的まとまって出土している。また，第４号古墳の玄室の床面下で，掘方底に掘られた小穴から須恵器杯蓋２点，杯身３点，土師器高杯３点，計８点の土器がまとまって出土し，玄室と羨道の境付近の床面下からも，土師器椀の中に須恵器の短頸壺が入った状態で出土した。

このように今回の調査で確認した祭祀的な行為は，閉塞石前の墓道から杯蓋や杯身が重ねられた状態で出土した庄原市口和町の金田第２号古墳[8]に見られるような墓前祭祀ではなく，築造途中に行われたものと考えられる。なお，金田第２号古墳は６世紀末から７世紀初頭の築造であり，墓前祭祀とされる県内の数例の出土例は，何れも後期後半以降のものである。

築造途中で遺物を意図的に配置した古墳としては，庄原市口和町の曲第２号古墳[9]，三次市南畠敷町の緑岩古墳[10]，東に約1.7km離れた矢井の燎東古墳[11]，前述の同一丘陵上にある長畑山古墳などがある。ただし，曲第２号古墳と緑岩古墳は何れも周溝内からの出土であり，曲第２号古墳は５世紀後半から末の築造，緑岩古墳は６世紀初頭の築造である。燎東古墳は６世紀前半の築造とみられる直径８ｍの円墳で，埋葬施設は並列する木棺２基と墳裾部の石蓋土坑１基である。出土遺物は須恵器の杯蓋，杯身，提瓶，鉄刀，刀子などであるが，木棺から少し離れて須恵器の杯蓋，杯身が盛土からまとまって出土している。長畑山古墳は６世紀末から７世紀中頃の築造とされる直径12mの円墳で，南に開口する石室の長さは６ｍ，幅は0.8～1.2mである。石室内から須恵器，土師器，鉄器，耳環，管玉，土玉，ガラス小玉などが出土しているが，盛土内で土師器の甕の北側に須恵器の平瓶，杯身を並べている。この平瓶は製作途中で踰から作り替えられた特殊なもの

であり，底部は外して杯身の西側に置かれていた。また盛土内には須恵器の高杯に土師器の椀を載せ，須恵器の杯蓋や杯身を円形に配置した場所もあり，土器群周辺で須恵器の壺，提瓶，鉄鏃が散在している。

以上のように，第２号古墳や第４号古墳の築造時期の前後でも近辺の古墳で築造途中の祭祀的な行為が見られることから，これは時期的な変化ではなく集団あるいは地域による所以とも考えられるが，調査例が少ないため定かでない。

また，鉄鐸が第４号古墳の石室中央の床面近くで出土し，一部は東側壁の間から見つかった。中空の円錐形をしており，身部長3.6cm，開口部径1.6cmである。ほかに県内では，東広島市黒瀬町の岩幕山山麓遺跡[12]から出土しているが，用途不明の鉄器として「円錐形で，現存長5.5cm，厚さ0.1cmで，中空になっている。」と報告されている。これは南に開口する６世紀後半の横穴式石室に伴うものと推定されるが，調査時に古墳は遺存していなかった。県内で鉄鐸の出土が少ない要因としては，地域性ではなく調査者の認識によるところが大きいと考えられ，今後の資料増加を期待したい。

なお，ＴＫ216型式の前後期に出現し，祭祀に関わるものと認識される鉄鐸であるが，その所持や副葬の背景については渡来系鍛冶工人との関係が指摘されることも多い[13]。

被葬者の性格など

第４号古墳から出土した鉄器では，多くの鉄鏃や剣などが見られるが馬具はないため，「武器は持っているが，馬までは持っていない人物」を想定することができる。また，鉄鐸の出土によって前述のように，「渡来系」あるいは「鉄生産」との関わりを考慮する必要もある。伊藤実氏は，吉舎町敷地の梅の木古墳から出土した小型蓋付椀や蓋付短頸壺などを渡来系の須恵器ではないかと指摘している[14]。この古墳の横穴式石室からは６世紀末から７世紀中頃までの須恵器が出土しているが，その中で渡来系とする須恵器は，断面の色調が暗茶褐色（セピア色）で形態や細部のつくりも一見して異なっている。また，山田繁樹氏は，馬洗川中流域の古墳の被葬者・集団の生産基盤が馬洗川両岸の平野部や谷あいの平野部だけとは考えにくいため，長畑山古墳の被葬者について「道ヶ曽根遺跡・見尾西・東遺跡・白ヶ迫製鉄遺跡が同一の流域であることから，本古墳の被葬者は鉄の生産に関わりを持っていた可能性がある[15]。」と述べている。これらに加えて，鉄鐸が出土したことは，第４号古墳の被葬者が渡来系の鍛冶工人と何らかの関係があったかどうか，考える材料になったと言える。

南に開口する横穴式石室が多いのに対して北に開口する点では，眼下に広がる集落を意識して築造されたことを示している可能性もある。これは立地からも窺え，広い地域ではなく近くの集落と関係が深い人物が埋葬されたと推測するのが適当と思われる。

なお，第４号古墳の遺体を安置した箇所や追葬回数について出土遺物や床面の状況などから検討してみたが，明らかにすることは難しかった。ただし，玄室西半に片寄って出土している副葬品は当時の様子をよく残しており，その反対側の玄室東半に１つの安置場所を想定することはで

きる。また，玄室西半の土器の上に２点の耳環が出土し，さらにその上に剣などが出土している状況から，これは追葬に伴う可能性もある。

ほかの古墳も立地などから，近くの集落と関係が深い人物が埋葬されたと推測されるが，前述のように位置関係などから，第４号古墳の被葬者を中心とする密接な関係も想定される。

註

（１）須恵器の年代については，田辺昭三『須恵器大成』角川書店を使用して検討した。また，白石太一郎ほか『年代のものさしー陶邑の須恵器ー』大阪府立近つ飛鳥博物館を参考にした。

（２）潮見　浩監修『広島県三次市・双三郡史料総覧』第５編　広島県三次市・双三郡史料総覧刊行会　1974年

（３）犬塚古墳群発掘調査団『犬塚古墳群発掘調査報告書』1980年

（４）井上　弘「山の神前方後円墳」『古代吉備品治国の古墳について』広島県立府中高等学校生徒会地歴部　1967年

（５）広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）』1979年

（６）広島県教育委員会ホームページ『広島県遺跡地図』により，古墳の内容をまとめた。
（http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/list526-2231.html）

（７）公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室「長畑山古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（40）』2014年

（８）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金田第２号古墳発掘調査報告書』1999年

（９）財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室「曲第２～５号古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）』2011年

（10）広島県教育委員会『緑岩古墳ー三次地区工業団地第２期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査ー』1983年

（11）吉舎町教育委員会『燎東古墳』1995年

（12）広島県教育委員会「岩幕山山麓遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』1973年

（13）亀田修一「鉄と渡来人ー古墳時代の吉備を対象としてー」『福岡大学総合研究所報第240号（総合科学編第３号）』福岡大学総合研究所　2000年

村上恭通「古墳時代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像ー中期を中心としてー」『考古論集ー河瀬正利先生退官記念論文集ー』河瀬正利先生退官記念事業会　2004年

（14）伊藤　実「ひろしまの渡来系遺物ー承前ー」『広島の考古学と文化財保護ー松下正司先生喜寿記念論集ー』『広島の考古学と文化財保護』刊行会　2014年

（15）註（７）と同じ。

参考文献

桑原隆博「原始・古代編」『吉舎町史（上巻）』吉舎町史編集委員会　1988年

桑原隆博「原始・古代編　Ⅳ古墳時代」『三次市史Ⅰ』三次市史編集委員会　2004年

行田裕美「鉄鐸について」『西吉田北遺跡』（津山市埋蔵文化財調査報告第58集）津山市教育委員会　1997年

早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要　第９号』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター　2008年

a　空中写真（南から）

b　空中写真（北西から）

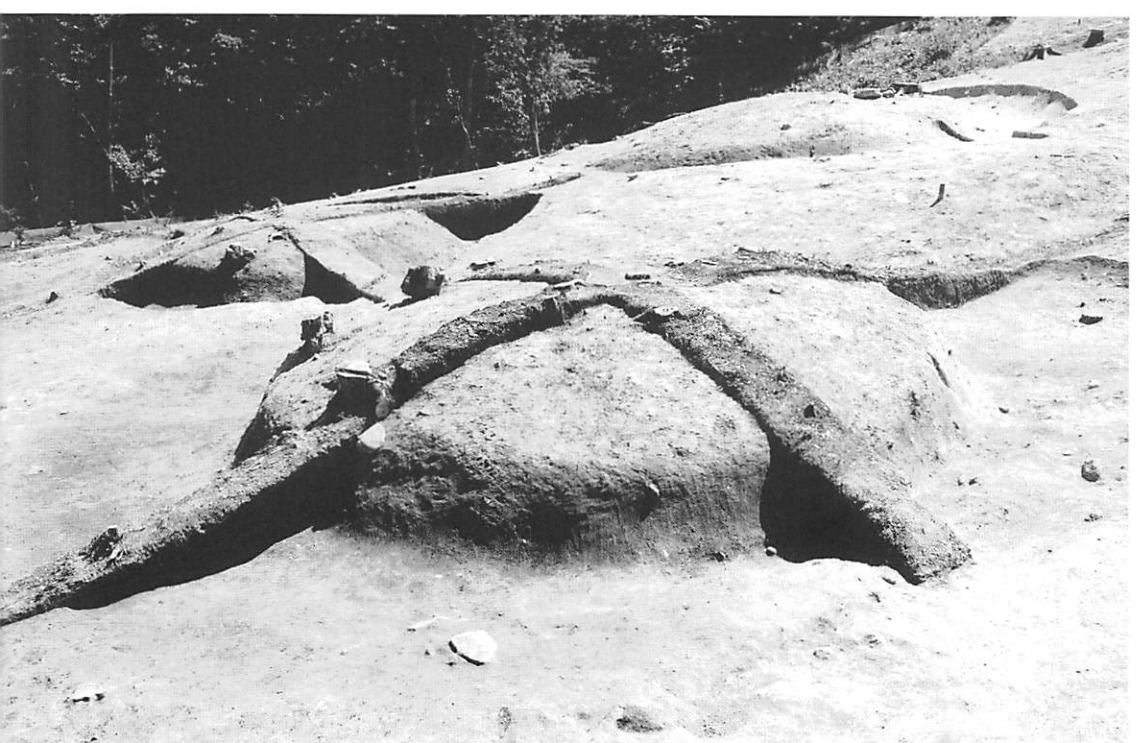
c　調査前（南西から）

図版2

長畑山北第１号古墳

a　調査前（南西から）

b　土層断面（西から）



c　土層断面（北から）

長畑山北第１号古墳

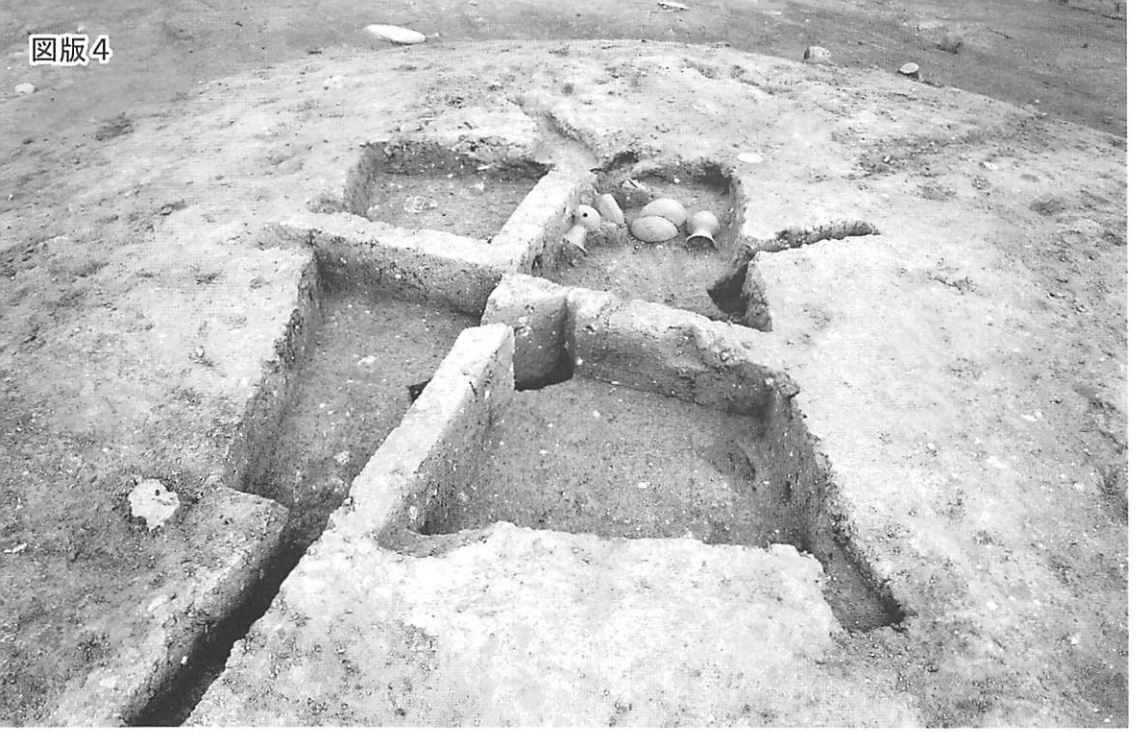
a　墳丘全景（北西から）

b　墳丘盛土断面
（北から）

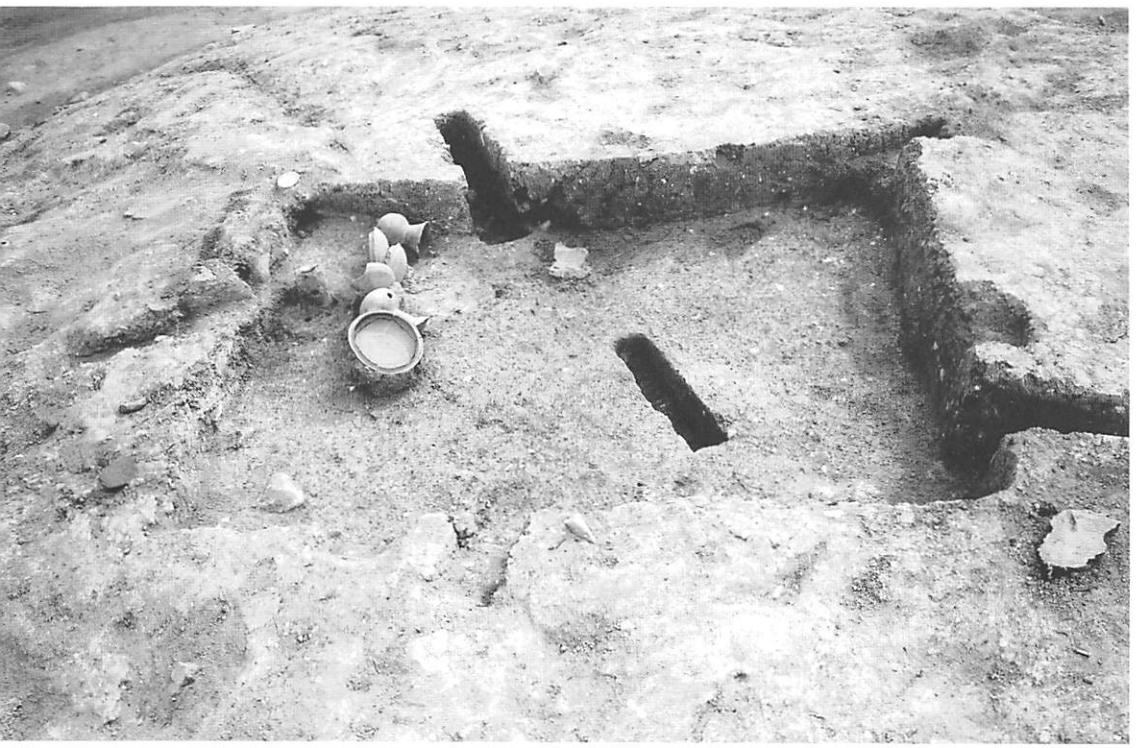
c　墳丘盛土断面
（南から）

図版4

長畑山北第１号古墳



a　埋葬施設土層断面
（南西から）



b　遺物出土状況
（北西から）

c　遺物出土状況
（西から）

a　調査前（北東から）

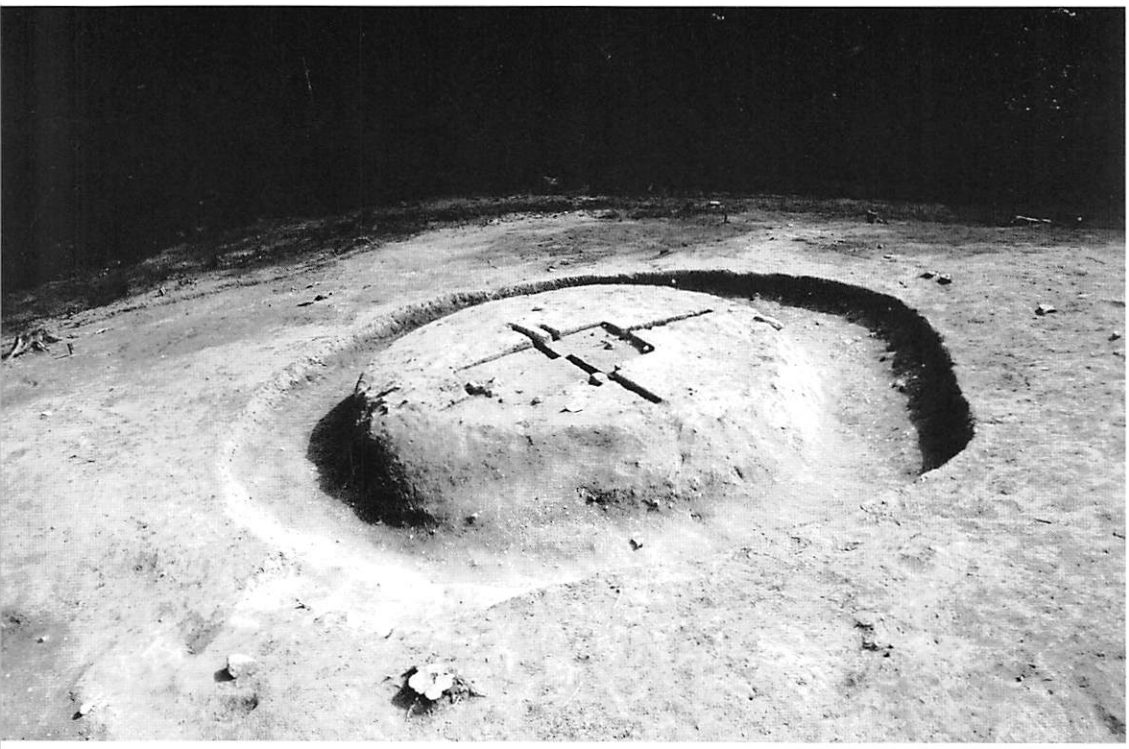
b　土層断面（北東から）

c　土層断面（南東から）

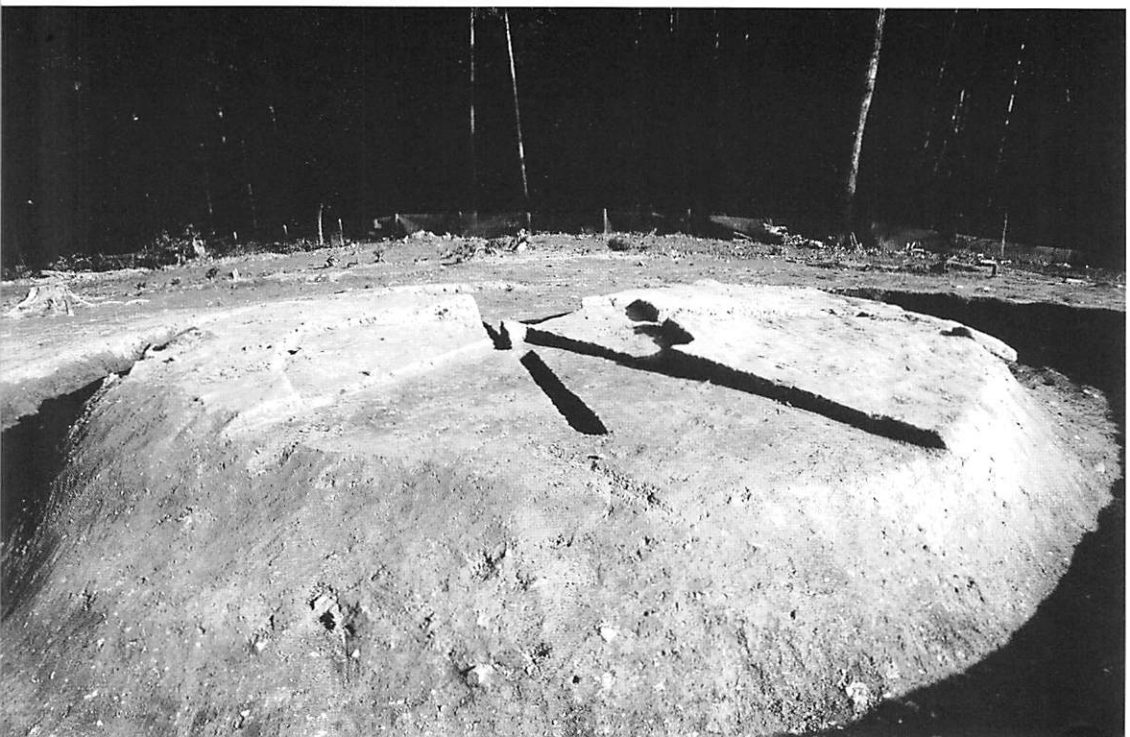
図版6

長畑山北第２号古墳

a　墳丘全景（南東から）

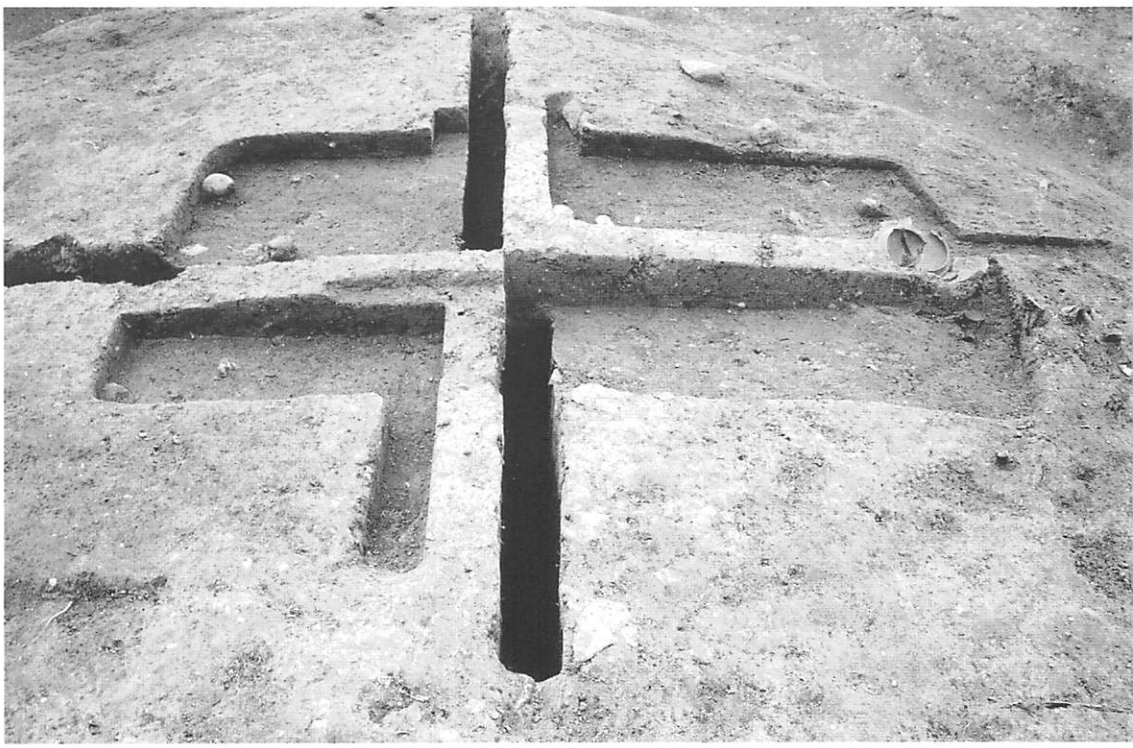


b　墳丘全景（北西から）



c　墳丘盛土断面
（西から）

a　埋葬施設土層断面
（南から）



b　埋葬施設土層断面
（東から）

c　遺物出土状況
（東から）

図版8

長畑山北第３号古墳

a　調査前（北から）

b　土層断面（北西から）

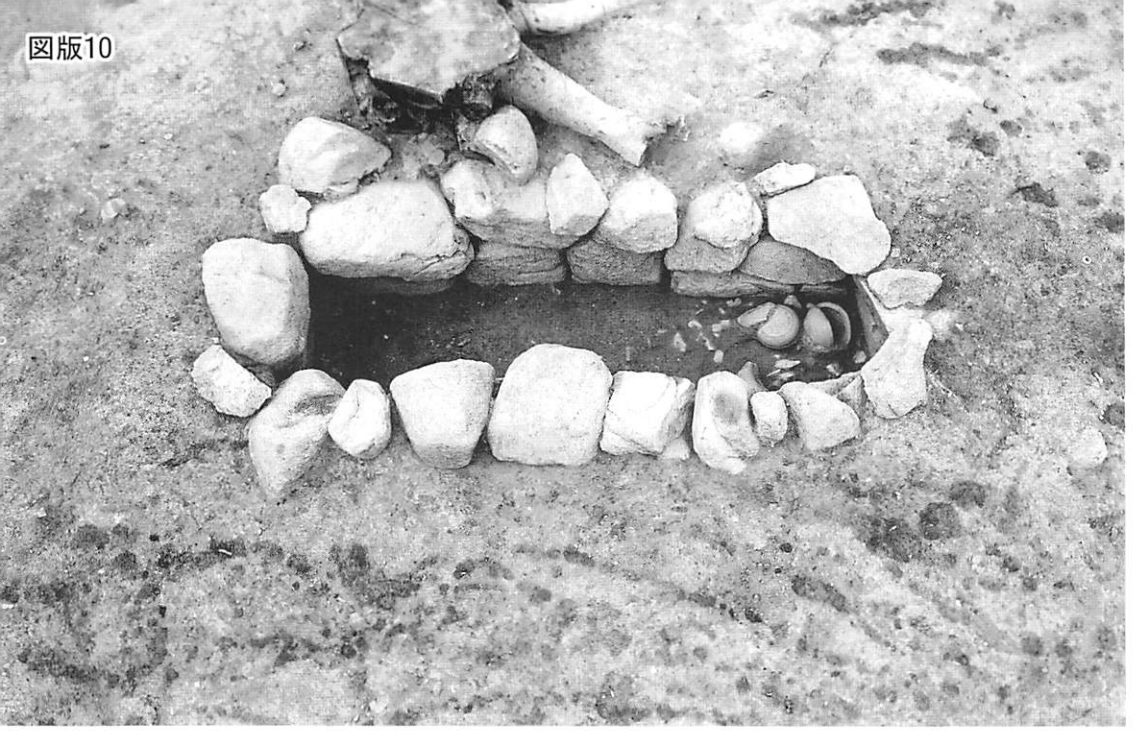
c　土層断面（南から）

長畑山北第３号古墳

a　墳丘全景（北から）

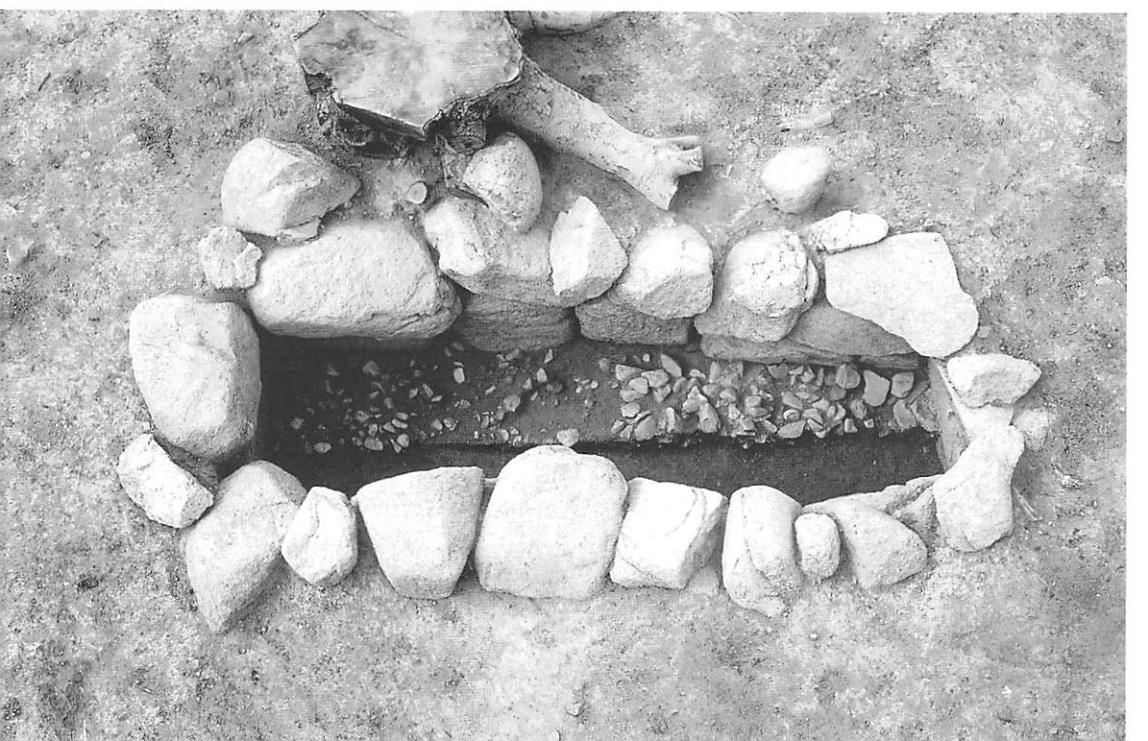
b　墳丘盛土断面
（北東から）

c　墳丘盛土断面
（南西から）



a　遺物出土状況
（東から）

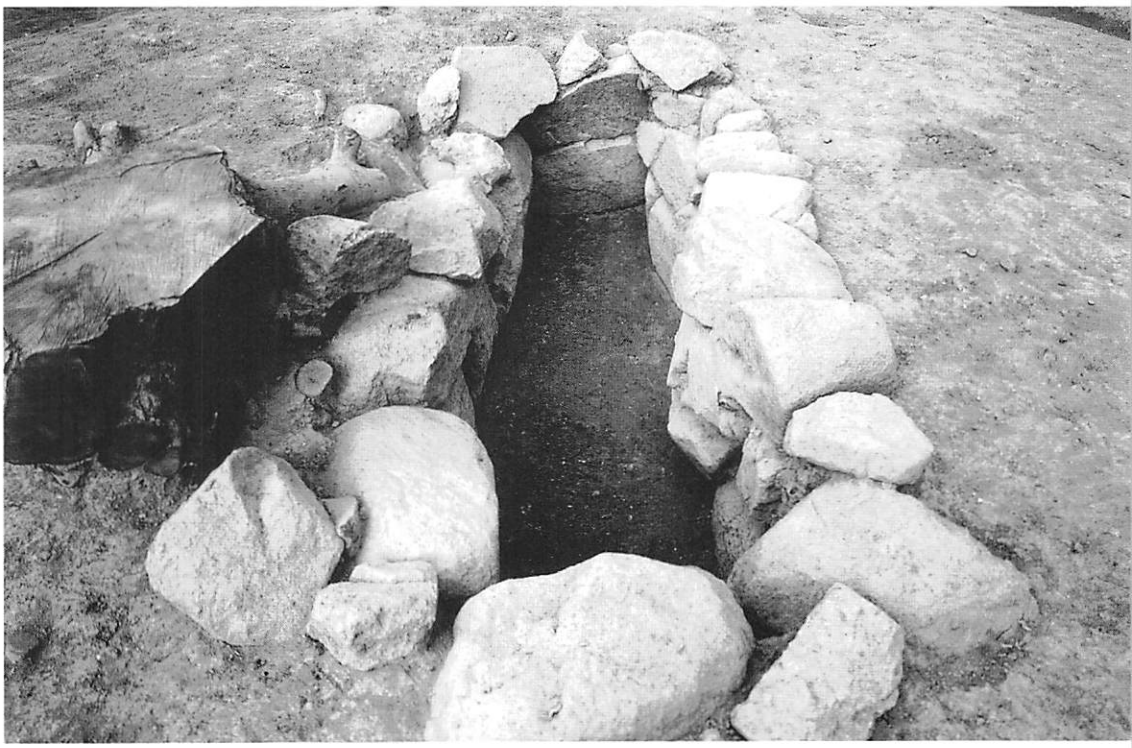
b　礫床検出状況
（北から）



c　礫床半裁状況
（東から）

長畑山北第３号古墳

a　東側壁（西から）



b　北小口（南から）

(左)
c　基底石（北から）

(右)
d　掘方（北から）

図版12

長畑山北第４号古墳

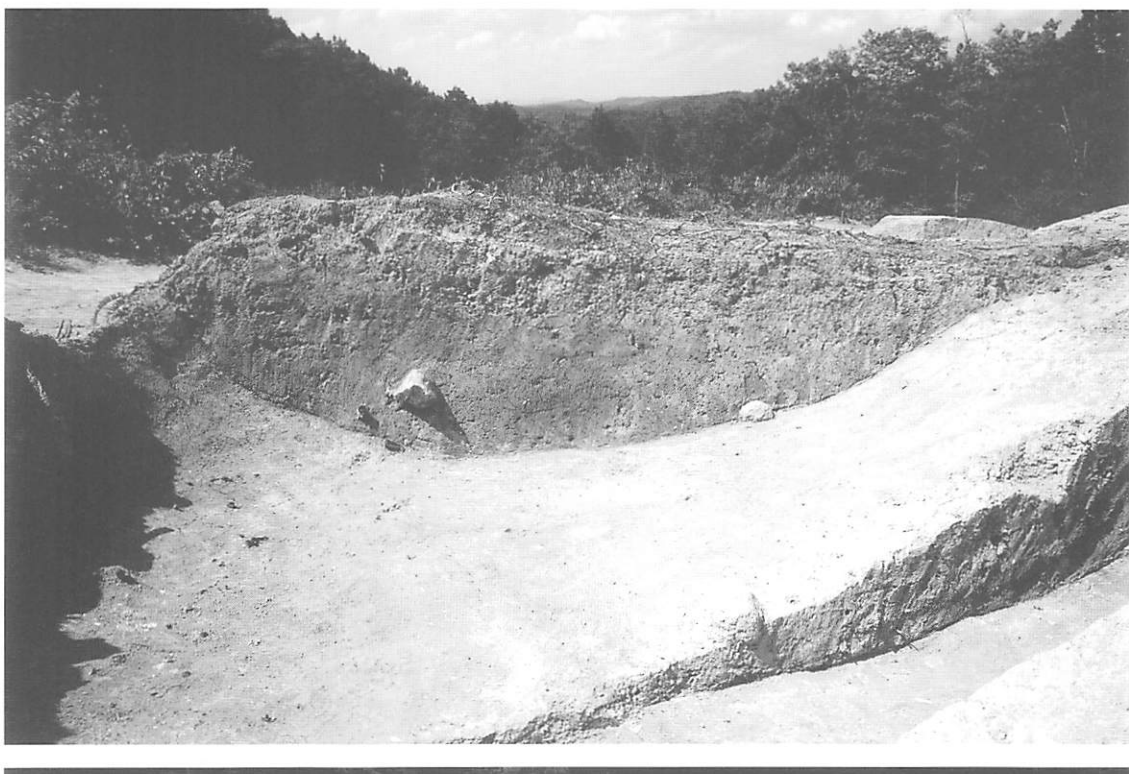
a　調査前（北から）

b　土層断面（北西から）

c　墳丘全景（北から）

長畑山北第４号古墳

a　墳丘盛土断面
（南から）



b　周溝西側土層断面
（南から）

c　周溝北側土層断面
（西から）

図版14

長畑山北第４号古墳

a　遺物出土状況
（北から）

b　遺物出土状況
（東から）

c　遺物出土状況
（北から）

a　遺物出土状況
（東から）

b　遺物出土状況
（北から）

c　閉塞石（東から）

図版16

長畑山北第４号古墳

a　東側壁（西から）

b　西側壁（東から）

c　基底石（北から）

a　調査前（南西から）

b　土層断面（南から）

c　土層断面（北西から）

図版18

長畑山北第５号古墳

a　墳丘全景（南西から）

b　墳丘全景（南から）

c　墳丘盛土断面
（北から）

a　埋葬施設土層断面
（北西から）

b　埋葬施設完掘状況
（西から）

c　埋葬施設完掘状況
（南から）

図版20

長畑山北第６号古墳

a　調査前（西から）

b　土層断面（西から）

c　周溝西側土層断面
（南から）

長畑山北第６号古墳

a　墳丘全景（西から）

b　墳丘全景（南東から）

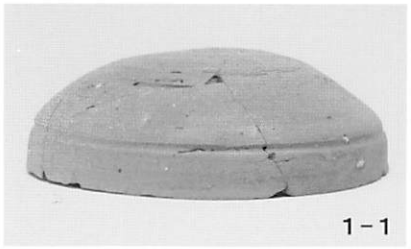
c　墳丘盛土断面
（南から）

長畑山北第６号古墳

a　遺物出土状況
（東から）

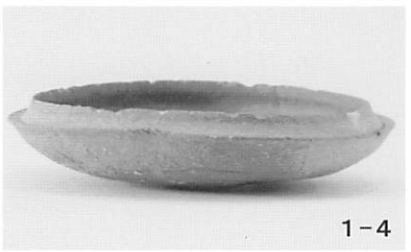
b　遺物出土状況
（東から）

c　遺物出土状況
（北西から）


1-1

1-2

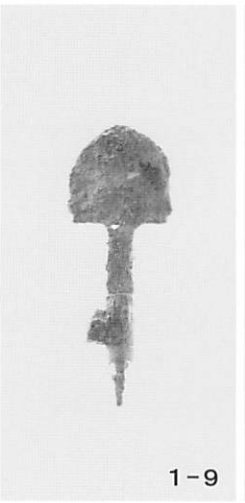
1-3


1-4

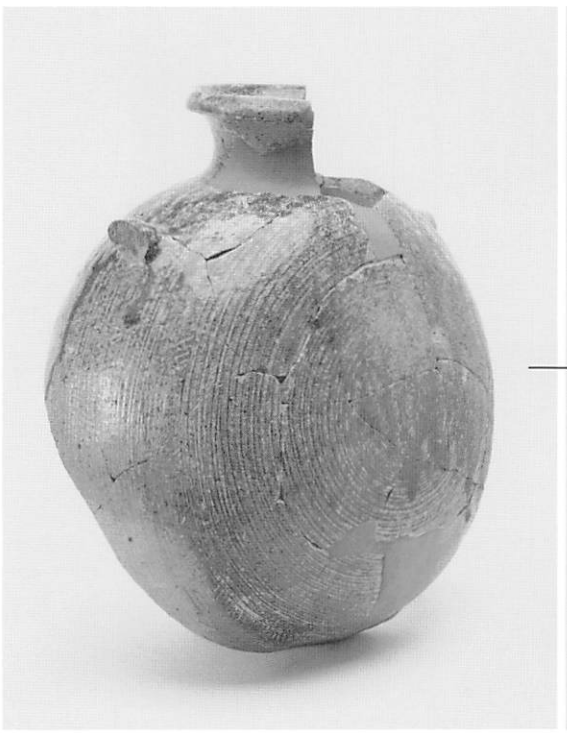
1-6

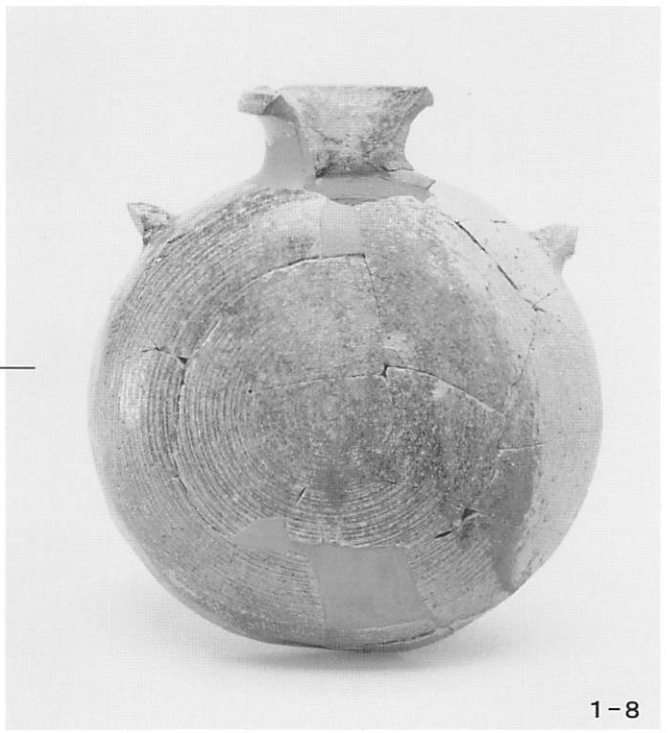
1-7

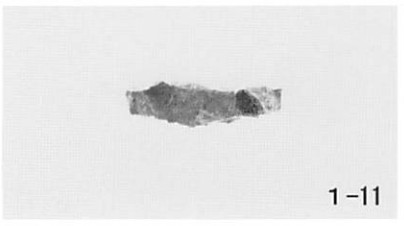
1-5

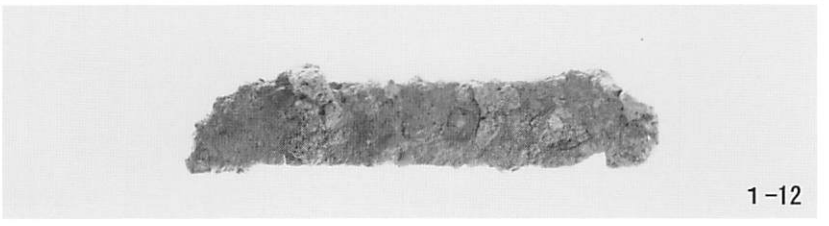

1-9

1-10

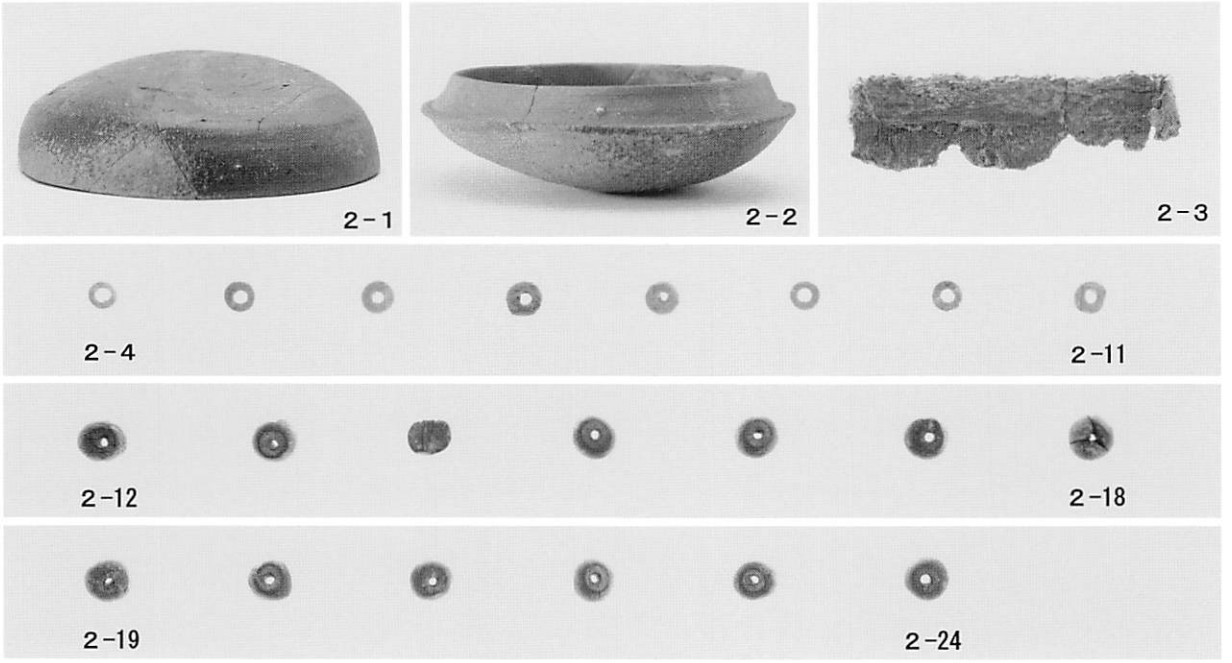



1-8

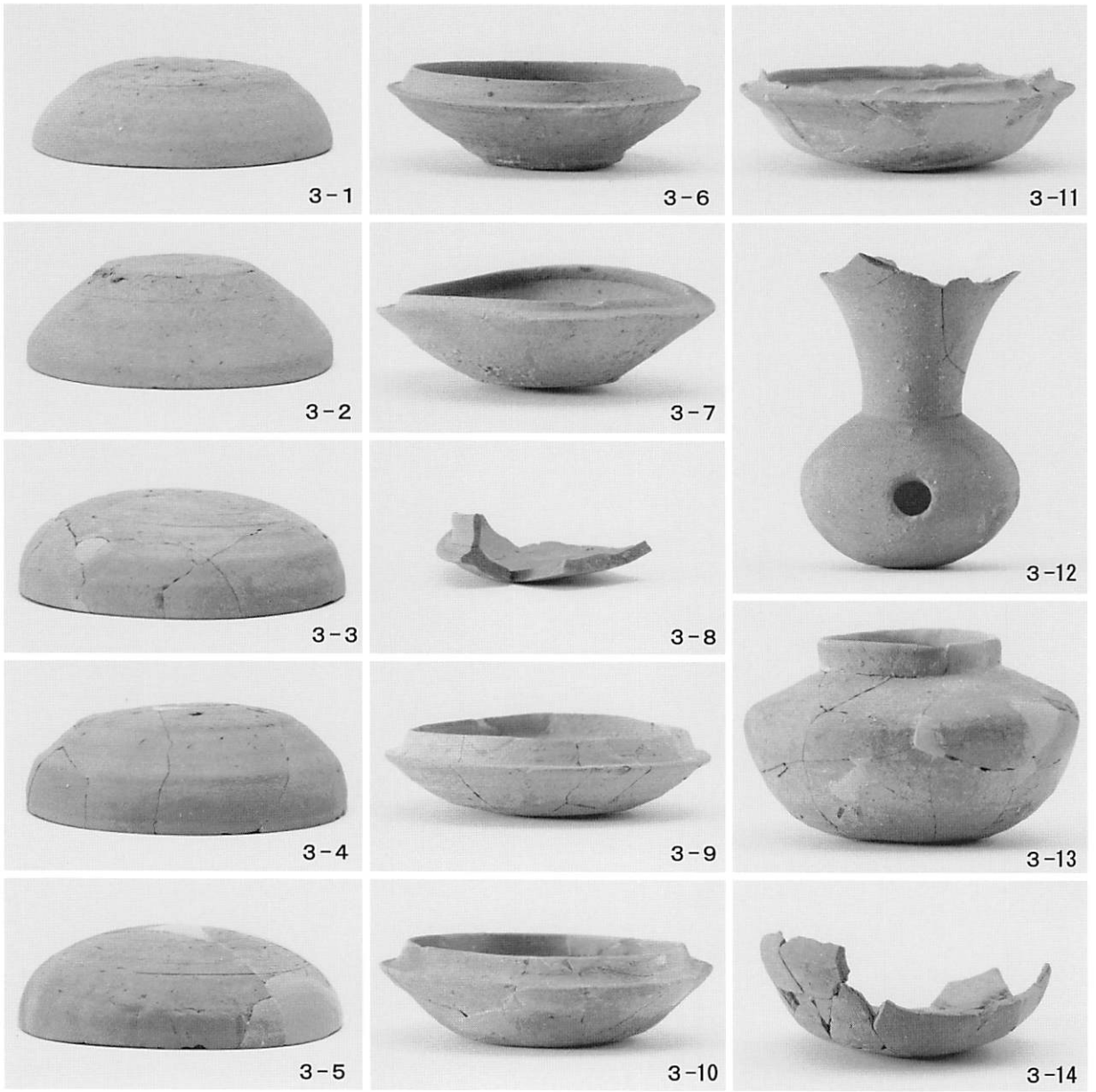

1-11


1-12

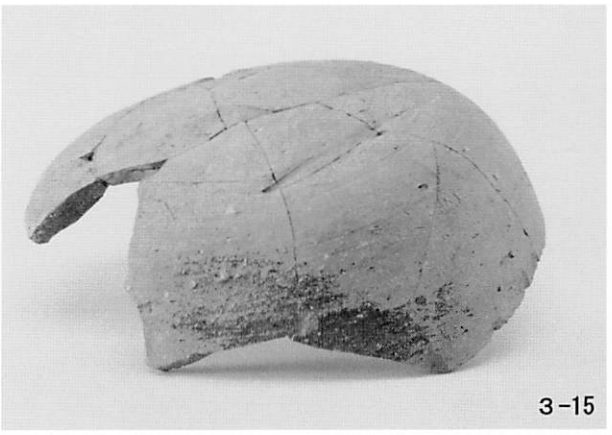
長畑山北第１号古墳　出土遺物（須恵器・鉄器）



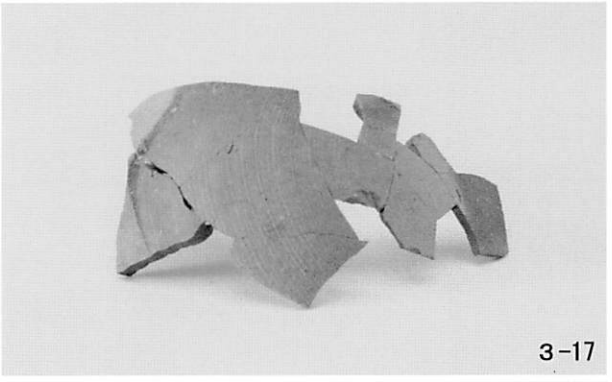
長畑山北第２号古墳　出土遺物（須恵器・鉄器・滑石製小玉・土玉）

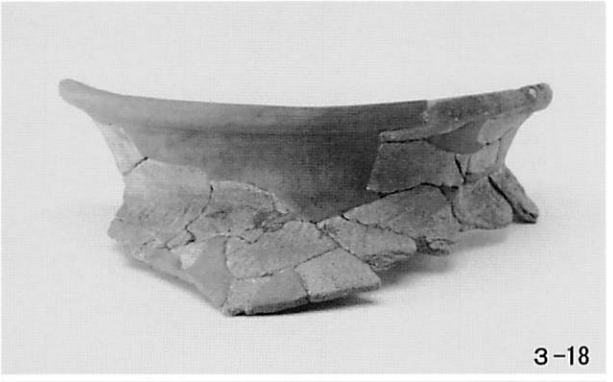


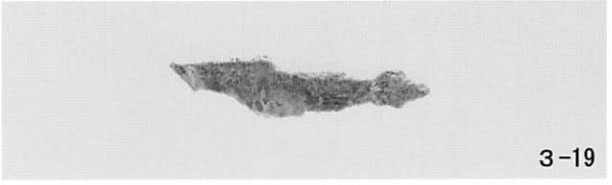
長畑山北第３号古墳　出土遺物　１（須恵器）

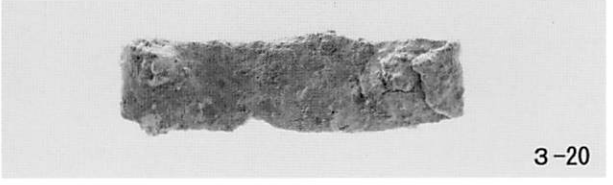

3-15

3-16


3-17


3-18


3-19


3-20

長畑山北第３号古墳　出土遺物　２（須恵器・鉄器）

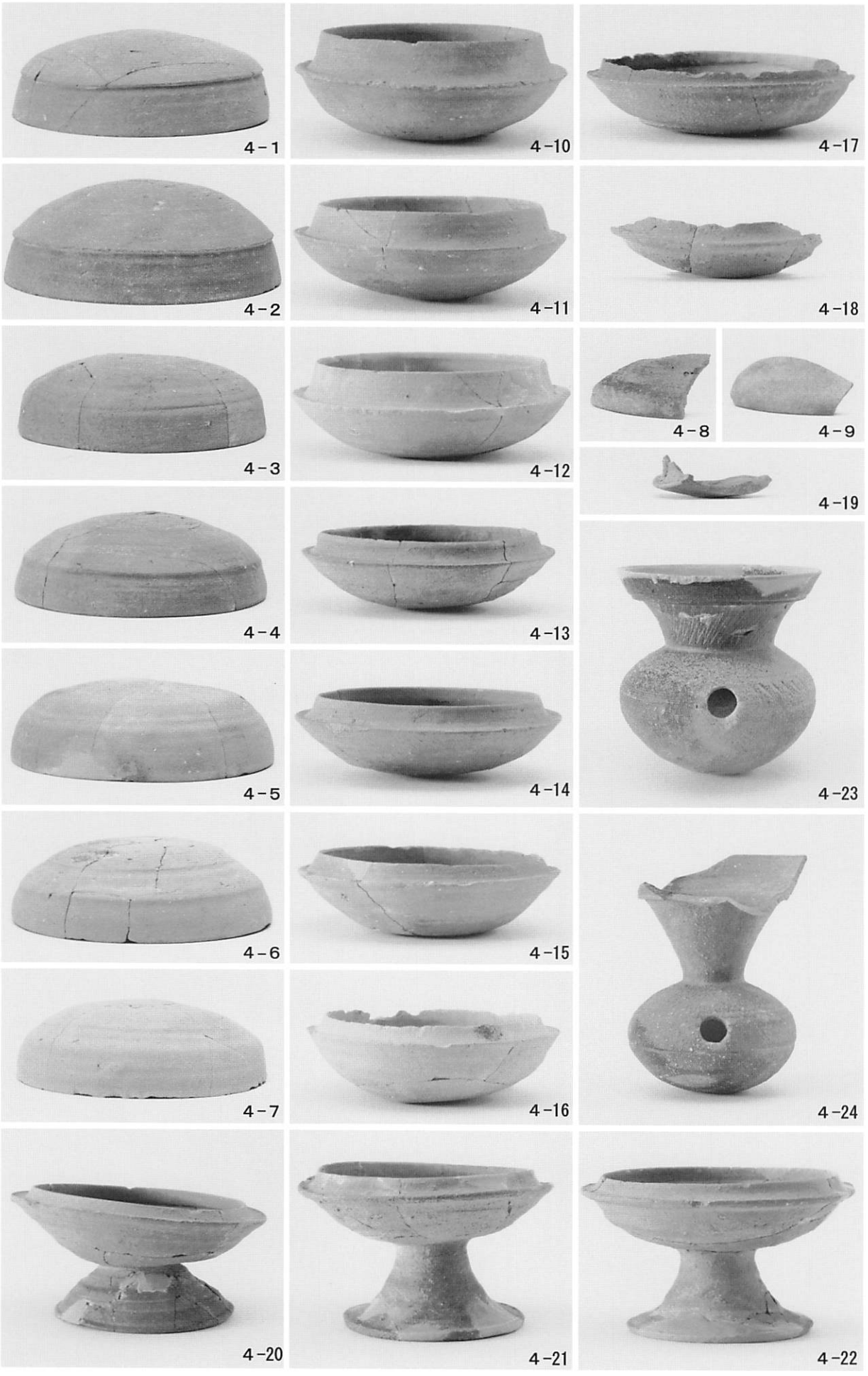
4-30

4-31

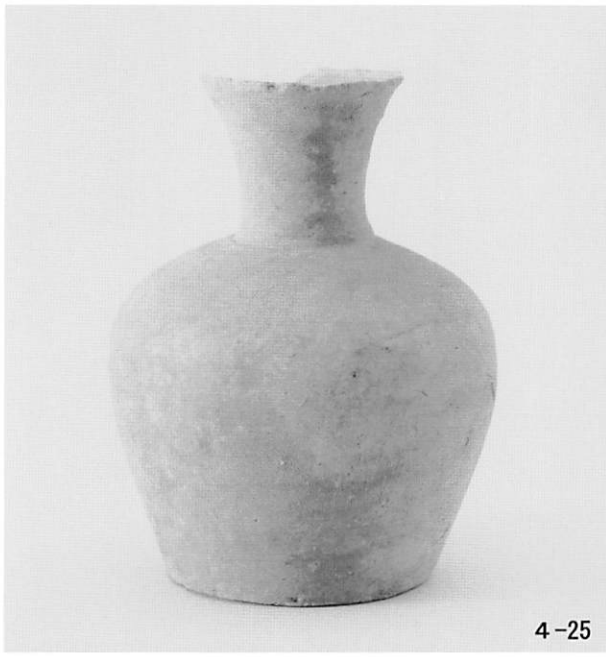
4-32

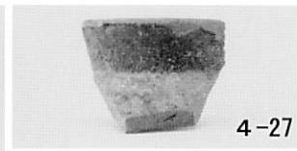
4-33

長畑山北第４号古墳　出土遺物　１（土師器）



長畑山北第４号古墳　出土遺物　２（須恵器）


4-25

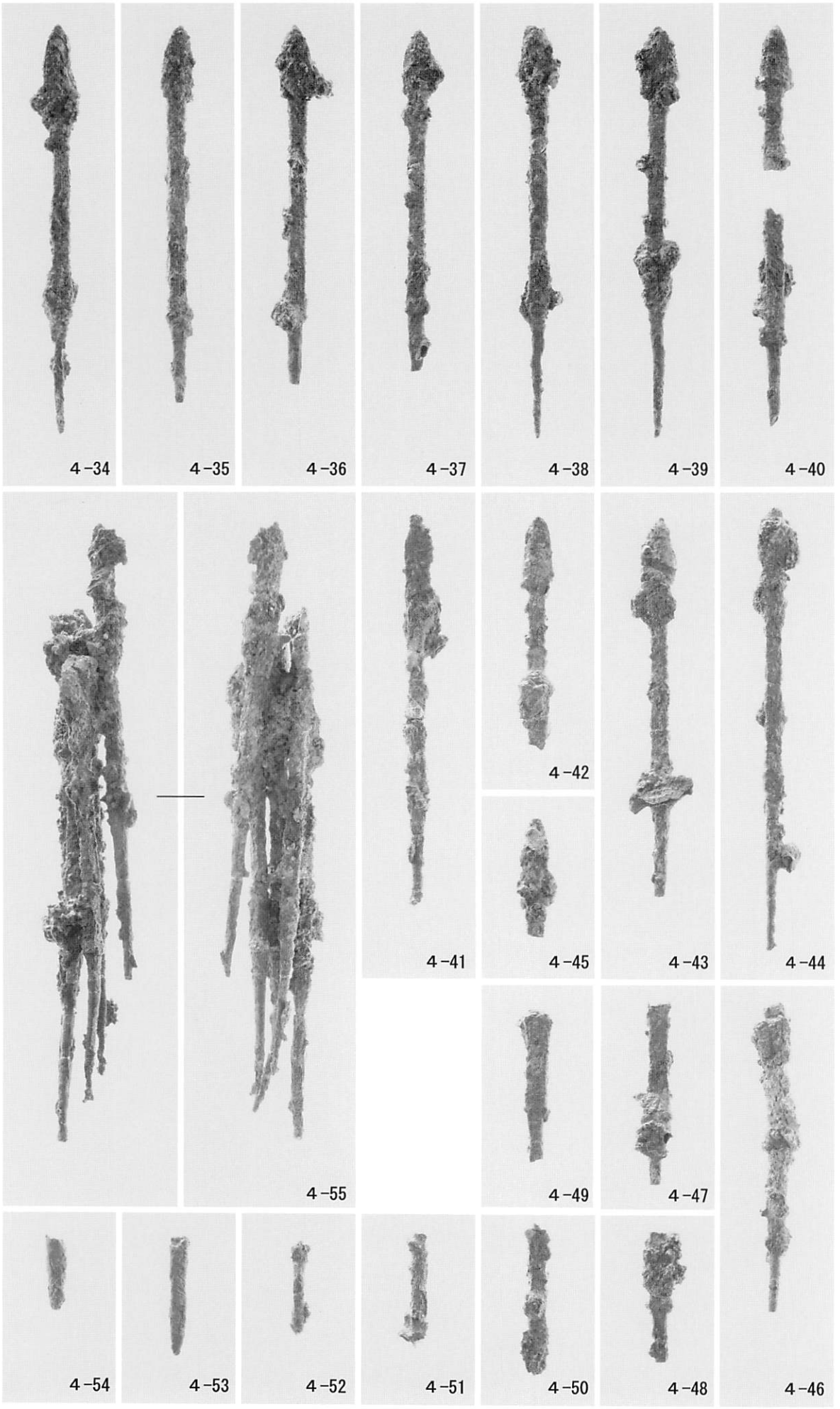

4-27

4-26

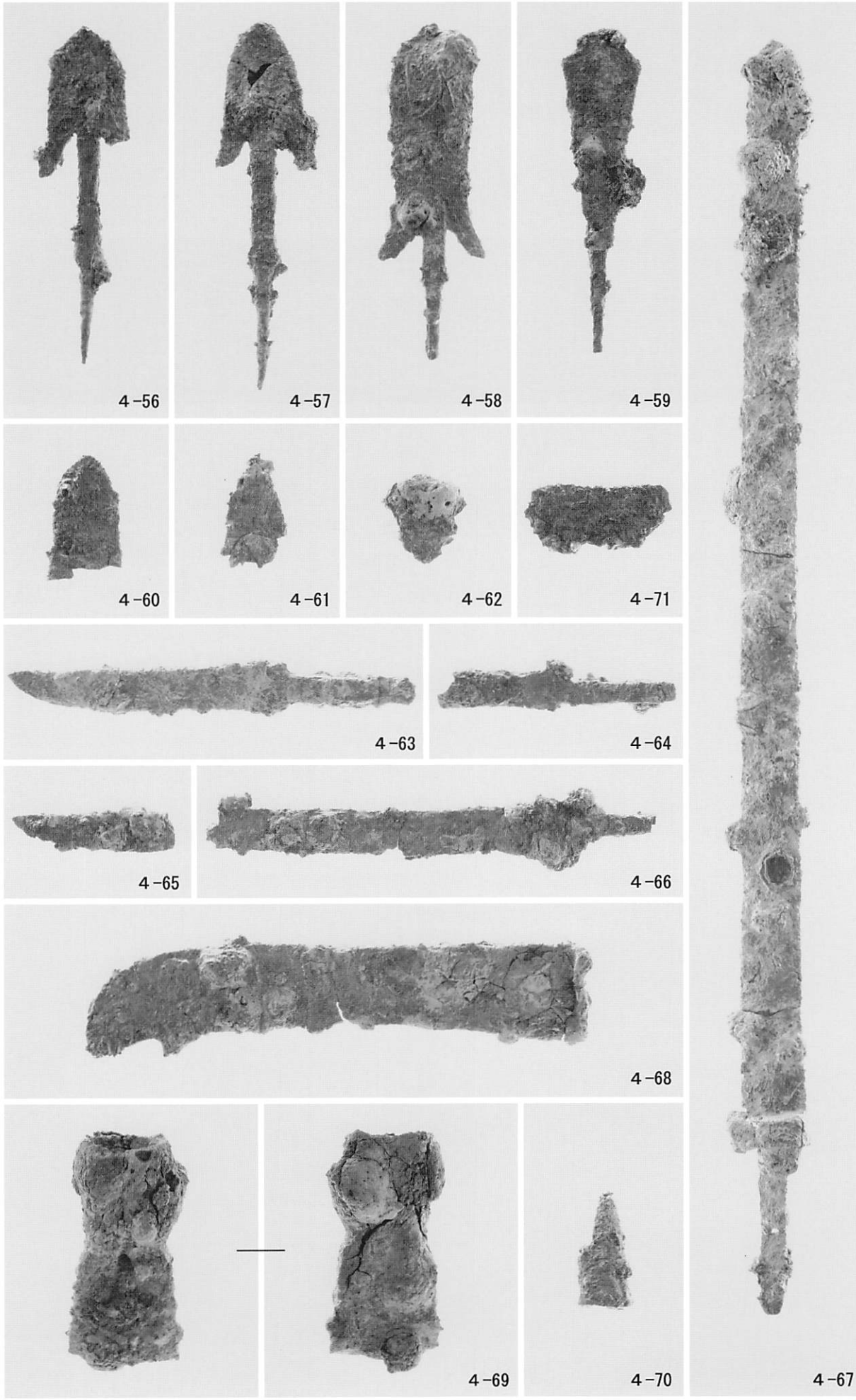
4-28

4-29

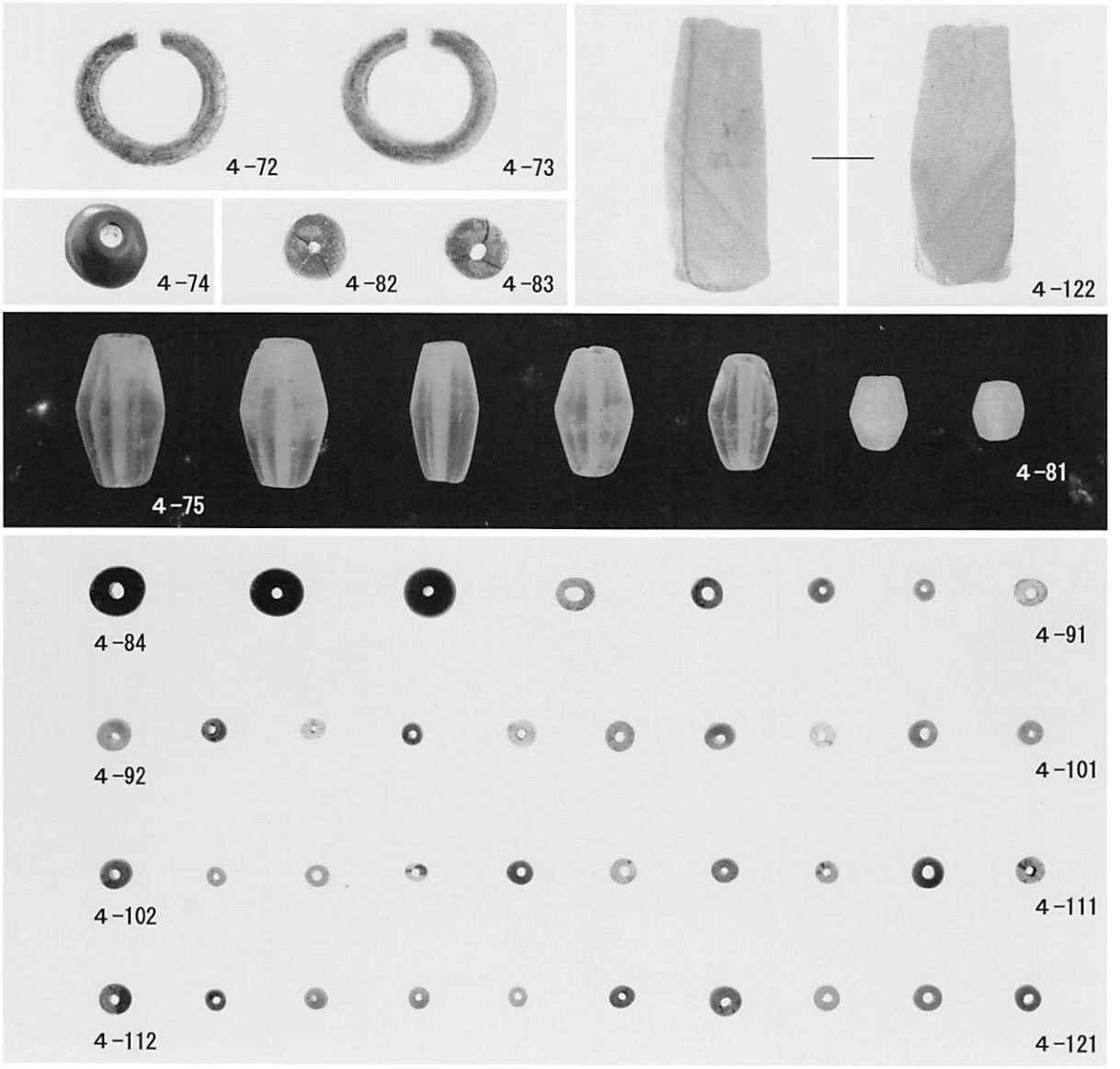
長畑山北第４号古墳　出土遺物　３（須恵器）



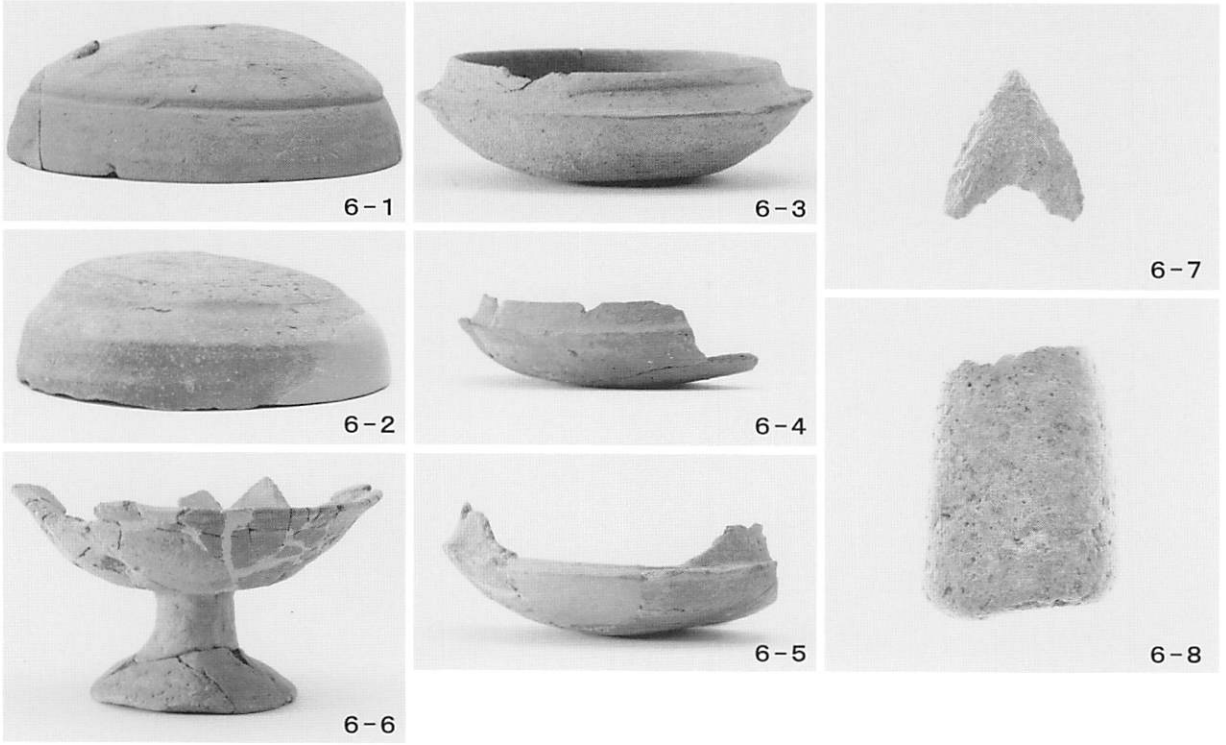
長畑山北第４号古墳　出土遺物　４（鉄器）



長畑山北第４号古墳　出土遺物　５（鉄器）



長畑山北第４号古墳　出土遺物　６（耳環・丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉・砥石）



長畑山北第６号古墳　出土遺物（須恵器・土師器・石鏃・叩き石）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく　41
書　　名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（41）
副 書 名	長畑山北第１～６号古墳
シリーズ名	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第69集
編著者名	新井真吾
編集機関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　ＴＥＬ082－295－5751
発行年月日	西暦2015年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ながはたやまきただい1ごうこふん 長畑山北第１号古墳	ひろしまけんみよしし 広島県三次市 きさちょうかいだはらあざ 吉舎町海田原字 ながはたやま 長畑山	34209	34584-399	34° 44′ 08″	132° 58′ 53″	20090629 ～ 20091222	1,485	記録保存調査
ながはたやまきただい2ごうこふん 長畑山北第２号古墳			34584-400					
ながはたやまきただい3ごうこふん 長畑山北第３号古墳			34584-401					
ながはたやまきただい4ごうこふん 長畑山北第４号古墳			34584-402					
ながはたやまきただい5ごうこふん 長畑山北第５号古墳			34584-403					
ながはたやまきただい6ごうこふん 長畑山北第６号古墳			34584-405					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ながはたやまきただい1ごうこふん 長畑山北第１号古墳	古墳	古墳時代後期	古墳１	須恵器，土師器，鉄器	木棺墓
ながはたやまきただい2ごうこふん 長畑山北第２号古墳	古墳	古墳時代後期	古墳１	須恵器，土師器，鉄器，玉類（滑石製小玉・土玉）	木棺墓
ながはたやまきただい3ごうこふん 長畑山北第３号古墳	古墳	古墳時代後期	古墳１	須恵器，土師器，鉄器	竪穴式石室
ながはたやまきただい4ごうこふん 長畑山北第４号古墳	古墳	古墳時代後期	古墳１	須恵器，土師器，鉄器，耳環，玉類（丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉），砥石	横穴式石室
ながはたやまきただい5ごうこふん 長畑山北第５号古墳	古墳	古墳時代後期	古墳１	須恵器	木棺墓
ながはたやまきただい6ごうこふん 長畑山北第６号古墳	古墳	古墳時代後期	古墳１	須恵器，土師器，石鏃，叩き石	木棺墓

要　　約	長畑山北第１～６号古墳は，江の川支流馬洗川を北に望む丘陵上に位置する。直径5.0～9.8mの円墳で構成され，埋葬施設は第１・２・５・６号古墳が木棺，第３号古墳が竪穴式石室，第４号古墳が横穴式石室である。木棺墓からの出土遺物は須恵器，土師器，竪穴式石室からの出土遺物は須恵器，土師器，鉄器，横穴式石室からの出土遺物は須恵器，土師器，鉄器，耳環，玉類（丸玉・切子玉・土玉・ガラス小玉），砥石である。第２号古墳の盛土から摘鎌，滑石製小玉，土玉が出土しているほか，第４号古墳の床面下から須恵器や土師器がまとまって出土しており，築造時に何らかの祭祀が行われた可能性がある。 出土遺物から６世紀中頃（一部は６世紀後半にかけて）に第１・２・５・６号が，６世紀中頃から後半にかけて第４号古墳が，続いて６世紀後半に第３号古墳が造られている。第４号古墳の横穴式石室はこの地域で最も古いものであり，在地色の残る木棺墓から横穴式石室が導入される様子がよくわかる貴重な資料である。当初は竪穴式石室または箱式石棺と想定されていたように，横穴式石室が少ない地域として知られた当地域に，未だ発見されていない横穴式石室が多く存在する可能性がある。また，石室上層から炭化物や８世紀代の須恵器が出土し，横穴式石室の再利用が行われている。

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第69集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告（41）

長畑山北第１～６号古墳

発　行　日　　平成27（2015）年３月20日

編　　集　　公益財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036　広島市西区観音新町４丁目８番49号

TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951

発　　行　　公益財団法人　広島県教育事業団

印　刷　所　　鯉城印刷株式会社